

へ取つて終へば、天下は我が君の爲されたいと思ふままになりませう」と。頼朝も成程左様だとして隅田川を渡つて陣を張つた。そこへ畠山重忠や江戸重長が降参して来た。頼朝は、何故あつて三浦氏を攻めたのかと、大層厳びしく重忠を責め詰つた。重忠は對へて曰ふに「イヤ實は私の親父の重能が、丁度アノ時、京都の平氏の處に居りました。それで平氏に對する申譯にやつた迄のことで、私の本心からした事ではないのであります」と。實平や常胤がお願ひして重忠を許すことになつた。尤も只では許さぬ。第一線に立つて手柄を建て、それで自分の罪を償ひ返へすやうにと命じた。さういふ具合に源氏の勢がたん／＼良くなつて、武藏・相模の豪傑共が互に告げ合ひ相携へて降参して来た。頼朝の兵は皆で十餘萬からになつた。そこで愈々鎌倉に入り込み、そこへ本營を作つて、根據地とする事になつた。各將士に夫れ／＼手分けを定め、遂に自ら將帥となつて西方へ出かけて平氏を撃つことになつた。關八州の大將、侍は、先きを争うて追つかへ來り、頼朝に附いた。段々人数が増して、足柄山を越ゆる頃には、頼朝の軍勢は凡そ二十餘萬騎からになつた。北條時政は、武田信義等の兵を導きつれて頼朝の軍に合した。信義は義光の曾孫である。代々甲斐の國に居つたのである。そこで信義は、倅の信光、弟の安田義定等と國內の兵二萬を引きつれて、南の方駿河に入り込んだ。

語釋 濟河(河は隅田川) ○攻三浦氏(衣笠城を攻めし)

是時、大庭景親、與弟景尙、以兵千餘走、欲歸維盛。聞甲斐兵塞路、景親窘蹙、乃與首藤經俊、長尾定景等俱來降。景尙遇義定于波太山、戰敗遁走、歸維盛。信光又擊破州目代、斬長田入道父子。平賀義信、其子維義亦發信濃兵來屬。頼朝乃合諸軍、進與維盛夾富士河而陣。

訓讀 是の時、大庭景親、弟の景尙と、兵千餘を以て走り、維盛に歸せんと欲す。甲斐の兵、路を塞ぐと聞き、景親窘蹙し、乃ち首藤經俊、長尾定景等と俱に來り降る。景尙、義定に波太山に遇ひ、戰敗れ遁れ走り、維盛に歸す。信光又州の目代を擊破し、長田入道父子を斬る。平賀義信、其の子維義も亦信濃の兵を發し、來つて頼朝に屬す。頼朝乃ち諸軍を合はせ、進んで維盛と、富士河を夾んで陣す。

通釋 この時、大庭景親は、弟の景尙と、兵士千餘人を率ゐて逃げ、維盛の處へ行かうと思つた。甲斐の兵が、その途中を塞いでゐると聞いて、景親は弱つて終ひ、そこで首藤經俊、長尾定景等と一緒に降参して來た。景尙は、安田義定と、波太山で遭遇し、戦ひ敗れて遁げ走り、維盛の處へ行つた。武田信光は、又甲斐の目代を撃ち破り、長田忠致入道親子(義朝を殺した者)を斬つた。平賀義信と、その子維義も、亦信濃の兵を繰り出し、來つて頼朝に屬した。そこで頼朝は、諸軍を合はせて維盛と富士川を夾んで對陣することとなつた。

語釋 窘蹙(困つて難儀) ○波太山(駿河)

初維盛遇行旅自東來者、問頼朝兵數。對曰「八州草木、無不風靡。無山無川、皆其兵也。」已而頼朝至河東、白旗林立、望之無際。維盛召齋藤實盛、問曰「汝知東事者、度頼



朝兵、挽強如汝者幾人。曰、弓五箇力、箭十五拳、以貫甲七札、若是者、一隊不下二十人。人畜五六馬、馳山谷、如平地、戰而喪親、踐尸而進。如臣者、斗量帚掃、不足數耳。如我、畿内西國兵、么麼、尪弱、託喪稱創、動輒欲退、而所乘皆驚。豈可與彼輩較哉。蓋實盛與藤原忠清、議事不合。既對維盛、遂辭而西。一軍恐怖。

**訓讀** 初め維盛、行旅の東より來る者に遇ひ、頼朝の兵數を問ふ。對へて曰く、「八州の草木、風塵せざるは無し。山と無く川と無く、皆其の兵なり」と。已にして頼朝、河東に至る。白旗林立し、之を望むに際無し。維盛、齋藤實盛を召し、問うて曰く、「汝は東事を知る者なり。度るに頼朝の兵、強を挽く汝が如き者幾人ぞ」と。曰く、「弓は五箇力、箭は十五拳、以て甲七札を貫く、是くの如き者は、一隊に二十人を下らず。人ごとに五六馬を畜ひ、山谷を馳すること平地の如く、戰つて親を喪へば、尸を踐んで進む。臣が如き者は、斗量帚掃、數ふるに足らざるのみ。我が畿内、西國の兵の如きは、么麼尪弱、喪に託し創を稱し、動もすれば輒ち退かんと欲す。而して乘る所は皆驚なり。豈に彼の輩と較ぶ可けんや」と。蓋し實盛は藤原忠清と、事を議して合はず。既に維盛に對へて遂に辭して西す。一軍恐怖す。

**通釋** 初め維盛は東方から來た旅人に會つて、頼朝の兵數はどれ位あるかを尋ねた。その時その旅人は對へて曰ふに「關八州の草や木までも頼朝の威風に靡かぬものとはありません。山といふ山、川といふ川、到る處源氏の兵で埋まつて居ります」と。かくて頼朝の軍が富士河の東岸に陣取つた。源氏の白旗が林のやうに立つてゐ

て對岸から之を望むに際涯もない。維盛は(恐くなつて)齋藤實盛を召し出して、問うて曰ふには「其の方ばかりとも東國の生れであるから、東方の事情には精通してあるだらう。お前ほど強い弓を挽く事の能き者は、頼朝の部下に何人位あるか」と。實盛が之に對へて曰ふに「さやうです、五人張りの強い弓で、十五拳もあらうといふ箭を使ひ、それで鎧の七枚も射ち通すことの出来るほどの者は、先づ一隊に二十人より少くはありません。そして人毎に銘々五頭や六頭の馬を飼つてゐまして、山や谷を馳せ廻ることは、まるで平地を走つてゐるやうに平氣で、戰爭で親が討死しましても、其の子は親の死骸を踏み越えて進んで行く程、恐ろしい勢です。私のやうな者は、升で量り、帚ではき捨てる位澤山居りまして、逆も數の内に入るほどの者ではありません。それと引き比べて我が畿内西國の兵は、小柄で弱蟲で、ヤレ親の喪で御座るの、兄弟が戦死したからで御座るのと、不幸にかこつてたり、ヤレ削が痛むから療治をしたう御座るのと、削を口實にしたりして、何うかすると戦線の外へ退却したがる。それに御覽なさい、アノ乗つてゐる馬は、どれもこれも碌なのはゐない驚馬です。どうして東軍の輩とは逆も比べものになりはしません」と。實盛がこんなことを言つたのは、實は實盛は藤原忠清と或る事の相談で意見が合はなかつた。それで向つ腹を立ててゐたからである。このやうに言ひ度だけの事を維盛に言ひ放つて、彼は遂に辭職して西の方へ歸つて行つた。(西軍では最も強い實盛が私共は數の内に入らぬ)などと脅かしたものだから、平氏の全軍はこれを聞き傳へ非常に恐れをなして終つた。

**語釋** 八州草木云々(草木まで威服してゐる。眞逆草木が威服される譯はないが、斯くいつて、いかにも頼朝の豪勢なことを) 〇知東事者(實盛は武藏長井莊の人) 〇十五拳(十五つかみ。矢は) 〇七札(札は甲葉で、鎧を七枚) 〇斗量(斗は大きな升、升で量り、帚で掃) 〇么麼(長くない)



いひ、細小なるを廢といふ。身體の小さいこと。○託喪(喪にあふと軍役を免ぜられ、たから、それにかこつける。)

維盛以忠清爲先鋒、進至河岸。河水方漲、兩軍相持未戰。武田信光爲我先鋒。遣使平氏、營與約戰期。平氏不答。信光乃潛兵由間道、夜出西軍後。道徑大澤。鶯鴨驚起。西軍大駭潰走。賴朝欲追走。遂西常胤、廣常、義澄等皆說曰、「常陸、陸奥、諸州未服。恐窺我後。先定關東。然後西伐。未爲晚也。」賴朝從之。乃令信義守駿河、義定守遠江。而引兵還。次于黃瀬河。

維盛、忠清を以て先鋒と爲し、進んで河岸に至る。河水方に漲り、兩軍相持して未だ戦はず。武田信光、我が先鋒たり。使を平氏の營に遣はし、與に戰期を約す。平氏答へず。信光乃ち兵を潛め、間道より、夜、西軍の後に出づ。道、大澤を徑る。鶯鴨驚き起つ。西軍大に駭き潰走す。賴朝、走るを追ひ遂に西せんと欲す。常胤、廣常、義澄、皆説いて曰く、「常陸、陸奥の諸州未だ服せず。恐らくは我が後を窺はん。先づ關東を定め、然後西伐するも、未だ晚しと爲さざるなり」と。賴朝之に從ひ、乃ち信義をして駿河を守り、義定をして遠江を守らしめ、而して兵を引いて還り、黃瀬河に次す。

維盛は實盛に還られたので、忠清を先鋒となして、河の西岸迄進み出でた。丁度河の水が漲つてゐて渡れないので、戦ふこともならず、河を夾んで對陣といふことになつた。東軍では武田信光が先鋒を承つてゐた。

それで信光は平氏の兵營へ使者を立てて、合戰の時期を約束しようとした。平氏の方では、それには何等の返答もせなかつた。そこで信光は、人目につかぬやうに、コツソリ夜、兵を出して、裏路から傳つて西軍の後方に立ち廻らせた。所がその途中に大きな澤があつて、其處を通つた。足音で、眠つてゐた水禽が驚いて飛び立つた。その羽音に、怖ち氣づいてゐた西軍は吃驚仰天して、「ソラ来たツ」とバタ／＼潰えて逃げ走つた。賴朝は走げるのを追つかけて乍ら、尙ほ一氣に西の方へ攻め行かうとした。常胤、廣常、義澄等が皆口を揃へて曰ふのに、「常陸や陸奥の諸國がまだ服從して居りません。餘り深か入りをすると、後ろを覘はれる恐れがあります。ですから先づ第一に關東を平定して置いて、それから西の方を討つたつて、決して遅くはありません」と。賴朝もその説に従ひ、そこで信義を止めて駿河を守らせ、義定に遠江を守らせ、自分は兵を連れて東の方鎌倉へ引き還し、駿河の黃瀬河まで来て、そこに宿營してゐた。

○鵝鴨(かも) ○常陸(佐竹義政) ○陸奥(清原秀衡) ○黃瀬河(駿河)

會有一將、率二十騎來。因土肥實平求見賴朝。賴朝問狀。對曰、「其年齒二十左右、面目俊邁。」曰、「是陸奥九郎也。」亟呼入。實平導入幕。果義經也。曰、「聞阿兄起義、喜不自禁。固辭秀衡而來。」賴朝大喜曰、「八幡公之東征也、遇新羅公來援。曰、「猶見故將軍也。今吾遇汝、猶見頭公也。」兄弟相對涕泣。是時、賴朝諸弟、希義在土佐、爲平氏所殺。範賴



全成・義圓、皆來歸。

會一將有り、二十騎を率ゐて來る。土肥實平に因つて、頼朝に見えんことを求む。頼朝、狀を問ふ。對へて曰く、「其の年齒二十左右、面目俊邁なり」と。曰く、「是れ陸奥の九郎ならん」と。亟に呼び入らしむ。實平導きて幕に入る。果して義經なり。曰く、「阿兄、義を起すと聞き、喜び自ら禁ぜず、秀衡を固辭して來れり」と。頼朝大に喜んで曰く、「八幡公の東征するや、新羅公の來り援くるに遇ふ。曰く、「猶ほ故將軍を見るがごとし」と。今吾れ汝に遇ふ、猶ほ頭公を見るが如し」と。兄弟相對して涕泣す。是の時、頼朝の諸弟、希義は土佐に在りて、平氏の殺す所と爲る。範頼、全成、義圓は皆來り歸す。

通釋 すると丁度一人の大將が二十騎ばかりの兵を率ゐてやつて來た。その者が土肥實平に頼んで、頼朝に會見を申し入れた。頼朝はその男の様子を尋ねた。實平は對へて曰ふに「左様、其の年の頃は二十前後で、その顔立は人並すぐれた人です」と。頼朝は「それぢや陸奥にゐた九郎義經だらう」と曰つた。直ぐ呼び入れさせた。實平は案内をして幕中へ入れた。果してそれは義經であつた。そして義經は曰ふのに「お兄様が、義兵をお擧げなされたと聞きまして、もう嬉しくて堪まらず、秀衡の止めるのも、たつて斷りまして、やつて參りました」と。頼朝は大層喜んで曰ふには「昔、八幡公(義家)が東方を征伐なされた時、新羅公(義光)が官職を捨てて加勢に行かれた。八幡公は大層お喜びになり「お父上様(頼義)にお目に懸るやうな氣がする」と仰せられたさうだ。今自分も其方に遇つて、やはり御父上左馬頭殿(義朝)にお目に懸るやうな氣がする」と。兄弟向き合つて嬉し泣きに泣いた。この時、頼朝の諸弟の内、希義は土佐にゐて平氏の爲めに殺された。範頼、全成、義圓は皆頼朝の所へやつて來た。

語釋 左右(前後と) ○東征(後三年)

頼朝還鎌倉、大行刑賞。梟長田入道父子、首斬大庭景親。乃召首藤經俊、言曰、「鼠圖猫如何、將斬之。其母嘗乳養頼朝。因爲請哀宥之。賜長尾定景于岡崎。義實曰、「乃子之仇也。」義實又請而宥死。伊東祐親欲航海西奔、爲天野遠景所捕、囚于三浦氏。召祐清、欲報其德、祐清固辭、以嘗受平氏厚恩、請去而從之。頼朝義而許之。佐佐木義清降。亦以父兄故宥之。

訓讀 頼朝、鎌倉に還り、大に刑賞を行ふ。長田入道父子の首を梟し、大庭景親を斬る。乃ち首藤經俊を召し、言つて曰く、「鼠、猫を圖る、如何ん」と。將に之を斬らんとす。其の母嘗て頼朝を乳養せり。因つて爲めに哀を請ふ。之を宥す。長尾定景を岡崎義實に賜ひて曰く、「乃が子の仇なり」と。義實又請うて死を宥す。伊東祐親、海に航して西に奔らんと欲し、天野遠景の捕ふる所と爲り、三浦氏に囚はる。祐清を召して其の徳に報いんと欲す。祐清固辭し、嘗て平氏の厚恩を受くるを以て、去つて之に従はんと請ふ。頼朝、義として之を許す。佐佐木義清降る。亦父兄の故を以て之を宥す。

通釋 頼朝は、鎌倉にかへり、大に刑罰恩賞を行つた。長田入道忠致親子の首を獄門に曝し、又大庭景親を斬



つた。そこで、首藤經俊を呼んで、言つて曰ふのに「お前は前に、余が義兵を擧げたことを鼠が猫を圖るやうなものだといつたが、どんなもんだ」と。之を斬殺さうとした。その母親は、かつて頼朝に乳を與へて、育てたことがある。それで其の母親が經俊の爲めに憐憫を乞うた。そこで之を赦した。又長尾定景を岡崎義實に與へて曰ふには「お前の倅義忠の仇である」と。義實は願つて定景の死を宥してもらつた。伊東祐親は、海を渡つて、京都の方へ奔らうと思ひ、天野遠景に捕へられ、三浦氏の許に禁錮せられた。その子祐清を呼んで前日の恩に報いようと思つた。祐清は固く之を辭退し、自分は嘗て、平氏の厚い恩惠を受けて居るから、こちらを御免蒙つて平家の方に屬きたいと願つた。頼朝も之を義に叶つたこととして許してやつた。佐佐木義清も降參した。これもその親や兄が、皆味方の爲めに働いた故に宥してやつた。

**話釋** 乃子仇(義忠は石橋の戰で討死した) ○報其德(祐親が頼朝を殺さうとした) ○父兄(父秀義、兄定綱、經高、盛綱、高綱)

十一月、頼朝將兵攻佐竹義政于常陸。以廣常爲其姻戚、使說降、誘殺之。其姪秀義據金砂城。廣常又誘秀義叔父義弘以利、令爲內應。潛兵入城、擊走秀義、分其邑賜將士。十二月、新館成、徙居焉。令將士三百餘人各占邸第、別置士所、以和田義盛充別當焉。踐其前諾、選壯士十一人、每夜直寢室、以自衛。

十一月、頼朝、兵に將として佐竹義政を常陸に攻む。廣常、其の姻戚たるを以て、説き降らしめ、之を誘殺す。其の姪秀義、金砂城に據る。廣常又秀義の叔父義弘を誘ふに利を以てし、内應を爲さしめ、兵を潛めて城に入り、撃つて秀義を走らせ、其の邑を分ちて將士に賜ふ。十二月、新館成り、徙つて居る。將士三百人をして、各邸第を占めしめ、別に士所を置き、和田義盛を以て別當に充つ。其の前諾を踐めるなり。壯士十一人を選び、毎夜、寢室に直せしめ、以て自ら衛る。

**通釋** 十一月、頼朝は兵に將として、佐竹義政を常陸に攻めた。平廣常はその縁故の者であつたので、其の方から義政を説いて、降參させ、義政をおびき寄せて殺して終つた。その甥の秀義は、金砂城に立て籠つてゐた。廣常は、秀義の叔父義弘を利益で誘惑して裏切らせ、兵士を匿して、こつそり城に入り込み、撃つて之を走らせ、秀義の領地を分けて、將士に賜はつた。十二月に新しい屋敷が出来上つて、頼朝は其處に徙り住まつた。將士三百餘人の者には夫々屋敷を構へさせ、別に士所を置いて、和田義盛をその長官にした。これは前日の船中の約束を履行したのである。それから強壯な侍十一人を選んで、毎晩頼朝の寢室に宿直させて、自分の護衛に當らせた。

**語釋** 金砂城(常陸)

當是時、諸道豪傑起兵、以應頼朝者甚多。河野氏起南海、菊池氏緒方氏起鎮西、山木氏柏木氏起近江、而木曾義仲起於信濃。義仲於頼朝爲從弟。其父義賢爲義平所殺者也。義仲幼孤、畠山重能受義平命、欲殺之、而不忍、託之齋藤實盛。實盛更託



之中原兼遠于木曾稱木曾氏。義仲常憤宗族殘滅陰圖報仇與羣兒嬉戲每爲騎射狀稍長壯偉多力善射潛入京師覬平氏者數及以仁王令旨至喜而集兵立得千餘人平氏聞之召詰兼遠兼遠教義仲出依根井行親招甲斐下野諸源聞石橋事起欲赴援會州人笠原賴直爲平氏來攻義仲擊走之因據木曾峽

**訓** 是の時に當り、諸道の豪傑兵を起し、以て頼朝に應ずる者甚だ多し。河野氏は南海に起り、菊池氏、緒方氏は鎮西に起り、山木氏、柏木氏は近江に起り、而して木曾義仲、信濃に起る。義仲は頼朝に於て從弟たり、其の父義賢は義平の殺す所と爲りし者なり。義仲、幼にして孤なり。畠山重能、義平の命を受け、之を殺さんと欲して、忍びず。之を齋藤實盛に託す。實盛、更に之を中原兼遠に木曾に託し、木曾氏と稱す。義仲、常に宗族の殘滅せるを憤り、陰に仇を報ぜん。羣兒と嬉戲するに、毎に騎射の狀を爲す。稍々長じて壯偉、多力にして善く射る。潛に京師に入りて、平氏を覬ふこと數くなり。以仁王の令旨至るに及びて、喜んで兵を集め、立ちどころに千餘人を得たり。平氏之を聞き、召して兼遠を詰る。兼遠、義仲に教へ、出でて根井行親に依り、甲斐、下野の諸源を招かしむ。石橋の事起るを聞いて、赴き援けんと欲す。會々州人笠原賴直、平氏の爲めに來り攻む。義仲擊つて之を走らし、因つて木曾の峽に據る。

**通釋** 此の時、諸國の豪傑で、兵を擧げて頼朝に味方する者が随分あつた。河野氏は南海道に起り、菊池氏、緒方氏は九州に起り、山木氏、柏木氏は近江に起り、而して木曾義仲は信濃に起つた。木曾義仲は、頼朝には從弟に當つた。義仲の父の義賢といふのは、惡源大義平の爲めに殺された人である。さういふ次第で義仲は幼い時から孤兒となつたのである。(義平は後難を恐れて、義仲を片附けて置かうと、畠山重能に命じた) 重能は義平の命を受けて、義仲を殺さうとは思つたが、可哀相で殺すに忍びない。そこで、彼を齋藤實盛に預けた。實盛は更に彼を、木曾に在つた中原兼遠の處へ預け、それで義仲を木曾氏と稱する事になつた。義仲は常も一族の者が、平氏の爲めに散々な目に遭つて滅されたことを憤慨し、内々平氏へ仕返しをしてやらうと考へてゐたので、自然多勢の小兒等と戯れ遊ぶにも、常に馬に乗つたり、弓を射つたりする様をしてゐた。やゝ生長してからは、骨格は偉大、それに力があつて、弓も上手であつた。彼は一度ならず、二度三度、こつそり京都へ入り込んで、平氏をつけ狙つたこともあつた。以仁王の令旨が來たので、義仲は大に喜び、兵士を召集して、即座に千餘人の軍勢を得た。平氏がこの事を聞いて、中原兼遠を呼び寄せて、詰問に及んだ。そこで兼遠は、自分の處に義仲を置くことは不利であるから、義仲によく意を含めて、自分の處を出て、根井行親の處へ頼らせ、其處で甲斐、下野の諸の源氏を招かせることにした。その内に石橋山で頼朝が旗揚げしたと聞き、援けに行かうと思つた。丁度そこへ信濃の人で笠原賴直といふ男が、平氏の爲めに義仲を攻めて來た。義仲は賴直を撃つて、之を走らせ、そこで木曾の谷間に立て籠ることとなつた。

**註釋** 河野(伊豫) ○菊池(肥後) ○緒方(豐後) ○山木(東鑑には山本義經に作る) ○柏木(義兼、山本義經の弟) ○從弟(義仲の父の義賢は爲義の時二歳であつた) ○中原兼遠(義仲の乳母の夫で、この時信濃の權守であつた) ○木曾(信濃に在り) ○甲斐・下野(甲斐に逸見、武田、一條、下野に新田、足利)

養和元年春、清盛薨、宗盛嗣。以遺命、遣諸弟、將兵東下。頼朝聞之、遣和田義盛、援安



田義定守遠江。賴朝叔父義廣在常陸。欲襲取鎌倉。聚兵三萬。入下野。誘足利忠綱。小山朝政。忠綱應之。朝政詐應。設伏擊破之。義廣奔歸於義仲。

**訓讀** 養和元年春、清盛薨じ、宗盛嗣ぐ。遺命を以て、諸弟を遣はし、兵に將として東下せしむ。賴朝之を聞き、和田義盛を遣はし、安田義定を援けて遠江を守らしむ。賴朝の叔父義廣、常陸に在り、襲うて鎌倉を取らんと欲す。兵三萬を聚め、下野に入り、足利忠綱、小山朝政を誘ふ。忠綱之に應ず。朝政は詐り應じ、伏を設け、撃つて之を破る。義廣奔り義仲に歸す。

**通釋** 養和元年の春、清盛は薨去して、宗盛が跡目を相續した。宗盛は清盛が遺言して置いた命令によつて、若い者どもを派遣し、兵を率ゐて關東へ下らせた。賴朝は其のことを聞いて、和田義盛を遣はし安田義定を援けて遠江を守らせることにした。賴朝の叔父の義廣は、常陸に居つたが、不意討して鎌倉を占領しようと思つた。彼は兵三萬を聚めて、下野に入り、足利忠綱、小山朝政を誘うた。忠綱は之を承諾した。朝政は承諾した振りして伏兵を隠し置いて、之を撃ち破つた。義廣は走つて、義仲の處へ赴いた。

賴朝季父行家在美濃與平氏戰敗退。賴朝遣弟義圓將兵赴援。三月、行家義圓以兵二千與平重衡七千騎夾墨股河軍。義圓夜挺身渡河爲平氏邏騎獲戰死。行家繼進不利。戰且走。保矢矧川。使人爲役夫。狀西行。遇西兵。問鎌倉。援兵來否。對曰、

「前軍及菊河後軍及見附。重衡大恐而退。行家使人馳徇美濃。尾張曰、平氏走矣。不射之者、我敵也。」二國人爭起要擊。西軍狼狽而去。行家欲遂入京師。請援於山徒。山徒不應。奔歸於賴朝。

**訓讀** 賴朝の季父行家、美濃に在り。平氏と戦ひ敗れ退く。賴朝、弟義圓を遣はし、兵に將として赴き援けしむ。三月、行家、義圓、兵二千を以て、平重衡の七千騎と墨股河を夾んで軍す。義圓、夜身を挺きんで河を渡り、平氏の邏騎に獲られて戦死す。行家繼ぎ進みて利あらず。戦ひ且つ走り、矢矧川を保つ。人をして役夫の狀を爲して西行せしむ。西兵に遇ふ。鎌倉の援兵來るや否やを問ふ。對へて曰く、「前軍は菊河に及び、後軍は見附に及ぶ」と。重衡大に恐れて退く。行家、人をして馳せて美濃、尾張を徇へしむ。曰く「平氏走る。之を射ざる者は我が敵なり」と。二國の人争ひ起りて要撃す。西軍狼狽して去る。行家、遂に京師に入り、援を山徒に請はんと欲す。山徒應ぜず。奔つて賴朝に歸す。

**通釋** 賴朝の季父の行家は、美濃に居つた。平氏と戦ひ敗れて退却した。賴朝は弟の義圓を遣つて、兵に將として行家を援けに行かせた。三月行家、義圓は、兵二千人を率ゐて、平重衡の七千騎の軍と墨股河を夾んで相對した。義圓は、夜ぬけ出して河を渡り、功名を急いだため平氏の斥候の騎兵につかまへられて、討死した。行家は、その後から進んで見たが、これも負けて終つた。戦ひながら逃げて、矢矧川を守つた。そこで一策を案じて人に人夫の姿をさせて、西の方へ行かせた。其の男は平氏の兵に遇つた。平氏の兵は鎌倉の援兵が来たか、







仲數捷張於北國。平宗盛嘗養其兄女。欲以妻義仲。與連和共東。賴朝大怒。會行家來鎌倉。請邑自給。賴朝曰。吾取十州。義仲取五州。公亦盍自取。行家慍。以千餘騎去。歸義仲。賴朝益怒。

**訓讀** 武田信光、其の女を以て義仲の子義高に妻はさんと欲す。義仲曰く、「娶るも妾となさんのみ」と。信光怒り、義仲を賴朝に構へて曰く、「義仲數捷ちて、北國に張る。平宗盛、嘗て其の兄の女を養ひ、以て義仲に妻はし、與に連和し、共に東せんと欲す」と。賴朝大に怒る。會行家、鎌倉に來りて、邑を請ひ自ら給せんとす。賴朝曰く、「吾れ十州を取り、義仲五州を取る。公も亦盍自ら取らざる」と。行家慍り、千餘騎を以て去り、義仲に歸す。賴朝益々怒る。

**通釋** 武田信光は、自分の娘を、義仲の子の義高に、嫁にやらうと思つた。すると義仲がいふのに「其の方の娘などは、貰つたつて本妻には出来ぬ、マア妾にでもしてやらう」と。信光は怒つて、義仲を賴朝に讒言して曰ふのに「義仲は度々戰爭に勝つて、北國に勢力を張つて居ります。平宗盛は、以前、自分の兄の娘を養女にして養つてゐましたが、それを義仲に嫁入らせ、そして義仲と和睦連合して、東方のあなた様を攻めようと思つてゐるのであります」と。賴朝はそれを聞いて大に怒つた。丁度その時、美濃・尾張の地方から行家が戰爭に敗れて、鎌倉にやつて來て、領地を戴いて、自活して行き度いと、願ひ出た。賴朝がいふのに「自分は今十ヶ國を取つたし、アノ義仲は五ヶ國を取つてゐる。公も我々のやうに、何故自分で領地を攻め取らないんだ」と。行家は佛然

として千餘騎を率ゐて鎌倉を去り、義仲に附いた。それで賴朝は益々怒つて終つた。

**語釋** 構(無いことを有るやうに組) ○兄女(貞盛の娘)

二年三月、親將十萬騎、入信濃。義仲集將士議樋口兼光。今井兼平、欲壁于富部。拒之。義仲曰。世皆言源氏相肉。今又舍深仇之平氏。而與同宗交兵。若人笑何。乃引兵避之。越後。賴朝亦引兵還。使言義仲曰。平氏罪惡貫盈。朝廷命我宗討之。當日夜赴命。而十郎私構兵圖我。子乃庇之。舍西向東。何也。子苟無他心。則請速逐十郎。否則得養貴息爲子。二者不聽。則將以八州之卒。與子相見。義仲將小室忠兼勸聽其請。兼平曰。君聞大藏之事乎。佐公豈終釋然於君哉。不若蚤絕之。義仲從忠兼言。遣義高爲質。

**訓讀** 二年三月、親ら十萬騎に將として、信濃に入る。義仲、將士を集めて議す。樋口兼光、今井兼平、富部に壁して之を拒がんと欲す。義仲曰く、「世、皆言ふ、源氏相肉すと。今又深仇の平氏を捨てて、同宗と兵を交ふ。人の笑をいかんせん」と。乃ち兵を引き、之を越後に避く。賴朝も亦兵を引きて還り、使をして義仲に言はしめて曰く、「平氏の罪惡貫盈す。朝廷、我が宗に命じて之を討たしむ。當に日夜、命に赴くべし。而るに十郎、私に



兵を構へ我を圖る。子乃ち之を庇ひ、西を捨てて東に向ふとは何ぞや。子苟も他心無くんば、則ち請ふ、速に十郎を逐へ。否らずんば、則ち貴息を養ひて子と爲すを得ん。二者聽かずんば、則ち將に八州の卒を以て子と相見えんとす」と。義仲の將小室忠兼、勸めて其の請を聽かしむ。兼平曰く、「君、大藏の事を聞か。佐公豈に終に君に釋然たらんや。蚤く之と絶つに若かず」と。義仲、忠兼の言に従ひ、義高を遣はして質と爲す。

そこで頼朝は二年の三月に、親ら十萬騎の兵を率ゐて、信濃に攻め入つた。義仲の方でも將士を集めて、大評定を初めた。樋口兼光と今井兼平とは、富部に壘を築いて、頼朝勢を拒がうといふ希望であつた。所が義仲が曰ふのに「世間では、皆源氏の者共が共喰ひをやつてゐると言つてゐる。それに今自分がアノ深い仇である所の平氏を放擲らかして、同族の頼朝と戦争したとする。すると愈々世の物笑ひの種になるに決つてゐる。」と。そこで兵を引きつれて、頼朝の軍鋒を越後に避けた。頼朝も亦兵を引き返へして、鎌倉へ還り、そして使をやつて義仲に言はしめていふのに、「平氏の罪惡は天地に貫き盈つる程である。であるから朝廷では我が一族に命じて、之を討たしめられてゐるのである。して見れば我々は晝夜の別なく、その御命令通りに、一生懸命、平家追討に當らねばならぬ。それなのにアノ十郎行家は勝手に敵對行爲をなして、私を作さうと企ててゐる。そんな男を、君は庇つてやり、西の方、平家追討を捨てて、東のこの自分に刃を向けるとは何ういふ譯か。君が若し他心なく、我が輩と一緒に事をするのなら、どうか早速彼れ十郎行家を逐つ拂つたら宜からう。若しそれが出來ぬのなら、君の息子を養子に貰らつて、自分の子とすることに承諾して貰らひ度い。もしもこの二つの希望條件を二つとも容れて貰らへなければ、自分は關八州の兵士を率ゐて、君と戰場にて見参しよう」と。義仲の將の小室忠兼は、

頼朝の要求に従ふやうに勸めた。兼平は反對して曰ふのに「我が君には、御父君が大藏谷で無念の御最後を遂げられた一件をお聞き及びて御座いませうか。(あの時、頼朝の兄の惡源大義平が、君の御父君を大藏谷で亡きものになりました。つまり我が君に取つては、頼朝は仇筋で御座いますから、頼朝だつて、それを知らないことはないだから) 頼朝が、表面ではこんな道理らしい事を申してゐましても、どうしていつまでも、サツパリと打ち解けることがありませうぞ。それよりか今の内に早く絶縁した方が宜しいでせう」と。義仲は忠兼の言に従ひ、息子の義高を鎌倉へやつて、人質とした。

〔語釋〕 富部(信濃) ○貫盈(天地に貫きみつる。罪が十分に積り滿つること) ○西東(西は平氏、東は頼朝) ○十郎(行家) ○養貴息(養子にするといふことで、實は人質にするのである) ○釋然(心がサツパリと打ち解けること)

四月、平氏以十餘萬騎、東伐、先擊義仲、義仲乃遣其將仁科幸弘等、拒之于燧城、瀦日野河、爲濠。西兵不能進。我新附將齊明者、通款平氏、決水導兵。城輒陷。西兵乘勝、連陷諸城。

四月、平氏、十餘萬騎を以て東伐し、先づ義仲を撃つ。義仲乃ち其の將仁科幸弘等を遣はし、之を燧城に拒がしむ。日野河を濠して濠と爲す。西兵進む能はず。我が新附の將齊明なる者、款を平氏に通じ、水を決して兵を導く。城輒ち陷る。西兵、勝に乗じ、連りに諸城を陷る。

〔通釋〕 四月に平氏が十萬餘騎の軍勢を率ゐて、東伐し、先づ義仲を撃つた。そこで義仲は、其の將の仁科幸弘



等をやつて、平氏の軍を燧城で拒がせた。その時日野河の水を溜めて濠とした。それが爲めに平氏の軍は進出することが出来なかつた。新たに義仲の方へ附いた將の齊明といふ者が、裏ぎりして、平氏に内通し、水を切り落して濠を乾し、平氏の兵を導いた。さしもの燧城は譯もなく陥落して終つた。そこで平氏の軍は勝ちに乗じて、引き續き諸城を攻め落した。

燧城(前越) ○日野河(前越)

五月、西將平盛俊進至般若野。義仲在越後國府。遣今井兼平、馳先奪寒原之險。擊破盛俊。西軍退陣于志雄。砥並二山。砥並山南有栗殼壑。深數千刃。義仲發國府。行收兵。得五萬騎。閱兵于六動寺。自向砥並山。謂樋口兼光等曰。彼衆我寡。彼舍山東下。就平地戰。非我利也。我先陣山東麓。敵必下巔而陣。我一軍則遠出山西。驅敵于南壑中。可一舉而塵也。諸將皆曰。善。乃分萬人屬兼光等。而自將三萬人。進至東麓。益旗幟蔽林。而軍。平氏望見之。果下巔。陣于山腹。兩軍射戰終日。而兼光等已在敵背。日暮。萬人鼓譟突出。義仲麾兵而上。夾擊西軍。西軍大駭潰走。陷南壑。死者幾二萬人。壑爲填塞。平氏將帥。僅以身免。收散兵。保佐良岳。初。義仲使行家別將兵向志

雄山。戰不利。義仲赴援。西軍不戰而走。

五月、西將平盛俊、進んで般若野に至る。義仲、越後の國府に在り。今井兼平を遣はし、馳せて先づ寒原の險を奪ひ、盛俊を擊破せしむ。西軍退いて、志雄・砥並の二山に陣す。砥並山の南に栗殼壑有り、深さ數千仞。義仲、國府を發し、行々兵を收め、五萬騎を得、兵を六動寺に閱して、自ら砥並山に向ふ。樋口兼光等に謂つて曰く、「彼は衆く我は寡し。彼れ山を捨てて東下し、平地に就いて戰はば、我が利に非ざるなり。我れ先づ山の東麓に陣せば、敵必ず巔を下つて陣せん。我が一軍則ち遠つて山西に出で、敵を南壑中に驅らば、一舉にして塵にす可きなり」と。諸將皆曰く、「善し」と。乃ち、萬人を分ち、兼光等に屬せしめ、而して自ら三萬人に將とし、進んで東麓に至り、旗幟を益し、林に蔽はれて軍す。平氏之を望見し、果して巔を下りて山腹に陣す。兩軍射戰終日、而して兼光等已に敵背に在り。日暮れ、萬人鼓譟して突出す。義仲、兵を麾いて上り、西軍を夾撃す。西軍大に駭き潰走し、南壑に陥りて死する者、幾んど二萬人。壑爲めに填塞す。平氏の將帥、僅に身を以て免れ、散兵を收め、佐良岳を保つ。初め義仲、行家をして別に兵に將とし志雄山に向はしむ。戰、利あらず。義仲赴き援く。西軍戦はずして走る。

五月に西軍の將平盛俊が、般若野まで進出して來た。その時義仲は、越後の國府にいた。今井兼平をやつて、大急ぎで先づ寒原の險要を奪取させ、そこで盛俊の勢を撃ち破らせた。平氏の軍は一と先づ退却して、志雄、砥並の兩山に陣立てをした。この砥並山の南に栗殼壑といふ、深さが數千仞もあらうといふ、深い壑があった。そこで義仲は國府を出發して、途中行く／＼兵を徵發し、五萬騎を得、六動寺でそれ等の兵士を檢閲てか



ら自分は砥並山に向つた。その時、樋口兼光等に謂つて曰ふには「敵は多勢で味方は小勢である。彼れが若しも山の陣を棄て、東の麓へ下りて来て、平地で戦ひでもしようものなら、それこそ當方の不利になつて終ふ。だから當方から先づ山の東の麓に陣屋を布くと、敵は屹度山の頂邊から少し下りて、對抗の陣を立てるであらう。さうさせて置いて、一方、我が一隊の軍勢は、グルリ迂廻して、山の西の方へ出で、兩側から攻め立てると、自然敵を南方の壑へ追ひ込むことになり、一と戦で敵を皆殺しにすることが出来る」と。諸將は皆、口を揃へて賛成した。そこで義仲は、一萬人の兵を分けて、兼光等の手下となし、そして自分は三萬人の大將になつて、山の東の麓に行き、そして旗や幟の数を増して威勢を示し、その邊の林の蔭に身を隠して陣を取つた。平氏の方では之を望み見て、義仲の思つた通り頂上から下り、山の中腹に陣を張つた。此の兩軍が終日、射ち合ひをやつてゐる。間に、早や兼光等の一隊は、敵の後へ廻つた。日は暮れて、兼光等の一萬人の軍勢が、太鼓を鳴らし、鬨の聲を揚げて突き進み出た。義仲はコソと、部下を指麾して山に駆け上り、平氏の軍を夾み撃ちにした。西軍は大に面食ひ崩壊して逃げ走り、南の壑(栗殼壑)に陥つて死んだ者が、殆んど二萬人からゐた。それが爲めにさしも深い壑が、死骸で埋まる程であつた。平氏の總大將は、命からんくやつとの事で身を免かれ、散りくになつた兵を寄せ集め、佐良岳を保持した。初め義仲は、行家に別に兵を與へて、一方の隊將となし、志雄山に差し向けた。けれども行家は戦ひに敗れた。義仲はそれを援けに行つた。西軍は一戦も交はさず逃げ走つて終つた。

寒原(越後越中)の界(六動寺)中(越)○蔽(林)に蔽はれて、兵數を知らしめないやうにする。一説に「林」○將帥(維盛を)と讀んで、林を蔽ひかくす位旗幟を立て列ねたと。

六月、追走陣于小楯林相持未戰西兵獲我芻者問曰北軍何謀曰謀夜襲西兵怖走爭渡安宅渡溺者千餘既渡截橋而陣義仲至渡頭濁流方漲試放馬十匹水及馬腹全軍從之終大破之乘勝追走進至越前獲齊明及齋藤實盛等平氏既連爲義仲所破走歸京師義仲進至近江使其史覺明牒誘山徒七月濟湖軍于叡山平宗盛大恐舉族挾乘輿西奔獨賴盛其母嘗德於賴朝賴朝間通書招之且欲報其臣宗清故不從奔法皇避平氏之叡山義仲與行家帥北兵六萬分路入京師京師人相告曰不圖今日復見白旗也

六月、走るを追うて小楯林に陣し、相持して未だ戦はず。西兵我が芻者を獲て問うて曰く「北軍何をか謀れる」と。曰く「夜襲を謀る」と。西兵怖れ走り、争うて安宅渡を渡り、溺るる者千餘、既にして渡り、橋を截つて陣す。義仲渡頭に至る。濁流方に漲る。試に馬十匹を放つ。水馬腹に及ぶ。全軍之に従ひ、終に大に之を破り、勝に乗して走るを追ひ、進んで越前に至り、齊明及び齋藤實盛等を獲たり。平氏連りに義仲の破る所と爲り、走つて京師に歸る。義仲進んで近江に至り、其の史覺明をして牒して山徒を誘はしむ。七月、湖を濟り、叡山に軍す。平宗盛大に恐れ、舉族、乘輿を挾んで西奔す。獨り賴盛は、其の母嘗て賴朝に徳す。賴朝間に書を通じて之を招く。且つ其の臣宗清に報いんと欲す。故に従ひ奔らず。法皇、平氏を避けて、叡山に之く。義仲、行家と北兵六萬を帥る、路を分ちて京師に入る。京師の人相告げて曰く「圖らざりき、今日復白旗を見んと



は」と。

六月、逃げるのを追つかけて能登の小楯林に陣取り、ちつとして戦はふとしない。平氏の兵は我が草刈男を捕へて、それに問うて曰ふには「北軍ではどんなことを計畫してあるか」と。草刈男は曰ふのに「夜討ちを謀つてゐます」と。平氏の兵はそれを聞き怖れて逃げ出し、安宅渡を渡るときに皆先きを争つたので、それが爲めに溺れ死んだ者が千餘人もあつた。渡つて終つてから橋を斷ち切つて陣取つた。義仲は渡し口まで来た。濁つた水が滔々と流れてゐた。試めに馬を十匹水の中へ放つて見た。水は馬の腹までの深さがあつた。そこで全軍はその後に従ひ、とう／＼敵を敗り、勝つた勢につけ込んで逃げるのを追つかけ、進んで越前に至り、齊明や齋藤實盛等を討ち取つた。平氏は義仲の爲めに續け様に打ち破られ、逃げて京都へ歸つた。義仲は進んで近江に至り、部下の書記の覺明といふ者をして、一札書かせて、比叡山の僧徒を引き入れるやうに誘はせた。七月、義仲は琵琶湖を渡つて比叡山に陣取つた。平宗盛は、義仲の進撃を大に恐れて、遂に一族全部で、天子をお連れ申して、西國へ出奔した。ただ頼盛は、其の母親の池尼が、嘗て頼朝の命を助けた恩義があつた。頼朝は内々で手紙を通じて之を招いた。又頼盛の臣の宗清にも、恩返しを度いと思つてゐた。さういふ事情であつたので、頼盛だけは一緒に出奔しなかつた。後白河法皇は、平氏を避けて比叡山に御幸なされた。義仲は行家と、北陸の兵六萬人を帥ゐて、別々の路から都入りをした。都の人は互ひに話しあつて曰ふに「今日、再び源氏の白旗を見ようとは實に思ひがけなかつた所である」と。

# 日本外史新釋 卷三

## 源氏正記

### 源氏下

是月、法皇會諸公卿論討平氏功。頼朝第一、義仲第二。叙義仲從五位下、任左馬頭、除越後守。除行家備後守。二人不悅。更除義仲伊豫守、行家備前守、並聽院昇殿。收平氏五百餘邑、賜其百四十于義仲、留衛京師。世呼曰旭日將軍。義仲生長山野、舉止粗鄙、不任衣冠。爲京人所嗤笑。

是の月、法皇、諸公卿を會し、平氏を討する功を論ず。頼朝第一、義仲第二。義仲を從五位下に叙し、左馬頭に任じ、越後守に除す。行家を備後守に除す。二人悦ばず。更に義仲を伊豫守に、行家を備前守に除し、並に院の昇殿を聽す。平氏の五百餘邑を收め、其の百四十を義仲に賜ひ、留まりて京師を衛らしむ。世呼んで旭



日將軍と曰ふ。義仲、山野に生長し、舉止粗鄙、衣冠に任へず。京人の嗤笑する所と爲る。

**通釋** 是の月に、後白河法皇は諸々の公卿衆を集め、平氏討伐の功を評定された。其の結果、頼朝を第一、義仲が第二となされた。義仲を従五位下に叙せられ、左馬頭に任命され、越後守に除せられた。行家を備後守に任ぜられた。義仲・行家の二人は、之に満足しなかつた。改めて義仲を伊豫守に、行家を備前守に任命され、二人とも法皇様の御殿に昇ることを許された。おまけに、平氏の領邑であつた五百餘ヶ所を没收して、その内百四十邑を義仲に下され、留まつて京都を守護せしめられた。こんな風で義仲の勢の盛んなことは、まるで朝日の昇るが如き有様であつたので、世間では、彼を呼んで旭日將軍と曰つてゐた。所が義仲は田舎で育つたので、その動作振舞がぞんざいで鄙びてゐて、迎も朝衣朝冠などつける柄でなく似つかない。それで京都の人に嘲笑はれてゐた。

**語釋** 是月(壽永二年七月)

初以仁王子爲僧、奔越後、稱北陸宮。年十七。義仲奉以入京師。八月、法皇以乘輿西奔、京師無主、議立天子。時有高倉帝皇子二人、叔五歲、季四歲。法皇欲擇而立之。因宣問之。義仲屬意於北陸宮。奏曰、立君重事、非鄙人所敢問。然辱受咨問、敢不竭情。故三條宮、憤平氏之專橫、欲拔陛下於幽厄。時命未會、殞身鋒鏑。天下悲之。臣之樹功於今日、亦奉遺令也。今議建立、而不及其胤、人心云何。法皇以其嘗爲僧、不

聽。トニ皇子叔吉、法皇納寵姬、言欲立季、再卜而立之。是爲後鳥羽帝。

**訓讀** 初め以仁王の子僧と爲り、越後に奔り、北陸の宮と稱す。年十七。義仲奉じて以て京師に入る。八月、法皇、乘輿西奔し、京師に主無きを以て、天子を立てることを議す。時に高倉帝の皇子二人あり。叔は五歲、季は四歲。法皇、擇んで之を立てんと欲す。因つて宣して之を義仲に問ふ。義仲、意を北陸宮に屬す。奏して曰く「君を立てるは重事なり。鄙人の敢て問する所に非ず。然れども辱く諮問を受く。敢て情を竭さざらんや。故の三條の宮平氏の專横を憤り、陛下を幽厄より拔かんと欲す。時命未だ會せず、身を鋒鏑に殞す。天下之を悲む。臣の功を今日に樹つるも、亦遺令を奉ずるなり。今建立を議して、其の胤に及ばずんば、人心何んとか云はん」と。法皇其の嘗て僧と爲りしを以て、聽さず。二皇子を卜するに、叔吉なり。法皇寵姬の言を納れ、季を立てんと欲し、再び卜して之を立て。是を後鳥羽帝と爲す。

**通釋** はじめ、以仁王の御子が僧となられて、越後に逃げ、北陸宮と稱してゐられた。十七歳であつた。義仲は、この御方を御伴れ申して、京都へ來たのである。八月、後白河法皇は、安徳天皇が、平氏と共に西に出奔してゐて、京都に主上がないので、新たに天子を立てようと御評議があつた。その時、高倉天皇の皇子がお二人あつた。兄君は五歲、末の弟君は四歳であつた。法皇は、このお二人の中から擇んで立てようと思はれた。そこで宣旨を下されて義仲に御下問になつた。義仲は、このお二人より、北陸宮に心が向いてゐた。そこで申上げて曰ふには「天子を立てることは、重大なことであります。私如き賤しい者の敢て關係すべきことではありませぬ。けれども、辱くも、御相談を受けましたので御座います。所存を十分申上げない譯に參りませぬ。故の三



條宮以仁王は、平氏の我儘を怒られ、陛下を押し込め、御難儀から救ひ出さうと思はれました。併し時運天命がまだ向いて来ませんでした。一度の戦いで敗れ、戦場で討死なされたのであります。天下の者は皆之を悲しんで居ります。私が今日斯うして功を立てたのも、畢竟以仁王の遺された御命令を奉じたので御座います。今天子をお建てになることを評議されて、以仁王の御子をさし置いたのでは、天下の人々は心に之を何と考へませう」と。法皇は北陸宮が嘗て僧となられたことがあるのでお許しが出なかつた。お二人の中で、どちらがよいか卜つて見た所が、兄君の方が善かつた。法皇は、御寵愛であつた女房の丹波局の言葉を取られて、弟君の方を立てようと思はれ、もう一度卜つて、遂に之をお立てになつた。これが後鳥羽天皇である。

**語釋** 北陸宮(其の名傳) ○皇子二人(皆藤原氏の出、故に平氏) ○三條宮(以仁王は三條高) ○幽厄(清盛の爲めに鳥羽に幽せられたるをさす) ○殞(鋒鏑(鋒や矢に中つて)討死すること)

法皇頗厭義仲、欲召頼朝來京師。義仲爭爲不可。弗聽。義仲憤懣而北兵乏糧、四出鹵掠。法皇患之。時平氏在南海、屢侵山陽。行家請赴討。詔許之。義仲曰、「行家雖勇、數奇、不可使將。乃更命義仲。義仲發京師、以足利義清等爲先鋒。閏月、義清與平氏戰于水島、敗死。義仲欲進攻南海、途聞頼朝遣兵且入京師、則引還。有詔止之、不肯。」

**訓讀** 法皇頗る義仲を厭ひ、頼朝を召し、京師に來らしめんと欲す。義仲争つて不可と爲す。聽かず。義仲憤懣す。而して北兵糧に乏しく、四出して鹵掠す。法皇之を患ふ。時に平氏南海に在りて、屢く山陽を侵す。行家

越き討たんと請ふ。詔して之を許す。義仲曰く「行家勇なりと雖も數奇、將たらしむ可からず」と。乃ち更に義仲に命ず。義仲京師を發す。足利義清等を以て先鋒と爲す。閏月、義清、平氏と水島に戦つて敗死す。義仲進んで南海を攻めんと欲す。途にして頼朝兵を遣はし、且に京師に入らんとすと聞き、則ち引き還る。詔あつて之を止めらる。肯んぜず。

**通釋** 法皇は、大分義仲をお嫌ひなされるやうになり、頼朝を召んで京都へ來させようと思ひになつた。義仲はどこまでも反對であつた。併し法皇は承知されなかつた。それが爲めに義仲は憤懣し悶えて居た。そして、又義仲の部下の兵は、兵糧が少く、その爲めに四方に出かけて、盛んに略奪をやつてゐた。法皇もこれにはお困りになつた。この時、平氏は、南海に居つて、度々山陽道に侵入して來た。行家は、之を討ちに行きたいと申出した。それで詔して之を許された。義仲が曰ふのに「行家は、勇氣こそありますが、運の悪い男でありますからあれを大將にしてはいけません」と。そこで、改めて義仲に命ぜられた。義仲は京都を出發した。足利義清等を第一線に立たせた。閏月に、義清は、平氏と水島で戦つて敗れて死んだ。義仲は進んで南海を攻めようと思つた。その途中頼朝が兵を繰り出して京都に入らうとしてゐると聞いたので、引き還した。法皇は詔を出して義仲に還るに及ばないと、お止めになつた。併し、義仲は承知しなかつた。

**語釋** 南海(讃岐屋島をさす) ○數奇(不仕) ○水島(備中)

先是、法皇使者至鎌倉。頼朝延見、言曰、「平氏棄京師、自逃。而義仲、行家擣虛入之。乃



於功要賞、敢擇任國。胡爲者也。臣當疾往伐之。而藤原秀衡等、日窺臣背。臣未可以奉詔。且帥大兵入輦下、徒爲騷擾。使者歸報、公卿皆想望賴朝風采、爭問狀。使者言、賴朝軀矮而面大、然舉止詳雅、言語明晰、非義仲比也。賴朝又使使奏曰、平氏所侵諸邑、宜盡復其故主。臣等不宜利之。平氏降者、宜從赦宥。臣嚮被宥、故有今日。源平並立、同衛王家、古制爲然。自朝廷視之、何有彼此哉。法皇益屬意於賴朝、屢使使召之。於是賴朝使弟範賴、義經、監關東貢賦、西上、以詞義仲。

**訓讀** 是より先き、法皇の使者、鎌倉に至る。賴朝延見し、言つて曰く、「平氏京師を棄てて自ら逃る。而して義仲・行家、虚を構いて之に入る。乃ち功を矜り賞を要め、敢て任國を擇ぶ。胡爲る者ぞ。臣當に疾く往いて之を伐つべし。而るに藤原秀衡等、日に臣の背を窺ふ。臣、未だ以て詔を奉ずべからず。且つ大兵を帥りて輦下に入らば、徒に騷擾を爲さん」と。使者歸り報ず。公卿、皆賴朝の風采を想望し、争うて狀を問ふ。使者言ふ、「賴朝、軀矮にして、面、大なり。然れども舉止詳雅、言語明晰、義仲の比に非ざるなり」と。賴朝、又使をして奏せしめて曰く、「平氏、侵す所の諸邑は、宜しく盡く其の故主に復すべし。臣等宜しく之を利すべからず。平氏の降る者は、宜しく赦宥に従ふべし。臣、嚮きに宥さる。故に今日あり。源平並立ち同じく王家を衛るは、古制然りと爲す。朝廷より之を視ば、何ぞ彼此有らんや」と。法皇、益々意を賴朝に屬し、屢く使をして之を召

さしむ。是に於て、賴朝、弟範賴、義經をして、關東の貢賦を監して西上し、以て義仲を詞はしむ。

**通釋** これより先き法皇の使者は鎌倉へ行つた。賴朝はこのお使者を引き入れ對面して言ふに、「平氏の方々が京都を見棄てて逃げて行きました。その空虚になつてゐる跡へ、義仲や行家が、突いて入り込んだのであります。(格別の働きといふでもない)それを彼等は、自分の功績を鼻にかけ、御褒美を要求し、そればかりか、任地までも敢て擇り取りました。實に何んたる奴で御座いませう。そんな奴は、私として今にも直ぐ急いで征伐に行かねばならぬのです。所が藤原秀衡等が間斷なく私の背後を窺つてゐますので迂つかり出られませぬ。折角の詔ではあります、まだ今の所では仰せに従ふ譯に參りません。それに大兵を率ゐてお膝下へ參りますと、却つて世間を騒がせるまでのことで御座います」と。使者が歸つて來て、復命した。公卿衆は皆賴朝の儀容を思慕ひ、先きを争うて彼の様子を尋ねた。使者がいふのに「賴朝は文が低く顔は大きく、そんな立派な男ではありません。然しそのものごとといふものは、よくとどいたもので、又垢抜けがして品がありますし、その言葉つきは明瞭してゐて、逆も義仲などの比べものにはなりません」と。一方賴朝の方でも又使を法皇の所へ遣はし、申上げさせて曰ふに「平氏の者等が侵略した所の多くの領地は、皆元の持主へ復へすやうになされたら宜からうと思ひます。私共がそれを取るべきではないと存じます。又平氏方で降參した者は、其の罪を赦し、生命を助けておやりになつたら宜しう御座いませう。私とて以前生命を宥されたので、今日あることが出来たので御座います。一體源氏と平氏とは相並んで存立し、皇室を護つてゆくのが昔からの制度であつたのです。上朝廷から御覽なされるれば甲乙のあるわけの者ではないので御座います」と。法皇は愈々賴朝に心が移つて終つて、度々使を



やつてお召し出しになつた。そこで頼朝は、弟の範頼・義經の二人に、關東の貢物を監理させ乍ら(兵費に充てるのである)都へ上らせ、義仲の様子を窺はせることにした。

**語釋** 舉止(動作、振舞) ○詳雅(行きとどき、人品)

義仲欲拒之、與行家謀奉法皇於軍。行家素有寵於法皇、密奏之。法皇乃使僧靜憲詰義仲。義仲對曰、「孰造此言者。臣徒慨官家之貳於頼朝也。故欲與決雌雄耳。願得賜討頼朝宣。遂詣法皇宮、獻誓書、且請問執讒人、詔慰解之。」

**訓讀** 義仲之を拒がんと欲し、行家と法皇を軍に奉せんと謀る。行家素より法皇に寵あり。密に之を奏す。法皇乃ち僧靜憲をして義仲を詰らしむ。義仲對へて曰く「孰れか此の言を造す者ぞ。臣は徒だ官家の頼朝に貳あるを慨するなり。故に與に雌雄を決せんと欲するのみ。願はくば頼朝を討つるの宣を賜ふを得ん」と。遂に法皇の宮に詣り、誓書を獻じ、且つ讒人を問執せんと請ふ。詔して之を慰解す。

**通釋** 義仲は、これを拒ぎ止めようと思ひ、行家と二人で法皇を自分等の軍中へ御件れ申さうと計畫してゐた。行家はもとく法皇に御氣に入つてゐた。それで、密に義仲の計畫を申上げた。そこで法皇は僧靜憲をやつて、義仲を詰問させられた。義仲對へて曰ふに「だれが、かやうな事を申上げましたか。私は、御上が頼朝に二た心を寄せてあられるのを慨いてゐるのであります。ですから頼朝と勝負を決めようと思つてゐるだけのことです。何卒、頼朝を討つ院宣を下されたいもので御座います」と。遂に法皇の御所へ參内して、決して法皇を軍中へお

つれ申すこと採はないといふ誓書を獻上し、且つ讒人の食ひ込む路を塞ぎとめたいと申入れた。(即ち讒人を處分して其の路を斷つ)法皇は詔して慰め且つ其の心を和げられた。

**語釋** 間執(口を問執すとある。間執は塞ぐ意なり)

十一月、屢詔趣義仲西征。曰、「或謂汝之不西、欲謀不良也。」義仲對以「備東兵、而鹵掠益甚。法皇遣其幸臣平知康詰之。知康善擊鼓、稱鼓判官。義仲曰、「鼓判官反、欲爲人所擊乎。」知康怒、還報曰、「義仲反形已成。請討之。」法皇聽之。驟徵叡山園城寺僧兵、以知康將之。義仲會將士、言曰、「我有功無罪。何遽至此。我以五萬士馬、留衛京師。而官無所給、不剝豪戶、何以生存。然未嘗敢抄掠皇人也。彼鼓乃讒我、以至此。我將擊而破之。」

**訓讀** 十一月、屢々詔して義仲の西征を趣がす。曰く「或ひと謂ふ、汝の西せざるは、不良を謀らんと欲するなり」と。義仲對ふるに東兵に備ふるを以てす。而して鹵掠益々甚だし。法皇、其の幸臣平知康を遣はして之を詰らしむ。知康善く鼓を撃ち、鼓判官と稱す。義仲曰く「鼓判官反つて人の撃つ所と爲らんと欲するか」と。知康怒り、還り報じて曰く「義仲の反形已に成る。請ふ之を討たん」と。法皇之を聽す。驟かに叡山、園城寺の僧兵を徵し、知康を以て之に將とす。義仲、將士を會し、言つて曰く「我れ功ありて罪なし。何遽ぞ此に至る。



我れ五萬の士馬を以て、留りて京師を衛る。而して官、給する所なし。豪戸を剝がずんば、何を以て生存せんや。然れども未だ嘗て敢て皇人を抄掠せず。彼の鼓乃ち我を讒し以て此に至る。我れ將に撃つて之を破らんとす」と。

**通釋** 十一月になつてからは、度々詔を下されて義仲に西の平氏を征伐するように催促された。そして仰せられるには「或る人は、お前が西に行かないのは、謀叛をしようと思つてゐるのであるといつてゐる」と。(義仲を行かせようと思つて斯う曰はれた) 義仲は西へ行かないのは關東から來る頼朝の兵に備へる爲であるとお對へした。そして略奪は愈々激しくなつた。法皇は、その寵愛なされてゐる臣平知康を義仲のところへ遣はし詰責せしめられた。知康は、鼓を上手に撃つので鼓判官といはれてゐた。義仲は曰ふのに「鼓判官は鼓を撃つ身で、あべこべに人に撃つて貰ひたいのか」と。知康は怒つて、還り報告して曰ふのに「義仲の謀叛の形跡は、すつかり出來て居ります。何卒之を討たせて下さいませ」と。法皇は、これをお許しなされた。急に比叡山及び園城寺の僧兵を徵され、知康をばその大將となした。義仲は將士を集めて、それに言つて曰ふには「自分は手柄こそ立てたが、罪は犯してゐない。こんな什儀になつたのは何といふ譯だ。自分は五萬の兵士と馬とを引きつれて滯留し京都を守護して居る。而るに朝廷では何の御手當も支給されない。物持ちの家からでも剝ぎ取らなければ、どうして、生きながらへて行けよ。ぞ。けれども、自分は皇族の方々から、かすめ取つたことはまだ一度もない。しかるに、かの鼓の奴、却て我を讒言して、こんな事にして終つた。自分はこれから撃つて之を破つてやらう」と。

**語釋** 平知康(壹岐判官と稱す)

樋口兼光今井兼平、切諫之、勸其詣關降。義仲怒曰、吾自起兵數十戰、未嘗知有所

謂降者。即降吾反爲鼓所擊殺。耳。遂令將士曰、吾今日決死。汝輩勉之。勿爲頼朝所笑。乃分軍爲七隊、圍法住寺。知康上牆、踊躍罵義仲。義仲咄嗟赴之。知康走匿。北兵縱火索之、不獲。遂奉法皇子攝政。帝于閑院、停公卿以下。至知康官爵、自爲院廐別當。先是、義仲娶藤原基房女。於是、基房徐開諭之。乃徙法皇子西洞院、自辭其官爵。

**訓讀** 樋口兼光、今井兼平、切に之を諫め、其の關に詣りて降ることを勸む。義仲怒つて曰く「吾れ兵を起してより數十戰、未だ嘗て所謂降る者あるを知らず。即し降らば吾れ反つて鼓の擊殺する所と爲らんのみ」と。遂に將士に令して曰く「吾れ今日死を決せり。汝が輩之を勉めよ。頼朝の笑ふ所と爲る勿れ」と。乃ち軍を分ちて七隊と爲し、法住寺を圍む。知康牆に上り、踊躍して義仲を罵る。義仲咄嗟之に赴く。知康走り匿る。北兵火を縱ちて之を索む。獲ず。遂に法皇を攝政の第に、帝を閑院に奉じ、公卿以下、知康に至るまでの官爵を停め、自ら院廐の別當と爲る。是より先き、義仲、藤原基房の女を娶る。是に於て、基房徐に之を開諭す。乃ち法皇を西洞院に徙し、自ら其の官爵を辭せり。

**通釋** 樋口兼光、今井兼平の兩人は痛く之を諫め、義仲自身御所へ往つて降參するやうに勧めた。義仲は怒つて曰ふのに「自分は兵を起してから數十度戰つて、まだとんと所謂降參なるものは知らない。もし、降參でもし



ようものなら自分は反つて鼓の爲めに撃ち殺されるだらう」と。遂に將士に命令して曰ふには「自分は今日といふ今日は死ぬ覺悟である。お前たちは確つかりやれよ。頼朝に笑はれてはならぬぞ」と。そこで軍を別けて七隊となし、法皇の御所の法住寺を取り圍んだ。知康は牆に登り飛び上つて義仲を悪口した。義仲は敦圍いて其の方へ進んだ。知康は逃げ匿れた。義仲の兵は火を御所につけて知康をさがした。併し捕まらなかつた。遂に法皇を攝政の屋敷に天皇を閑院の宮に御件れ申し、公卿以下、知康に至るまでの銘々の官爵を停止し、自分自身で院の廐の長官になつた。これより先き、義仲は、藤原基房の女を娶つた。そこで基房は靜かに道理を説いて諭した。そこで義仲は法皇を西洞院に移し、自分の官爵を返上して終つた。

語釋 攝政第(藤原基通)の第。

元暦元年正月、義仲叙從四位下、任征夷大將軍。先是行家與平氏戰室山敗、遂據河内。畔義仲、義仲遣樋口兼光將兵擊之。而範頼、義經已至伊勢。橘公友者、往告變焉。遂赴鎌倉。頼朝見公友曰、「義仲有罪、宜詔臣誅之。知康何人也。焉得與義仲敵。乃檄八州將士、西討義仲。而知康來鎌倉、欲自解說。頼朝戒内外、勿爲通知康至。無肯顧者。」

元暦元年正月、義仲從四位下に叙せられ、征夷大將軍に任ぜらる。是より先き、行家、平氏と室山に戰

ひ敗れ、遂に河内に據りて義仲に畔く。義仲、樋口兼光を遣はし、兵に將として之を撃たしむ。而して範頼、義經已に伊勢に至る。橘公友なる者、往いて變を告ぐ。遂に鎌倉に赴く。頼朝、公友を見て曰く、「義仲罪あらば、宜しく臣に詔して之を誅せしむべし。知康何人ぞや。焉んぞ義仲と敵するを得ん」と。乃ち八州の將士に檄し、西、義仲を討つ。而して知康鎌倉に來り、自ら解説せんと欲す。頼朝、内外を戒め、爲めに通ずる勿からしむ。知康至る。肯て顧みる者なし。

通釋 後鳥羽天皇の元暦元年正月、義仲は從四位下に叙せられ、征夷大將軍に任ぜられた。これより先き、行家は、平氏と室山で戰つて負け、遂に河内に立て籠つて、義仲に叛いた。義仲は樋口兼光を遣り兵に將として之を撃たせた。所が一方範頼、義經の兩軍は、すでに伊勢まで來てゐた。橘公友なる者が伊勢へ往つて、京都に事變(知康の一件)の起つたことを告げた。それから鎌倉へ行つた。頼朝は公友に會つて曰ふには「義仲が罪あるならば私に詔して彼を誅せしめられたならよいのです。あの知康とは全體何者でありますか。あんな者がどうして義仲に敵ふものですか」と。そこで、關東八州の將士に觸れ出して西の方義仲を討つことになつた。而してかの知康は鎌倉へ出て來て、自分で言ひ譯をしようと思ふつた。頼朝は、幕府の内外の者に申つけて彼を爲めに、取次をしてはならぬと命じた。知康はわざ／＼やつて來た。併し、誰も相手にする者はなかつた。

語釋 征夷大將軍(景行天皇の時、日本武尊を此職に) ○室山(播磨)

無幾何、徵兵聚者六萬。乃盡委之於範頼、義經。因令曰、「木曾阻我兵、必於宇治河。皆



具善馬、可以騎渡。賴朝有駿馬二。曰池月、曰磨墨。梶原景時有寵。其子景季年少銳勇。於是請得池月、以先登。賴朝曰、乞焉者多、吾不與也。顧範、賴等、戰不能克、吾且親往。此吾乘也。乃賜磨墨。諸將士皆發。

**訓讀** 幾何もなくして、徵兵聚る者六萬。乃ち盡く之を範・賴・義經に委し、因つて令して曰く、「木曾、我が兵を阻むは、必ず宇治河に於てせん。皆、善馬を具へ、以て騎渡すべし」と。賴朝駿馬二有り。池月と曰ひ、磨墨と曰ふ。梶原景時、寵有り。其の子景季、年少うして銳勇なり。是に於て、池月を得て以て先登せんと請ふ。賴朝曰く、「乞ふ者多けれども、吾れ與へざるなり。顧ふに範・賴等、戰克つ能はずんば、吾れ且に親ら往かん」とす。此れ我が乘なり」と。乃ち磨墨を賜ふ。諸將士皆發す。

**通釋** 間もなく集まつて来た徵兵は、六萬からになつた。そこで此等の兵士を、弟の範と義經とに委かせ、因つて命令して曰ふに、「義仲の軍が我が軍を防ぎ止めるには、屹度宇治河に於てすることだらうと思ふ。だから皆の者は善い馬を仕度して置いて、それに乗つて河を乗り切るやうにしたら宜からうぞ」と。賴朝は二頭の駿馬を所有してゐた。一つは池月といひ、一つは磨墨といつた。梶原景時は賴朝に大層可愛がられてゐた。景時の倅に景季といふのがあつて、これが年は若い中々鋭い勇氣のある男であつた。賴朝がかかる命令を出したので、景季は遠慮もなく進み出て、「池月を頂戴して、宇治河の先陣を仕度いもので御座います」と請うた。賴朝は、曰ふのに、「この池月を呉れ」といつて欲しがる者は随分あつたのだが、これだけは遣らなかつた。考へて見る

のに、範・賴等が若し戰爭で打ち勝つことが出来なかつた際には、自分自身で出かけようと思つてゐるのだ。この池月はその時の乗料にするつもりなのだ。こればかりは遣られぬ」と。そこで磨墨の方を下された。かくて賴朝の隊將士は皆出發して終つた。

**語釋** 池月(源平盛衰記には生) ○梶原景時有寵(石橋山の合戦の後、大庭景親が賴朝を捜した時景時は賴朝の匿れてゐた處を) ○景季(源平盛衰記には生) ○乞焉者多(範も以前池月を下さうといつた) ○乞焉者多(範も以前池月を下さうといつた)

明日佐佐木高綱自近江來謁。賴朝問曰、汝在近江。蓋直從軍入京乎。高綱對曰、臣如從軍、不敢期生。欲一見君訣別、且奉指揮也。馳三日乃達。臣唯一馬、罷不可用。故後期在此。賴朝喜、因謂之曰、汝能爲我先登於宇治乎。曰、能。臣居河上、識其淺深也。於是遂出池月、賜之高綱。感喜謝曰、君聞高綱未戰而死、則不能先登也。聞未死而戰、則先登者高綱也。拜舞而出。賴朝呼返、戒之曰、景季等乞焉而不與、汝記之。對曰、諾。

**訓讀** 明日、佐佐木高綱、近江より來り謁す。賴朝問うて曰く、「聞く、汝は近江に在りと。蓋ぞ直に軍に従ひて京に入らざるか」と。高綱對へて曰く、「臣如し軍に従はば、敢て生を期せず。一たび君に見えて訣別し、且つ指揮を奉ぜんと欲し、馳すること三日にして、乃ち達す。臣、唯だ一馬のみ。罷れて用ふべからず。故に期に後



れて此に在り」と。頼朝喜び、因つて之に謂つて曰く、「汝能く我が爲めに宇治に先登するか」と。曰く、「能くせん。臣河上に居りて、其の淺深を識れるなり」と。是に於て、遂に池月を出して之を賜ふ。高綱感喜し、謝して曰く、「君、高綱未だ戦はずして死すと聞かば、則ち先登する能はざりしなり。未だ死せずして戦ふと聞かば、則ち先登せし者は高綱なり」と。拜舞して出づ。頼朝呼び返し、之を戒めて曰く、「景季等乞へども、與へざりき、汝之を記せよ」と。對へて曰く、「諾」と。

その翌日、佐々木高綱が近江からやつて来て、頼朝の前にお目通りした。頼朝が問うて曰ふのに、「その方は近江にあたと聞いてゐた。態々鎌倉まで出て來なくとも、なぜ直ぐ其處から軍に従つて京都へ攻め行かなかつたのか」と。高綱は對へて曰ふのに、「私は、軍に従つて戦する以上は、決して生きて還らう杯とは思ひ設けませぬ。それ故一と目でも我が君にお目通りして、お暇乞ひをして、その上でお指圖を願はうと存じまして駆けつけました次第で、何しろ三日間といふもの駆け通して参りました。私にはたつた一頭の馬だけしかありません。すつかり疲れて終ひまして、もう役には立ちませぬ。そんな譯で、出陣の期限にも後れて、此處にマゴクしてゐる次第で御座います」と。頼朝は之を聞いて大層喜び、そこで高綱に向つていふに、「其の方は予の爲に、美事宇治河の一番乗りが出来るか」と。高綱は「出來して御覽に入れます。私は宇治河の傍に住つて居りまして、何の邊が深いか淺いか位よく存じて居ります」と。そこで頼朝はとうとう池月を出して、高綱に下された。高綱は大に感激して喜び、恩を謝して曰ふには「我が君にはこの高綱が戦はずに死んだとお聞きなされましたら、それはこの高綱が先陣出來なかつたので御座います。若し高綱はまだ死なないうで戦つてゐるとお聞き及び

なされましたなら一番乗りは此の高綱が致したので御座います」と。お禮を申し述べ雀躍して、そこを出ようとしました。すると頼朝は之を呼び戻して注意していふには、「景季等が之を呉れといつて頼んだが、遣らなかつたのだ。その邊のこと、よく心得てゐたらよからうぞ」と。高綱は「畏まりました」と對へた。

奉指揮(奉は承く) ○記之(景季から苦情が出るといけないから、問)

時大軍陣于浮島原。景季視羣馬、無過磨墨者。牽而上高丘、誇示於衆。已而有大嘶聲。畠山重忠曰、「池月聲也。何以至此。」已而高綱僕牽池月至過丘下。景季問曰、「誰乘。」僕對曰、「佐木氏之乘。」景季大愠曰、「不圖公之視彼踰我。我寧與彼死、使公喪二良。」即控刀要路而待。高綱望見之、謂其騎曰、「彼非梶原耶。公之囑我、殆爲是也。」漸近。景季呼曰、「四郎久瀾。彼乘公所賜乎。」高綱晒曰、「否。吾患無善馬、欲就公厩借之。聞磨墨已賜於子矣。池月不得命矣。子且然。況於高綱乎。然君事方急。不遑顧慮。遂誘厩人竊之矣。後有責問、子幸救解之。」景季色解、笑曰、「悔我不竊也。」乃與俱西。

時に大軍浮島原に陣す。景季、群馬を視るに、磨墨に過ぐる者無し。牽いて高丘に上り、衆に誇示す。已にして大に嘶く聲有り。畠山重忠曰く、「池月の聲なり。何を以て此に至る」と。已にして高綱の僕、池月を牽



いて至り、丘トを過ぐ。景季問うて曰く、「誰が乗ぞ」と。僕對へて曰く、「佐佐木氏の乗なり」と。景季大に愠つて曰く、「圖らざりき、公の彼を視ること、我に踰えんとは。我れ寧ろ彼と死し、公をして二良を喪はしめん」と。即ち刀を控へ、路に要して待つ。高綱、之を望見し、其の騎に謂つて曰く、「彼は碓原に非ずや。公の我に囑する、殆ど是が爲なり」と。漸く近づく。景季呼んで曰く、「四郎久濶なり。彼の乗は、公の賜ひし所か」と。高綱晒つて曰く、「否、吾れ善馬無きを患へ、公の厩に就いて之を借らんと欲す。聞く、磨墨は已に子に賜ひ、池月は命を得ざりしと。子すら且つ然り、況んや高綱に於てをや。然れども君の事方に急なり。顧慮するに違あらず。遂に厩人を誘ひて之を竊めり。後、責問有らば、子、幸に之を救解せよ」と。景季色解け、笑つて曰く、「我が竊まざりしを悔ゆ」と。乃ち與に俱に西す。

**通釋** 時に源氏の大軍は、浮島ヶ原に暫時陣どつてゐた。碓原景季は、多くの馬こそあるが、どの馬を視ても自分の乗料の磨墨程のものは一頭もゐない。そこで大に鼻が高くなつて、之を牽いて小高い丘の上に登り、多勢の者にこれを見よがしに、見せびらかした。すると其の内に大きく馬の嘶く聲が聞えた。それを聞きつけて畠山重忠が、「ハテ、アレは池月の聲ぢや。何うして又此處へ來たのだらう」と曰つた。間もなくして高綱の僕が池月を牽いてやつて來て、其の丘の下を通つた。景季はイキナリ「其の馬は誰れの乗料だ」と問ふた。その僕は「佐々木氏の乗馬で御座います」と答へた。景季は心中大に不満で「案外千萬だ、頼朝公は俺よりは高綱の方を高く見てゐられようとは全く意外だ。ヨシ、斯くなるからには、一層のこと、高綱と刺しちがへ、頼朝公が一時に二將を失はれるように爲て呉れよう」と曰つた。そしていきなり刀の柄に手をかけて、路傍に高綱の來るのを待

つてゐた。それを望み見た高綱は「ハ、ア、アレは碓原ぢやないか。成る程、頼朝公が氣をつけると申し渡されたのは、矢張り斯ういふことの爲めだつたのだナ」と部下の騎兵に語つた。段々接近した。景季は呼びかけて曰ふのに「四郎、久し振りに會ふな。アノ馬は頼朝公から頂戴したのか」と。高綱は微笑し乍ら「イヤ、さうではないさ、實は拙者は善い馬を持たないので困つて、頼朝公のお厩から一頭拜借に及ばうと思つた。所が磨墨はもう貴公に下されたが、池月はお許しが出なかつたと聞き及んだ。貴公にさへ下さらぬものを拙者が願ひ出たつて下さる筈はないと思つた。(併し今の場合、愚圖々してはゐられない。)方に君の御大事、急なる際だ。前後の事を考へる違もなかつた。實はとう／＼厩の別當を誘惑して竊み出した譯さ。後日お咎めがあつたら貴公、どうかお取りなしを願ひ度いものぢや」と。景季は之を聞いて顔色も和け、笑つて曰ふのに「失まつた、おれも竊む所だつた。」と。そこで景季は高綱と一緒に西に向つて進んだ。

**語釋** 浮島ヶ原(駿河に) ○使公喪二良(二良は景季自らと高綱と。二人が死ぬは) ○殆爲此也(殆は助辭で、乃ちといふやうなから轉化し) ○四郎(高綱は秀綱) ○不得命(遣らうといふ御命) ○誘厩人(厩人は馬屋の別當、源平盛衰記に「御厩の小平次に心を入れ、今でも心づけと云ふ言葉がある。)

範頼向勢多義經向宇治義仲聞之議戰守見兵千騎乃遣今井兼平山木義弘拒勢多根井行親楯親忠拒宇治撤橋板樹柵張繩於水中守之二十日義經以騎二萬五千至東岸戒居民避軍而火其廬舍以布陣焉起櫓自登具筆硯書將士功最



曰將以報鎌倉也。將士皆奮欲戰。義經又發令而軍囂。不聞令。乃取平等院鼓。擲於槽下。一軍屬耳。義經乃令二萬人中必有善泅者。直前嘗之。我勇士緣橋架。防敵勿使敵射我。泅者爭釋甲而沒。刀截其繩。平山季重。澁谷重助。熊谷直實等。上架而射。

範頼は勢多に向ひ、義經は宇治に向ふ。義仲之を聞いて、戦守を議す。見兵千騎あり。乃ち今井兼平・山木義弘を遣はして、勢多に拒がしめ、根井行親・楯親忠をして、宇治に拒がしむ。橋板を撤し、柵を樹て、繩を水中に張つて之を守る。二十日、義經、騎二萬五千を以て、東岸に至る。居民を戒め、軍を避けしめ、而して其の廬舎を火き以て陣を布く。櫓を起して自ら登り、筆硯を具へて、將士の功最を書す。曰く、「將に以て鎌倉に報ぜんとするなり」と。將士皆奮つて戦はんと欲す。義經又令を發す。而れども軍囂にして令を聞かず。乃ち平等院の鼓を取り、槽下に擲つ。一軍、耳を屬す。義經乃ち令す、「二萬人中、必ず善く泅ぐ者有らん。直に前んで之を嘗みよ。我が勇士、橋架に緣つて敵を防ぎ、敵をして我が泅ぐ者を射しむる勿れ」と。泅ぐ者争ひ甲を釋つて没し、刀もて其の繩を截る。平山季重・澁谷重助・熊谷直實等、架に上つて射る。

範頼は勢多に向ひ、義經は宇治に向つて進んだ。義仲はその事を聞いて、如何に戦ひ守つたら宜いかを相談した。義仲の手元には、千騎ばかりの兵しかなかつた。そこで今井兼平・山木義弘を遣はして勢多の方面で範頼軍を拒がせ、根井行親・楯親忠を遣はして宇治に義經軍を拒がしめた。勢多の方でも、宇治の方でも、橋板を引ツ剝がし、亂杭逆茂木を立て、繩を河の中に張つて守禦した。二十日に義經は二萬五千人の騎兵を引きつれ、宇治河の東岸に到着した。その邊の人民を戒めて、立ち退かせ、軍を避けさせて置いて、人民の住家を焼き其處に陣を布いた。そして義經自らは、櫓を建てて其の上に登り、筆や硯を準備して、將士の内、第一の殊勲者の姓名を書き記すことにした。そして曰ふのに「斯うして、鎌倉の頼朝公へ御報告しようと思ふ。」と。隊將士は皆奮ひ立ち大に戦はうとした。義經は又命令を出した。軍中が騒がしくて、命令がとどかない。そこで平等院の太鼓を取り出して、槽の下でたたいた。一軍の者共は何事かと耳を聳てた。そこで義經は命令を出した。「二萬人の中には屹度善く泅げるものが有るだらう。直ぐ進んで試つて見よ。又我が軍の勇士は、橋桁によつて敵を防ぎ、味方の泅ぐ者を射させぬやうにしろ」と。そこで泅ぐ者は、われ一勝ちに鎧を脱ぎ棄てて河に飛び込み、刀で以て河中の繩を切つた。平山季重・澁谷重助・熊谷直實等は皆橋桁に上つて弓を射て敵を牽制した。

○張繩(敵の馬や人の足を取るもの) ○功最(功名) ○囂(喧まし) ○平等院(宇治橋の袂にある寺の名)

射戦良久。有二騎、鞭馬亂流而進。先者景季、後者高綱。高綱自後給景季曰、「子之馬條慢矣。」景季駐馬約條。高綱則超乘而過。上岸自名景季。踵上。義經上功簿。高綱爲先登第一。景季爲第二。畠山重忠以手兵繼渡。行親射之。中其馬。重忠泅而達岸。揮刀而進。北兵辟易。義經乃以全軍渡。擊大破之。行親搏戰而退。



**訓讀** 射戰良久し。二騎有り、馬に鞭うち流を亂つて進む。先なる者は景季、後なる者は高綱なり。高綱、後より景季を給いて曰く、「子の馬條慢めり」と。景季、馬を駐めて條を約す。高綱則ち超乘して過ぎ、岸に上りて自ら名をいふ。景季踵いで上る。義經、功簿を上るに、高綱を先登第一と爲し、景季を第二と爲す。畠山重忠手兵を以て繼いで渡る。行親之を射て、其の馬に中つ。重忠洄いで岸に達し、刀を揮つて進む。北兵辟易す。義經乃ち全軍を以て渡り、撃つて大に之を破る。行親搏戦して退く。

**通釋** 弓の戦が良久しく續いた。すると忽ち二人の騎馬の武士が、逆巻く流れを横切つて進んで出た。先きになつてゐるのが景季、後方の者は高綱である。高綱はいやでも先陣せねばならぬので、後から景季を欺いて曰ふのに「貴公の馬の腹帯が慢るんでゐるぞ」と。景季は馬を止めて馬の腹帯を引きしめた。その間に高綱は景季を乗り越えて、眞ッ先きに岸へ上つて先登第一の名乗りを揚げた。景季は其のあとから續いて上つた。義經は戦功の名簿に、高綱を先登第一とし、景季を第二と記して、鎌倉に上つた。畠山重忠は手勢を引き具して、あとから繼いで渡つた。根井行親が之を射て重忠の馬に矢を中てた。それが爲め重忠は洄いで岸に達し、刀を揮り廻して進んだ。義仲の兵は閉口して引き退いた。そこで義經は全軍を率ゐて河を渡り、撃つて大に敵を破つた。行親は組み持ちして戦つたが結局退却して終つた。

**語釋** 超乘(左傳僖公三十二年に見ゆ。元來飛び乗る義、それを乗り越す義に流用したのである。)  
功簿(戦功を録し、た帳簿)

義仲馳使請法皇幸醍醐寺弗聽則率兵馳赴其宮拔刀瞋目立于階下具興趣幸

宮中股栗會有來告東軍已至木幡矣義仲馳出過五條第訣妻藤原氏久而不出有二三士諫之自殺帳前義仲乃出遇行親親忠合其兵兵僅三百騎望見東軍旗幟彌天曰吾死矣諭將士散去衆請生死相從義仲乃進冒東軍重忠景時等累進皆潰義仲驅進與義經遇義經以數百騎攢蹄衝擊因亂射之義仲大敗被創以殘兵西走

**訓讀** 義仲、使を馳せ、法皇の醍醐寺に幸せられんことを請ふ。聽かず。則ち兵を率ゐ馳せて其の宮に赴き、刀を抜き目を瞋らし、階下に立つて、興を具へ幸を趣す。宮中股栗す。會來つて東軍已に木幡に至ると告ぐるもの有り。義仲馳せ出で、五條の第を過ぎり、妻藤原氏に訣る。久しうして出でず。二士有り、之を諫めて、帳前に自殺す。義仲乃ち出づ。行親・親忠に遇ひ、其の兵を合す。兵僅に三百騎のみ。東軍を望見するに、旗幟、天に彌る。曰く、「吾れ死せん」と。將士を諭して散じ去らしむ。衆、生死相從はんと請ふ。義仲乃ち進んで東軍を冒す。重忠・景時等、累りに進みて、皆潰ゆ。義仲驅り進み、義經と遇ふ。義經數百騎を以て、蹄を攢めて衝擊し、因つて之を亂射す。義仲大に敗れ創を被り、殘兵を以て西に走る。

**通釋** 義仲は使者を後白河法皇の處へ馳せ、法皇に醍醐寺に御幸遊ばすやうにお願ひした。法皇は御聽き入れにならなかつた。遂に義仲は自分で兵を引きつれて、法皇の御所に出かけ、刀を抜き、目を怒らして、階の下



に立ち、お乗物を用意して、早くくと御幸の催促をした。宮中のものは共は慄え上つた。丁度其の時、關東勢が早や木幡までやつて來ました」と註進した者があつた。義仲は愚圖々々してもゐられず、駆け出て、五條の屋敷へ立ち寄り、妻の藤原氏に訣別をしに入つた。所が義仲は何時まで経つても出て來ない。二人の武士が諫めて居間の垂帳の前で自殺した。そこで義仲は氣を取り直ほして出て行つた。行親と親忠と遇つたので其の兵を合したが、僅かに三百騎に過ぎない。所が關東勢を望み見ると旗や幟が天を蔽はん計りである。義仲は之を見てこれは叶はぬと思つて曰ふのに「もう駄目だ、俺もこれでお終ひだ」と。部下の將士を諭して、散りんに立ち退かせようとした。皆の者は生死ともにお供がしたいと請うた。義仲も、それではといふので、關東軍の方へ向ふ見ずに進んだ。重忠や景時等は、しきりに進み出たが皆敗れ潰えた。そこで義仲はドン／＼兵を驅り立て、遂に義經と出會した。義經は數百騎の手勢をつれ、それを集團にして敵中へ突き進み、因つて滅茶苦茶に矢を放つた。義仲は一と溜りもなく敗れて、負傷をし、殘兵を率ゐて西の方へ逃げた。

**語釋** 醍醐寺(京都八條の東にある) ○木幡(山城國に) ○五條第(前關白藤原基) ○妻藤原氏(基房の娘、此時十七歳、美人であるといふ義仲は、之を掠め取つて妻にしてゐたのである) ○二士(越後忠大能景、津波田三郎) ○帳前(居間の前の中が見えぬやう、垂帳を垂) ○攢蹄(馬の蹄を一所へ集めるといふ義で、多くの馬の足を) 一

義經使其兵追之、而與重忠等詣法皇宮。大江業忠上宮垣、望見之曰、「義仲復至矣。」一宮驚怖。業忠又報曰、「旗號自別。蓋東兵也。」義經踵門下馬、颺言曰、「臣源賴朝使者。義經也。破賊而至矣。願爲奏之。」業忠驚喜跳下、匍匐入奏之。法皇大喜、延六人、列立

中門外、見之。使人指問其名。穿赤錦袍者曰、「源義經。」被緋甲、帶大刀者曰、「畠山重忠。」亞重忠者二人曰、「澁谷重助、河越重賴。」玄甲者、梶原景季、黃甲者、佐佐木高綱。法皇曰、「皆壯士也。」因敕護宮焉。

**訓讀** 義經、其の兵をして之を追はしめ、而して重忠等と法皇の宮に詣る。大江業忠、宮垣に上り、之を望見して曰く、「義仲復た至る」と。一宮驚怖す。業忠、又報じて曰く、「旗號自ら別なり。蓋し東兵ならん」と。義經、門に踵り馬を下り、颺言して曰く、「臣は源賴朝の使者義經なり。賊を破つて至る。願はくは爲めに之を奏せよ」と。業忠、驚喜して跳り下り、匍匐し入りて之を奏す。法皇、大に喜び、六人を延き、中門の外に列立せしめて、之を見る。人をして其の名を指問せしむ。「赤錦袍を穿つ者は。」曰く、「源義經」と。「緋甲を被り大刀を帶ぶる者は。」曰く、「畠山重忠」と。「重忠に亞ぐ者二人は。」曰く、「澁谷重助、河越重賴」と。「玄甲の者は。」「梶原景季」と。「黄甲の者は。」「佐々木高綱」と。法皇曰く、「皆壯士なり」と。因つて敕して宮を護らしむ。

**通釋** 義經は部下の兵士をして義仲を追はしめて置いて、自分は畠山重忠等と法皇の御所へ參上した。大江業忠は御所の垣に上つて、義經等が來るのを望み見て「義仲がまた來た」と曰つた。御所の内の人々は何れも驚き怖れ、ビク／＼ものでゐた。すると又業忠は「旗記るしが、どことなく違つてゐる。何んだか關東勢らしい」と曰つた。その内に義經は御門まで來ると馬から下りて、「大聲を揚げて言上するのにならぬ。私は源賴朝の使者義經で御座います。只今賊軍を打ち破つて參上致しました。何卒此の由御奏聞下されよ」と。業忠は吃驚して喜びの



餘り、垣を飛び下り、(その拍子に腰のあたりをシタ、か打つたと見え)腹這ひになつて内に入り、君に申上げた。法皇は大層お喜びになつて六人の者をお引き入れになり、中門の外へ列らんで立たせられ、之を御覽なされた。貞長をして一々其の名を問はしめられた。その後で「赤地の錦の直垂を着せし者は誰れか」とお尋ねになると、は「源義経で御座ります」と對へた。「緋緘の鎧を着け、大きな刀を帯んでゐるのは誰れか」とお尋ねになると、「畠山重忠で御座ります」と重忠に次ぐ二人の者は誰れか。「澁谷重助と、河越重頼に御座ります」と。黒絲緘の鎧を着したる者は「梶原景季に御座ります」と。黄絲緘を着したる者は「佐々木高綱に御座ります」と。法皇は「皆々天晴れな壯士ぢや」と仰せられた。そしてそのまま止まつて御所を守護するやう仰せ出された。

**語釋** 使三人指問(人は出羽守貞長、指) ○穿赤錦袍者、曰源義経(上句は法皇の問はる、お言葉、下句は貞長の對ふる言葉。左傳と問答する書法) ○黄甲(源平盛衰記には小纒を黄に返したる甲となつてゐる。)

義仲既敗、欲挾法皇西奔、還至于宮。義經等擊卻之。義仲走至三條磧。東兵爭要擊之。義仲且戰且走。殘兵十三騎。重忠復追之。義仲妾曰巴。兼平妹也。有膂力。每從軍。是時、單騎止鬪。重忠欲生得之。注目薄之。攫巴甲袖。巴策馬。馬躍、袖絕。重忠舍之而返。義仲以七騎走會。範賴既破勢多而入。遠江人内田家吉、在其先鋒。巴與之搏、斬其首。以視義仲。義仲歎曰、家吉美而勇。乃授首於女子。不知吾亦終死何人手也。因

諭巴遁去。曰、臨死、攜妾、人謂我何。巴請共死。義仲強之。巴乃泣涕辭去。

**訓讀** 義仲、既に敗れ、法皇を挾んで西奔せんと欲し、還つて宮に至る。義經等、撃つて之を卻く。義仲走つて、三條磧に至る。東兵争うて之を要撃す。義仲且つ戦ひ且つ走る。殘兵十三騎のみ。重忠、復た之を追ふ。義仲の妾を巴と曰ふ。兼平の妹なり。膂力有り、毎に軍に従ふ。是の時、單騎止まり鬪ふ。重忠、之を生得せんと欲し、目を注ぎ之に薄り、巴の甲袖を攫む。巴、馬に策うつ。馬躍り、袖絶ゆ。重忠、之を捨てて返る。義仲、七騎を以て走る。會、範賴、既に勢多を破つて入る。遠江の人内田家吉、其の先鋒に在り。巴、之と搏し、其の首を斬り以て義仲に視す。義仲歎じて曰く、「家吉は美にして勇あり。乃ち首を女子に授く。吾も亦終に何人の手に死するかを知らざるなり」と。因つて巴を諭し遁れ去らしめて曰く、「死に臨みて妾を携ふ、人、我を何とか謂はん」と。巴、共に死せんと請ふ。義仲之を強ふ。巴乃ち泣涕して辭し去る。

**通釋** 義仲は既に敗れて、法皇をお連れ申して西の方へ出奔しようと思つて、引き返して御所へやつて來た。義經等は撃つて之を退けた。義仲は逃げて三條磧までやつて來た。關東の兵が争つて之を待ち伏せして撃つた。義仲は戦ひ乍ら走つた。今はもう殘る兵士僅かに十三騎だけだつた。重忠はまた之を追つかけて行つた。義仲の妾に巴御前といふのがあつた。今井兼平の妹である。大層腕力の強い女で、いつも軍に従つた。この時只一騎で踏み止まつて鬪つた。重忠は巴を生捕りにしようと思つて、巴に目をつけて之に迫つて、巴の鎧の袖を引つ攫んだ。巴は逃げようと思つて、馬に鞭をあてた。馬が驚いて躍り上り、其の拍子に袖が切れた。重忠はもう追はうともしないで引き返した。義仲は七騎をつれて逃げた。すると、丁度範賴が既に勢多を破つて京都へ入つて來た。



遠江の人内田家吉が先鋒となつてゐた。巴はこの家吉と組打ちをやり、遂に家吉の首を斬つて義仲に示した。義仲は歎息して曰ふのに、「家吉は美しく且つ勇氣のある男である。それが女に首を引ッ搔れた。他人事ではない。俺も誰れの手にかかつて死ぬるか分かつたものではない」と。そこで巴を諭して逃げ去らしめていふには「死に際に妾などを連れてゐては、人は何んと取り沙汰するだらう。(見つともないから早く立ち去れよ)」と。巴は「是非一緒に死なせて下さい」と頼んだ。義仲はたつて退去を強ひた。巴は泣く泣く暇乞して其處を立ち去つた。

**語釋** 謂我何(自分を人は何んといふだらう。無ぞ) かし未練な男と言ふことだらう。

義仲走、至粟津、遇兼平。兼平曰、「義弘戦死矣。臣未審主公爲何状。是以脱歸耳。義仲曰、「吾宜死於京中。欲一見汝。故忍而至此。身創力竭。可以自殺矣。」兼平曰、「主公努力。方今、平氏在西。佐公在東。主公盍走保北國。以圖三分。」臣請留防敵。主公可以逃也。」乃樹旗集潰兵。潰兵稍聚。得數百騎。進衝敵陣。貫而過者三。乃有二十餘騎。範賴以數千騎圍之。義仲奮戰。盡亡其騎。獨有兼平。兼平乃指一邱樹。謂義仲曰、「君赴於彼。徐自爲計。」臣請拒於此。義仲徑田赴邱。馬陷于淖。顧視兼平。箭中額。死。年三十一。兼平方奮鬪。餘八矢。射斃八騎。聞敵中傳呼。木曾公死。曰、「吾事終矣。」脚刀墮。馬自貫而死。東軍振旅。

而死。東軍振旅。

**訓** 義仲走つて、粟津に至り、兼平に遇ふ。兼平曰く、「義弘戦死せり。臣未だ主公の何の状たるかを審にせず。是を以て、脱歸せるのみ」と。義仲曰く、「吾れ宜しく京中に死すべかりしも、一たび汝を見んと欲す。故に忍んで此に至れり。身創つき、力竭く。以て自殺すべし」と。兼平曰く、「主公努力せよ。方今、平氏西に在り。佐公東に在り。主公盍ぞ走つて北國を保ち以て三分を圖らざる。臣請ふ、留まりて敵を防がん。主公以て逃るべし」と。乃ち旗を樹て潰兵を集む。潰兵稍く聚り、數百騎を得たり。進んで敵陣を衝き、貫いて過ぐるること三たび、乃ち二十餘騎有り。範賴、數千騎を以て之を圍む。義仲奮戦して、盡く其の騎を亡ひ、獨り兼平のみ有り。兼平乃ち一邱樹を指し、義仲に謂つて曰く、「君、彼に赴き、徐に自ら計を爲せよ。臣請ふ、此に拒がん」と。義仲、田を徑り邱に赴く。馬、淖に陷る。顧みて兼平を視る。箭、額に中りて死す。年三十一。兼平、方に奮鬪し、箆に八矢を餘す。射て八騎を斃す。敵中に木曾公死すと傳呼するを聞いて、曰く、「吾が事終れり」と。刀を脚んで馬より墮ち自ら貫いて死す。東軍振旅す。

**通釋** 義仲は逃げて粟津迄來ると、バツタリ兼平に出會つた。兼平がいふのに「義弘は討死仕りました。私には我が君の御様子が見えませぬ。それで脱けて歸つて參りましたのです」と。義仲が曰ふのに「予は京都で死ぬ筈だつたが、もう一度お前に會ひ度かつた。それで恥を忍んで此處まで來たのぢや。身體には罰を負うてゐるし、力はもう竭きて終つた。ここで自殺して果てようぞ」と。兼平が曰ふのに「ナンノこれしきの事が、我が君には精出しなさいませ。今日の天下の形勢は、平氏が西に居ります。頼朝公が東方にゐられます。我が君には何



故ここを逃げて北國を維持し、天下三分の計をなさいませぬか。私はここに踏み止まつて敵を防ぎます。君には早くお逃げなされませ」と。そこで旗を樹て、敗れて散つてゐた兵を集めた。段々聚つて来て數百騎を得た。そこで進んで敵陣を突き、三度も敵陣を切り抜け、それが爲め義仲方は兵を失つて、餘す所た二十餘騎しかなくなつた。範頼は數千騎で之を取り圍んだ。義仲は奮ひ戦ひ、全部其の部下の騎を無くして終ひ、ただ兼平だけが残つてゐた。それで兼平は小高い丘の樹を指して、義仲に向つて曰ふのに「我が君には彼處へお出でなされて、靜かに御自害なさいませ。私はここで敵を拒がせて戴きます」と。義仲は兼平の言を聽き入れ、田を横切り丘の方へ行かうとした。誤つて馬が泥田圃の中に陥つて動きが取れなくなつた。義仲は兼平の身の上を案じて、振り返つて視た。其の拍子に箭が前額に中つて死んで終つた。彼の年齢は三十一歳であつた。兼平は丁度其の時は、一生懸命に奮闘して、籠には八本の矢を餘してゐた。その八本で八人の敵を射倒した。敵中で「木曾殿が戦死なされた」と口々に傳へ呼ぶ聲が聞えたので、兼平は曰ふのに「吾がなすべき事はこれで終つた」と。刀を口に啣へて馬から落ち、自分で自分の喉を貫いて最後を遂げた。關東軍は勢揃をして、威勢よく引き揚げた。

**栗津(近江)** ○貫而過者三、乃有二十餘騎(史記項羽本紀に「至東城、乃有二十餘騎」とある書き方を學んだもの) ○箭中額死(石田小太郎爲久)

而兼光方破行家追之紀伊聞難還京師其兵道亡比及鳥羽有三十騎東兵赴擊兒玉黨與之有姻諭降以歸請宥死朝議不聽義經傳義仲以下首京師帛書其髻曰賊義仲縛兼光從其後終斬之義仲叔父義廣初防一口兵敗逃伊勢後爲頼越後友松祈義仲冥福終身云。

朝所攻殺義仲子義高嚮質於鎌倉頼朝妻以女後欲殺之義高覺而遁追捕見斬妻悲慟不食頼朝歸罪於追者斬之欲改嫁女於藤原高保不肯而死義仲妾巴既別義仲釋甲間行歸信濃遇義仲親故具語以故相泣也時年二十八削髮爲尼居越後友松祈義仲冥福終身云。

而して兼光方に行家を破りて、之を紀伊に追ふ。難を聞いて京師に還る。其の兵、道より亡ぐ。鳥羽に及ぶ比、三十騎あり。東兵赴き撃つ。兒玉の黨、之と姻あり。諭し降し以て歸り、死を宥されんことを請ふ。朝議聽さず。義經、義仲以下の首を京師に傳へ、其の髻に帛書して曰く「賊義仲」と。兼光を縛し、其の後に從はしめ、終に之を斬る。義仲の叔父義廣、初め一口に防ぎ、兵敗れて伊勢に逃る。後、頼朝の攻殺する所と爲る。義仲の子義高、嚮きに鎌倉に質となる。頼朝妻はすに女を以てす。後、之を殺さんと欲す。義高覺つて遁る。追捕、斬らる。妻、悲慟して食はず。頼朝、罪を追者に歸し、之を斬り、改めて女を藤原高保に嫁せんと欲す。肯んぜずして死せり。義仲の妾巴、既に義仲に別れ、甲を釋いて間行し、信濃に歸り、義仲の親故に遇ひ、具に語るに故を以てし、相泣く。時に年二十八。髮を削りて尼と爲り、越後の友松に居り、義仲の冥福を祈り、身を終へたりと云ふ。

**通釋** 一方、樋口兼光は、丁度行家を破つて、紀伊まで追つかけた。主人の難を聞いて、京都へ引き還へした。部下の兵士は、途中から大部逃げた。鳥羽に着いた頃には三十騎だけになつた。關東軍は之を撃ちに出かけた。



兒玉の黨は兼光と姻戚の關係があつた。そこで兼光を諭して、降参させて伴れ歸り助命を願ひ出た。朝廷の評議では之を許さなかつた。義経は、義仲以下の首を京都へ持つて来て、帛に賊義仲と書いて、髻に結びつけた。兼光を縛つて、その後からついて行かせ、終に之を斬り殺した。義仲の叔父の義廣は、はじめ一口で防いでゐたが敗れて、伊勢に逃れた。その後頼朝に攻められて殺された。義仲の子の義高は、前から鎌倉で人質にされてゐた。頼朝は、自分の娘を之に嫁入らせた。その後頼朝は彼を殺さうと思つた。義高はそれを覺つて遁げた。しかし追つかけて捕まへられ、遂に斬られた。その妻は悲しみ歎いて飯も食はない。頼朝は、追つかけた者に罪をなすりつけて、之を斬り、改めてその女を藤原高保の處へ嫁せよと思つた。女は不承知で自害した。義仲の妾の巴は義仲に別れてから鎧をぬぎ棄て、裏道づたひに行つて、信濃に歸り、義仲の親類縁者に會つて、詳しくその事情を話して、泣き合つた。巴はその時、年二十八であつた。髪を剃つて尼となり、越後の友松に居て、義仲の菩提を弔ひ死後の幸福を祈り、一生過したといふことである。

兒玉黨(武藏七黨) ○一口(山) ○追者(堀親)

義仲既死。平宗盛自南海徙山陽。山陽將士自室山水島二役、服従平氏。終復福原築城據焉。負山臨海、生田爲東門、一谷爲西門。勝兵十萬餘、繫大艦數千。平教經轉戰于備前安藝淡路和泉、皆捷。源賴賢、子義嗣、賴仲、子義久、居淡路、皆爲所殺。平氏威振關西、期犯京師。賴朝聞之、趣二弟赴伐。以二月三日、攻一谷。範賴以五萬騎向

東門、梶原景時監軍焉。義經以萬騎向西門、土肥實平監軍焉。以明日爲清盛忌辰、延至七日。先期三日、早發。

義仲既に死す。平宗盛、南海より山陽に徙る。山陽の將士、室山、水島の二役より、平氏に服従す。終に福原を復し、城を築いて據る。山を負ひ、海に臨み、生田を東門と爲し、一谷を西門と爲す。勝兵十萬餘、大艦數千を繫ぐ。平教經、備前・安藝・淡路・和泉に轉戦して、皆捷つ。源賴賢の子義嗣、賴仲の子義久、淡路に居り、皆殺す所となる。平氏の威、關西に振ひ、京師を犯さんと期す。賴朝之を聞き、二弟を趣し赴き伐たしむ。二月三日を以て、一谷を攻めんとす。範賴、五萬騎を以て東門に向ひ、梶原景時、軍を監す。義經、萬騎を以て西門に向ひ、土肥實平、軍を監す。明日は、清盛の忌辰たるを以て、延べて七日に至る。期に先だつこと三日、早く發す。

義仲は既に討死した。平宗盛は一時、南海道に逃れてゐたが、それから山陽道に徙つた。山陽道の大将士は、室山、水島の兩度の戦争以來、平氏に服従してゐた。平氏は終に攝津の福原を回復し、其處に城を築いて立て籠つた。其の城は、後ろが山で、前は海、随分要害堅固の城で、生田を東門となし、一ノ谷を西門となしてゐた。勝ち誇つた兵士十萬餘騎から居り、海には大艦數千艘を繫いでゐた。一方平教經は備前・安藝・淡路・和泉の諸國で轉戦して皆勝利を得た。源賴賢の子の義嗣と、賴仲の子の義久とは淡路にゐたが、皆その時に殺されて終つた。平氏の威勢は大に關西地方に振ひ、軈ては京師に攻め上らうとしてゐた。賴朝はその事を聞いて、範賴・義經の二人の弟を促して攻めに行かせた。二月三日に一ノ谷を攻めることにした。それで範賴は五萬騎を



率ゐて東門生田へ向ひ、梶原景時が其の軍を監護することになった。義経は一萬騎を率ゐて西門一ノ谷へ向ひ、土肥實平が其の方の軍を監護することになった。所が二月三日の翌、四日が丁度清盛の命日に當るので、敵ながら遠慮の意味で、豫定を變更して、七日まで延ばすことになった。そしてその三日前に、朝早く敵地へ向け出發した。

**語釋** 勝兵 新勝の兵、平氏は播磨の室山、備中の水島等で戦勝し、山陽道の將士は多に定めたのは、五日は西塞り兵家の忌み日、六日は平家物語に道虚日とあつて凶日、

義経取丹波路兼行、比暮至三草山。聞平資盛等七千騎、陣山西也。召實平、議曰、「夜襲之乎、抑待旦也。」實平未對。田代信綱進曰、「敵謂我特衆稽留也。則急襲之必勝。」義経曰、「是得我心。」即發命僕辨慶、火沿道民家、取明而過。夜半、至山西、急襲資盛。資盛果不備、大敗走。天明、令信綱實平以七千騎赴西門、而自將精騎三千向鶴越。鶴越者、城後間道也。

**訓** 義経、丹波路を取りて兼行し、暮るる比、三草山に至る。平資盛等七千騎、山西に陣すと聞くや、實平を召し、議して曰く、「夜之を襲はんか、抑々旦を待たんか」と。實平未だ對へざるに、田代信綱進んで曰く、「敵、我れ衆を待んで稽留すと謂はん。則ち急に之を襲はば必ず勝たん」と。義経曰く、「是れ我が心を得たり」と。

即ち發す。僕辨慶に命じ、沿道の民家を火き、明を取つて過ぐ。夜半、山西に至り、急に資盛を襲ふ。資盛果して備へず、大に敗れて走る。天明、信綱・實平をして、七千騎を以て西門に赴かしめ、而して自ら精騎三千に將として、鶴越に向ふ。鶴越は城後の間道なり。

**通釋** 義経は丹波路によつて、強行軍で二日の行程を一日で進み、日暮頃には三草山迄來た。平資盛等の七千騎の一軍が、三草山の西側に陣取つてゐると聞いたので、義経は土肥實平を招んで、相談して曰ふのに、「夜討ちの方が宜いだらうか、それとも明朝を待つて攻撃するか、どちらにしたものだらうか」と。實平はまだお對へしない中に、田代信綱が進んで曰ふのに「敵の方では味方が大軍を待みにして、緩つくり閑と構へてゐると思つてゐるでせう。だから急いで敵を襲撃すれば屹度勝てますでせう」と。義経が曰ふのに「自分も、お前のいふ通りに、考へてゐたのだ」と。早速出發した。下僕の辨慶に命じて、通り路の人家を焼かせて明を採り、道を照らして進軍した。真夜中に三草山の西へ出て、急に資盛を襲撃した。果して資盛は油断をして、何等の用意をしてゐなかつたので、忽ち大敗して逃げ走つた。六日の朝、田代信綱と、土肥實平との二人をして、七千騎を率ゐて西門の一ノ谷の方へ行かせることにし、自分は選り抜きの強い騎兵三千の將となつて鶴越に向つた。鶴越は城の後の抜け道である。

**語釋** 兼行 二日路を一日で行く。義経が都を發したのは四日の朝五時頃、三草山に達したのは其日の午後八時頃だつたといふ事である。○三草山 丹波播磨、攝津に跨る。○辨慶 武藏坊。○天明 諸本皆天明れで計算して本文を讀むときは、先期三日を二月五日と解せねば、後の一ノ谷の戦が七日の戦事とならぬこととなる。所が實は四日に出發してゐるし、又、先期三日は如何に勘定しても四日としか受け取れぬ。信綱等を西門に向はしめたのは事實六日のことである。若し天明とすると前後の關係で五日の天明といふことになり、次節の日暮は五日の日暮となり、熊谷・平山は其翌朝一ノ谷を攻めて、一ノ谷の戦は六日といふことになり、七日の卯刻の矢合せと定められた初めの約束と違ふことになる。此の天明は如何に考へても「明日」とあつて欲しい所だ。こんな間違ひが故ら書かれる譯はなく、こ



これは恐らく筆寫の誤であらう。外史の稿本は、頼支峯が他行中、蛤御門の變事で、灰燼に歸して終つたので、今これ等の點を深く取り調ぶることが出何ぬのは遺憾である。

日暮、駐軍。熊谷直實、平山季重、在磨下。直實謂其子直家曰、「冒險混進、孰後孰先、欲立功者、不若向西門。」直家曰、「然。此公常先士卒、不可隨也。未知平山子何如。」使僕闢之。季重甲冑、按刀、獨語曰、「誰能先我。」僕歸報。直實曰、「彼所見、亦同我也。乃馳赴一谷。天未曙、薄門自名。季重踵至。敵闢門。二人突入奮鬪。城兵辟易。季重出亡其旗卒。乃復入、斬其敵而出。實平、信綱皆至、令士卒繼攻門、堅不破。」

訓 日暮れ、軍を駐む。熊谷直實・平山季重、磨下に在り。直實其の子直家に謂つて曰く、「險を冒して混進せば、孰か後れ孰か先せん。功を立てんと欲する者は、西門に向ふに若かず」と。直家曰く、「然り。此の公、常に士卒に先だつ。隨ふべからざるなり。未だ平山子の如何を知らず」と。僕をして之を闢はしむ。季重甲冑して、刀を按じ、獨語して曰く、「誰か能く我先だたん」と。僕歸り報ず。直實曰く、「彼の見る所も、亦我に同じきなり」と。乃ち馳せて一ノ谷に赴く。天未だ曙けず。門に薄りて自ら名いふ。季重踵いで至る。敵、門を闢く。二人突入して奮鬪す。城兵辟易す。季重出で、其の旗卒を亡ふ。乃ち復入り、其の敵を斬つて出づ。實平・信綱、皆至り、士卒をして繼いで攻めしむ。門堅くして破れず。六日の日も暮れ、一ト先づ軍を駐めて休んでゐた。熊谷直實・平山季重の二人は其の時義經の旗下にゐた。

直實が倅の直家に向つて曰ふのに「險阻も闢はず旨滅法に、ゴチャ／＼になつて進まうものなら、誰が後れたのやら、誰が先登したのやら、後先が分かつたものではない。(それでは功名手柄の立てやうもない。)手柄を立てようと思ふなら、鶴越汰から進むよりは、西門一ノ谷の方に向つた方が、餘つ程宜いのだ」と。直家は曰ふのに「左様で御座いますとも。それに此の義經公は、いつも士卒の眞つ先に立つて進まれます。士卒は先陣の功名を樹てることも叶ひませぬ。(此の君に隨いては損で御座います。)全く隨いては行かれませぬ。所で平山氏は如何なつもりでゐられますことやら、一つ調べて見ませう」と。下僕に命じて、平山季重の様子を、コソソリのぞいて窺はせた。季重は、甲冑に身を固め、刀の柄に手をかけて、獨り言「誰か拙者に先だつことが出来ようぞ」と。之を聞きつけ、下僕は歸つて来て報告した。直實が曰ふのに「彼の見込みも、自分の見込みと同じなのである。(後れてはならぬぞ)」と。そこで直實等は、馬を馳せて一ノ谷へ行つて終つた。そして夜はまだ明けない。直實は早くも敵の門に詰め寄せ、名乗りを揚げて、戦を挑んだ。その内に案の定、平山季重が引き續いてやつて来た。敵がサツと門を闢いた。二人の者はイキナリ飛び込んで奮ひ戦つた。城内の兵もこれにはダチ／＼であつた。其の内に季重は門を出て来て、一息入れてゐると、自分の旗持の兵卒が矢で殺られた。季重は再び城内へ入り進み、旗持を殺した當の敵を斬り捨てて出て来た。其の内に、土肥實平も田代信綱も皆やつて来て、各々士卒をして引き續き敵を攻めしめた。門の守備は中々堅固で破れなかつた。

語釋 闢門(外に出でようと思つて、門を開いたのである。)

簡頼亦令諸軍薄東門。武藏人河原高直、與其弟、踰柵先登、中箭死。梶原景時使輕



卒拔柵以五百騎入圍。既退、顧失景季所在、復入索之。景季在敵中、被髮而鬪。箠梅花以自標。景時識見、挈之而出。

**訓讀** 箠も亦諸軍をして東門に薄らしむ。武藏の河原高直、其の弟と柵を踰えて先登し、箭に中つて死す。梶原景時、輕卒をして柵を抜かしめ、五百騎を以て入り鬪ふ。既にして退き、顧みれば景季の所在を失ふ。復入りて之を索む。景季、敵中に在り、髮を被りて鬪ふ。箠に梅花を挿み、以て自ら標とす。景時識見し、之を挈げて出づ。

**通釋** 一方箠も亦各軍に命令を出して東門生田に迫つた。武藏の人の河原高直は、その弟と、柵を乗り越えて先登し、箭に中つて戦死した。梶原景時は身輕な兵卒をして、柵を引き抜かせ、五百騎の兵を引率して城内に入り戦つた。その内一ト先づ退却して、フト振り顧みると、倅の景季がどこに行つたか姿が見えぬ。再び城内に入つて捜し索めた。所が景季は敵中に取り巻かれ、髮を打つさばいて奮戦してゐた。箠には梅の花を挿して、目標にしてゐた。景時はすぐソレと分つて、敵をやつつけて後、引きつれて城を出て來た。

**語釋** 被髮(髪を振り亂し、大童になること。景季は)此時、胃を打ち落されたのである。

當是時、平氏專防東西、二門而不圖。義經之向、鶴越也。路險夜黑。令辨慶索鄉導。辨慶認火光、得一人家。見翁、對坐。告以故。翁曰、小人以獵爲業、諳知山路。而

今老矣、有一兒、膽氣可用。呼起從辨慶、謁義經。義經執火視之、長身高頼、持獵弓矢。問其齒、曰、十七。義經爲冠之、命姓名曰、鷲尾經春。給鎧仗、以爲鄉導。問鶴越如何。經春曰、太險、人馬不可行。唯鹿能踰之。義經曰、鹿四足、馬四足、等耳。先衆馳之。

**訓讀** 是の時に當り、平氏、専ら東西の二門を防ぎ、義經を圖らず。義經の鶴越に向ふや、路險しく夜黒し。辨慶をして郷導を索めしむ。辨慶、火光を認め、一人家を得。翁の對坐するを見て、告ぐるに故を以てす。翁曰く、小人、獵を以て業と爲し、山路を諳知す。而れども今老いたり。一兒有り、膽氣用ふべし」と。呼び起して、辨慶に従ひ、義經に謁せしむ。義經、火を執つて之を視るに、長身高頼、獵弓矢を持す。其の齒を問ふ。曰く、「十七」と。義經、爲めに之に冠し、姓名を命じて、鷲尾經春と曰ひ、鎧仗を給し、以て郷導と爲す。問ふ、「鶴越は如何」と。經春曰く、太だ險しく、人馬行くべからず。唯だ鹿のみ能く之を踰ゆ」と。義經曰く、「鹿も四足、馬も四足、等しきのみ」と。衆に先だつて之に馳す。

**通釋** この時に當つて、平氏の方では、生田・ノ谷の東西二門を懸命に防禦してゐて、鶴越の方から義經が來よう、汜とは露程も考へてゐなかつた。所が義經は鶴越に向ひはしたものの、何分共に路が險阻で、加之に夜で眞暗である。これでは迎も進軍が覺束ないので、下僕の辨慶に、其の邊の道案内者を捜させた。辨慶は火の光を認め、やつと一軒の民家を見つけた。家の中に入つて見ると、其處には老人夫婦の者が向ひ合つて坐つてゐたので、辨慶は來意を告げた。すると老人が曰ふのに「私は獵を職業としてゐますので、山路は大抵そらで知つて



居りまする。けれども、もう今では老い込んで終つてお役には立ちませぬ。倅が一人御座います、此奴中々膽ツ玉が据つてゐて、随分とお役に立ちませうと存じます」と。老人は寝てゐた倅を呼び起して、辨慶に從はせ、義經にお目通りさせた。義經は明りを執つてよく視ると、丈は高く、頬骨が高く、獵の時に使ふ弓矢を持つてた。義經は「幾歳になる」と年齢を訊ねた。「十七で御座います」と曰つた。義經は此の男の爲めに、早速元服をさせ、姓名も鷲尾經春と命けてやり、鎧や武器を支給して、鶴越の案内者とした。義經は「鶴越といつて、一體どんな所だ」と問うた。經春が「非常に險しい所で、人間や馬の行ける所ではありません。唯だ鹿だけは能く越えます」と。義經が曰ふのに「鹿も四ツ足だし、馬も四ツ足で、同じぢや。越されぬ理はない」と。眞先きに立つて義經は馳せ行つた。

至鶴越、則天明、類視城中、二門戰方酣、義經欲急應之、而懸崖數百仞、如經春所言。衆相目、莫敢進者。乃試驅鞍馬二下之、一傷、一達。義經曰、可下矣。乃屈其所騎馬、後足一鞭而下。三千騎皆倣之。胃鞍相觸、直達城後。大呼而入。平氏軍駭擾、自相擊刺。教經等敗走。義經縱火乘之。烟焰漲城。範賴實平、破東西門而入。三面合擊、斬平通盛等十人、擒平重衡。宗盛奉乘輿、航海而逃。衆攀舟爭乘、斷臂滿舟。遂奔讚岐、倚田口成能之衆、保于屋島。

鶴越に至れば、唯ち天明く。城中を類視するに、二門の戰方に酣なり。義經、急に之に應ぜんと欲す。而れども懸崖數百仞、經春言ふ所の如し。衆相目し、敢て進む者莫し。乃ち試みに鞍馬二を驅つて之を下す。一は傷つき、一は達す。義經曰く、「下るべし」と。乃ち其の騎る所の馬の後足を屈し、一鞭して下る。三千騎、皆之に倣ふ。胃鞍相觸れ、直に城後に達し、大に呼んで入る。平氏の軍駭擾し、自相擊刺す。教經等、敗走す。義經、火を縱ちて之に乗す。煙焰、城に漲る。範賴・實平、東西の門を破つて入り、三面より合撃し、平通盛等十人を斬り、平重衡を擒にす。宗盛、乘輿を奉じ、海に航して逃る。衆、舟に攀ちて乗るを争ひ、斷臂舟に滿つ。遂に讚岐に奔り、田口成能の衆に倚り、屋島を保つ。

鶴越に着くと、夜は白々と明けた。鶴越の頂邊から城中を見下ろすと、東西二門の戰爭が今方に眞最中だ。義經は急に之に應援しようと思つた。併し切り立つたやうな數百仞の崖で、成る程經春の言ふ通りであつた。皆の者共は、只だ目を見合はず計りで、誰も吾れこそと進んで出る者もゐない。そこで義經は試しに、鞍だけつけた馬を二頭追ひ下ろした。一頭は負傷したが、一頭は無事に下に達した。義經が曰ふのに「ヨシ、大丈夫、下りられるぞ」と。そこで自分の騎つてゐる馬の後足を屈めて、一ト鞭あてて山を下りた。三千騎のもの共皆之に見倣うて山を下りた。前の者の胃と、後の者の鞍と觸れ合ひ、急轉直下、直ぐ様城の背面に達し、大聲に呼ばはり乍ら突つ込んで入る。平氏の方では吃驚して呆氣に取られ、大混雜が始まり、中には慌てて同志討ちをした者もあつた。此の方面を守つてゐた教經等は敗れ逃げた。義經はそこへつけ込んで火を放け、大に勢をつけた。煙や焰が城一面に漲つた。範賴と實平とは、東西の二門を打ち破つて、進み入り、三方から一度に攻め



立て、其の結果平通盛等十人を斬り殺し、平重衡を擒にした。宗盛は安徳天皇をおつれ申して、前以て用意してあつた船に乗つて海に出て逃れた。敗軍の士卒は皆舟に手をかけて、争うて乗らうとするので、片ツ端から其の手をブチ切つた。その切られた臂が舟の中に満ちた程であつた。それからとうとう平氏は讃岐に逃げ奔り、田口成能の軍勢に頼り、屋島を守ることになつた。

**語釋** 屈馬之後足(急な崖を下るのであるから、) 胃鞍相觸(崖は急であるから、騎する者は手綱を持つて後方へフン反り返へる。その様を頤端に表現したのである。大日本史には前後胃鞍相觸とある。要するに胃) 破東西門(範頼が東門、實平は西門) 十人(十人といふも、實は盛通、房、經俊、國盛、業盛、致盛) 斷臂滿舟(逃げようと思つて皆舟に手をかけてゐる。それが爲に舟が沈む懼があ) 盛俊等の十一人である。

九日、範頼、義經以首虜還京師、請徇而梟之。不許。義經抗疏曰、「臣父義朝、盡忠於保元、而爲人所誅、誤卒宣詬於獄門。平氏昨爲威勳、今爲國賊。臣等竭力攻討、進不顧死者、不獨重王命、乃欲雪父恥也。臣兄頼朝深存是志、今而不見許焉。臣等復何所望。朝議終許之。」

**訓讀** 九日、範頼、義經、首虜を以て京師に還り、徇へて之を梟せんと請ふ。許さず。義經抗疏して曰く、「臣の父義朝、忠を保元に盡して、人の誅誤する所と爲り、卒に詬を獄門に宣ぶ。平氏、昨は威勳たり、今は國賊たり。臣等、力を竭して攻め討ち、進んで死を顧みざる者は、獨り王命を重んずるのみならず、乃ち父の恥を雪が

んと欲するなり。臣の兄頼朝、深く是の志を存す。今にして許されずんば、臣等復何の望む所あらん」と。朝議終に之を許す。

**通釋** 九日、範頼、義經は、討ち取つた首や捕虜を携へて、京都に還り、町を引き廻して、首を獄門にさらしたいと願ひ出た。上では許されなかつた。義經は、それに反對の上書をして曰ふには「私の父の義朝は、保元の亂の際に忠義を盡しましたが、人(信賴をさす)の爲めに欺まされてとうとう恥を獄門にさらして終ひました。平氏も、昨日までは、外戚で又功臣でありましたでせうが、今では、國賊で御座います。私等が懸命に働いて平氏を攻め討ち、進んで、死をも顧みなかつたのは、ただ勅命を重んじたといふばかりでなく、一つには同時に父の恥を雪ぎ度いと思へばこそで御座います。私の兄の頼朝とても此の點を深く考へてゐるので御座います。今となつて平家の者の首を獄門にさらすことをお許しにならないのなら我々としては(外に望みはないのでありますから)何を目的に働きますやうぞ、(許されないとすれば我々の立つ瀬はなくなつて終ふ)」と。朝廷の評議で終に之を許された。

**語釋** 誅誤(欺き迷は) 獄門(牢屋の門前にある樺の樹に首を懸けて曝らして置く。後には臺を作りその上にて置くやうになつた。)

三月、頼朝以平義仲功叙正四位下。遣梶原景時、檻致重衡於鎌倉、面見使景時將命曰、「吾非忘相國之德。若王命何然不圖公之卒臨此也。則至若内大臣氏、亦當不日相見。重衡請速死。頼朝屬之於狩野氏侍。以二姬、餽酒食焉。以平族未夷、不輒



殺也。是月、令土肥實平鎮撫山陽道。六月、奏請任範賴參河守、叙從五位下。範賴來謝鎌倉、置酒勞之。八月、復遣西征。

三月、頼朝、義仲を平げし功を以て、正四位下に叙せらる。梶原景時を遣はし重衡を鎌倉に檻致せしめ、面のあたり見る。景時をして命を將はしめて曰く、「吾れ相國の徳を忘れたるに非ず。王命を若んせん。然れども公の卒に此に臨むを圖らざりき。則ち内大臣のごときに至つても、亦當に不日相見るべし」と。重衡、速に死せんことを請ふ。頼朝之を狩野氏に屬し、侍せしむるに二姫を以てし、酒食を餽る。平族未だ夷がざるを以て、輒く殺さざるなり。是の月、土肥實平をして山陽道を鎮撫せしむ。六月、奏請して範賴を參河守に任じ、從五位下に叙す。範賴、鎌倉に來り謝す。置酒して之を勞す。八月、復遣はして西征せしむ。

三月、頼朝は義仲を平らげた功勞で正四位下に叙せられた。頼朝は梶原景時を遣つて、重衡を牢輿で鎌倉へ送らせて對面した。頼朝は景時に立つて取次をさせて曰ふには、「自分は清盛殿に助けられた恩を忘れた譯ではない。天子の御命令で何とも致方がない。併し貴公が此處へお出で下さらうとは思ひ設けぬ所であつた。宗盛殿とても、やがてこちらで御目にかかれるようになることと存する」と。重衡は早く殺して呉れと頼んだ。頼朝は之を狩野氏に預け、二人の白拍子を側にかしづかせ、酒食を送つて、慰めてやつた。しかし、平氏の一族が未だ全部滅びないのでムサ／＼殺すことをしなかつた譯である。この月、土肥實平をやつて山陽道を鎮めさせた。六月、朝廷へお願ひ申して範賴を參河守に任じ從五位下に叙して貰つた。範賴は鎌倉へお禮に出た。酒を置いて之を勞らつた。八月、また範賴を派遣して西、平氏を征伐せしめた。

將命(取り次ぐ) 〇二姫(千手、伊王)

是月、法皇以義經任左衛門尉、補檢非違使。時伊賀人作亂、應平氏州守護平賀惟義討平之。餘黨竄匿京師。義經捕斬之。九月、頼朝以範賴統西海軍事、義經統南海軍事、令範賴先發。以三萬騎下山陽道。聞平行盛軍兒島、赴攻陣于藤戶。阻海水、望敵。敵招之挑戰。我兵不能渡。佐佐木盛綱潛問土人以津夜與俱濟。植竹條爲標。而還。旦日、敵復挑戰。盛綱躍馬破濤而進。衆從之。擊走行盛。進入周防。是月、義經叙從五位下、聽院昇殿。

是の月、法皇、義經を以て左衛門尉に任じ、檢非違使に補せらる。時に伊賀の人、亂を作し、平氏に應ず。州の守護平賀惟義討つて之を平ぐ。餘黨京師に竄匿す。義經捕へて之を斬る。九月、頼朝範賴を以て西海の軍事を統べしめ、義經に南海の軍事を統べしめ、範賴をして先づ發せしむ。三萬騎を以て山陽道を下る。平行盛兒島に軍すと聞き、赴き攻め、藤戶に陣す。海水を阻てて敵を望む。敵之を招いて戰を挑む。我が兵渡る能はず。佐々木盛綱潛に土人に問ふに津を以てし、夜與に俱に濟り、竹條を植てて標と爲して還る。旦日、敵復戰を挑む。盛綱馬を躍らせ濤を破つて進む。衆之に従ふ。撃つて行盛を走らせ、進んで周防に入る。是の月、義經從五位下に叙せられ、院の昇殿を聽さる。



**通釋** この月、法皇は、義經を左衛門尉に任じ、檢非違使に補せられた。其の時伊賀の人が亂を爲して平氏に味方した。伊賀の守護職平賀惟義が討つて之を平げた。その殘黨が京都に逃げ込み匿れて居た。義經は、それ等を捕へて斬つた。九月、賴朝は、範賴に、西海道方面の軍事を統御させ、義經に南海道方面の軍事を總管せしめ、範賴を先づ最初に出發させた。範賴は三萬騎を率ゐて山陽道を下つた。平行盛が兒島に陣取つて居ると聞き、その地へ行つて攻めることになり、藤原に陣を張つた。海を間に置いて敵と相對し望んだ。敵は之を招いて戰をしかけた。我が兵は海を渡ることが出来ない。佐々木盛綱は、こつそり土地の者に淺くて渡りいい所を尋ねた。夜の間に其の者と一緒で渡つて、竹の枝を立てて目標として置いて還つて來た。あくる日、敵がまた戰を挑んだ。盛綱は、馬を躍らせて海に飛び込み、濤を蹴破つて進んだ。全軍之に従つた。撃つて行盛を走らせ、進んで、周防に入り込んだ。この月、義經は、從五位下に叙せられ、院の昇殿を許された。

**語釋** 任左衛門尉(賴朝の推薦がなかつたので、法皇が隨意に御叙任になつた。賴朝は不豫嫌であつたといふことである。) ○伊賀人(平貞) ○兒島(備前) ○藤戸(渡口の地名)

十月、賴朝置公文所以大江廣元爲別當焉、以出政令、置問注所以三善康信爲執事焉、以決訟獄、令將士曰「凡武門之事、悉奉法皇旨、有不便者、徐分疏之。」遂奏曰「方今、天下半定、貢賦闕乏、請簡釋國守、撫輯流民、京畿控弦之士、悉從義經、西討平氏、其有功者、宜附臣論賞焉。」僧徒帶兵者、宜附臣禁止收取焉、又檄關西諸族、援攻平氏。

氏

**訓讀** 十月、賴朝公文所を置き、大江廣元を以て別當と爲し、以て政令を出だし、問注所を置き、三善康信を以て執事となし、以し訟獄を決す。將士に令して曰く「凡そ武門のことは、悉く法皇の旨を奉じ、便ならざる者あらば、徐に之を分疏せよ」と。遂に奏して曰く「方今、天下半は定まり、貢賦闕乏す。請ふ、國守を簡釋し、流民を撫輯せしめん、京畿控弦の士は、悉く義經に従ひて、西、平氏を討たしめ、其の功ある者は、宜しく臣に附して論賞すべし。僧徒、兵を帶ぶる者は、宜しく臣に附して禁止收取すべし」と。又關西の諸族に檄し、援けて平氏を攻めしむ。

**通釋** 十月、賴朝は、公文所を置き、大江廣元を、その頭となし、そこから政治命令の出るようにし、又問注所を置き、三善康信をその執事として公事訴訟を決定させた。將士に命令して曰ふに「すべて、武門の事は、全部法皇の思召を受けて行ふようにし、若し法皇の仰せらるることに都合の悪いことがあつたら、ゆる／＼と申し開きをせよ」と。遂に奏上して曰ふに「當今、天下は半ば平定致しましたが、租税は不足して居ります。國守にする人物をえらんでその地の流民をあつめ安んずることに致したいもので御座います。京都地方にゐます所の武士どもは、皆義經に従つて、西の平氏を討たせることにしまして、その手柄のありましたものは、私の方へお引き渡し下されて功を論じ賞を興へるようにならうと致したいので御座います。僧徒で武器を携帶してゐるものは、私へお廻はし願ひ、之を禁止し、その武器杯は取り上げるようにならうと致したら宜からうと存じます」と。關西の諸家に觸れを出して範賴、義經を援けて、平氏を攻めさせた。



語釋 控弦之士(弓のつるを引く士、即ち武士。)

文治元年正月、範頼至赤間關。無舟可濟。軍疲糧乏、將士皆思東歸。範頼以書請濟軍食。頼朝答書、因戒範頼曰、「在軍務、綏撫衆心、慎勿左右耳語、致其危疑。乃至進戰、慎勿犯先帝太后。願使二位尼奉帝而至也。宗盛恇怯、必生得之。」範頼諭曰、「杵氏給戰艦、木上氏餽糧食、遂進濟海。諸千葉常胤曰、「吾聞之家兄、周防通京畿、控宰府、爲西國咽喉。吾今欲令智勇而有衆者居守焉。誰可者？」對曰、「三浦義澄其人。」乃命義澄固辭不許。範頼以諸軍濟海。二月、頼朝所給糧船至。軍益振。與原田種直戰于葦屋浦、大破之、得其子賀摩。

訓讀 文治元年正月、範頼赤間關に至る。舟の濟るべき無し。軍疲れ、糧乏しく、將士皆東歸せんことを思ふ。範頼、書を以て軍食を濟さんことを請ふ。頼朝答書し、因つて範頼を戒めて曰く、「軍に在つては、務めて衆心を綏撫し、慎んで左右と耳語し、其の危疑を致すこと勿れ。乃ち進み戦ふに至つては、慎んで、先帝、太后を犯すこと勿れ。願はくば二位の尼をして、帝を奉じて至らしめよ。宗盛は恇怯、必ず之を生得せよ」と。範頼、杵氏を諭して戰艦を給せしめ、木上氏には糧食を餽らさしめ、遂に進んで海を濟らんとす。千葉常胤に語つて曰く

吾れ之を家兄に聞けり。周防は京畿に通じ、宰府を控へ、西國の咽喉たりと。吾れ今智勇にして衆ある者をして居守せしめんと欲す。誰か可なる者ぞ」と。對て曰く、「三浦義澄は其の人なり」と。乃ち義澄に命ず。固く辭す。許さず。範頼、諸軍を以て海を濟る。二月、頼朝給する所の糧船至る。軍益々振ふ。原田種直と葦屋浦に戦ひ、大に之を破り、其の子賀摩を得たり。

通釋 後鳥羽天皇の文治元年正月、範頼は赤間關に着いた。渡るのに船がなかつた。それに軍士は疲勞し、兵糧は缺乏し、將士は皆關東に歸り度いと思つた。範頼は、手紙を出して兵糧を増し送つて貰ひ度いと願ひ出た。頼朝は返事を出し、その序に、範頼を戒めて曰ふのに「軍中では出来るだけ、大勢の心を樂に落ち着かせ、決して側の者どもと耳うちをして、他の者に危ぶみ疑ふ心を起させてはならぬ。それから、進み戦ふ際にはよく氣をつけて、先帝(安徳天皇)太后(建禮門院)に無禮をしてはならぬ。出来ることなら、二位の尼が先帝をおつれ申してこちらへ來られるやうに計らへ。宗盛は、生れつき臆病者であるから、必ず生捕りにせよ」と。範頼は、杵氏を諭して、兵船を支給せしめ、木上氏に兵糧を送らせるやうにし、それから進んで海を渡らうとした。千葉常胤に相談して曰ふには「自分は兄さんから聞いた事がある。周防は京畿に通じ、太宰府を後にひかへ、西國の咽喉に當る大切な處であると。自分は智勇のあり且つ手下の多い者に留まつて此處を守らせようと思ふ。誰が宜いだらうか」と。常胤は對へて曰ふに、「三浦義澄が恰好の人である」と。そこで、義澄に命じた。義澄は固く辭退した。併し、許さなかつた。範頼は、諸軍を率ゐて、海を渡つた。二月、頼朝から支給した兵糧を積んだ船が届いた。それに、勢を得て範頼の軍は益々振つた。原田種直と葦屋浦で戦ひ大に之を破り、その子の賀摩といふも



のを捕へた。

赤間關(長門) ○濟(益子) ○臼杵氏(豐後白) ○木上氏(周防木上) ○葦屋浦(筑前)

先是義經數請征南海法皇以京師多賊黨不許許先遣其將校義經奏曠日彌久範賴糧盡東歸而鎮西兵士寢屬平氏則勢難拔也乃許之義經乃戎服抵法皇宮白曰自平氏奔竄關西奪官稅亂官民三年于此臣既奉追討之命鬼界高麗究其所至慶之而後已否者不復入王城矣

訓讀 是より先き、義經、數々南海を征せんことを請ふ。法皇、京師に賊黨多きを以て許さず。先づ其の將校を遣すことを許す。義經奏す、「日を曠しうして久しきに彌らば、範賴、糧盡きて東歸せん。而して鎮西の兵士、寢く平氏に屬せば、則ち勢拔き難からん」と。乃ち之を許す。義經乃ち戎服して、法皇の宮に抵り、白して曰く、「平氏、關西に奔竄してより、官稅を奪ひ、官民を亂すこと、此に三年なり。臣、既に追討の命を奉ず。鬼界、高麗、其の至る所を究め、之を慶にして後已まん。否らざれば、復王城に入らず」と。

通釋 これより先き義經は、度々南海道の平氏を征伐したいと願ひ出た。法皇は京都に賊の一味が多いのでお許しにならなかつた。先づ義經の部下の隊將を派遣することを許された。義經は申上げるのに「愚圖々々して日を過して久しきに渡りますると、範賴の方で兵糧がなくなり、こちらへ歸つて来るやうなことになるませう。そして九州の兵がだん／＼平氏に屬くことになりますと、其の勢は強くなつて手のつけられないやうになるでせ

うと、そこで法皇は義經の西征を許された。義經はそこで甲冑を身につけ、法皇の御所へ来て申上げて曰ふには「平氏は關西に逃げかくれて以來朝廷へ差出す年貢を横取りし、官民上下を騒がすこと早や二年にもなります。私は、既に追討の御命令を受けましたのです。鬼界、高麗の果てまでも、平氏の行くところまで追ひ詰め、皆殺にせねば止めません。若しそれが出来なかつたら再び京都へは返つて参りません」と。

語釋 南海(屋島を)

二月發京師、議于渡部、東兵不習水戰。人人自危。梶原景時曰、「請爲逆櫓。」義經曰、「何謂逆櫓。」曰、「舳艫皆設櫓、進以舳、退以艫。」義經曰、「求進而退、兵之通患。乃欲求退乎。」曰、「宜進而進、宜退而退、良將也。有進而無退、野猪而介者耳。」義經變色曰、「猪乎、鹿乎、吾不自知。吾唯知進而勦敵爲快而已。公若爲大將、逆櫓千百、聽公所爲。若義經則不欲也。」衆目笑。景時慚恚。

訓讀 二月、京師を發し、渡部に議す。東兵、水戰に習はず。人人自ら危ぶむ。梶原景時曰く、「請ふ、逆櫓を爲らん」と。義經曰く、「何をか逆櫓と謂ふ」と。曰く、「舳艫、皆櫓を設け、進むに舳を以てし、退くに艫を以てす」と。義經曰く、「進むを求めて退くは、兵の通患なり。乃ち退くを求めんと欲するか」と。曰く、「宜しく進むべくして進む、宜しく退くべくして退くは、良將なり。進む有りて退く無きは、野猪にして介する者のみ」と。



義經、色を變じて曰く、「猪か、鹿か吾れ自ら知らず。吾は唯だ進んで敵を刺すの快たるを知るのみ。公、若し大將と爲らば、逆櫓千百、公の爲る所に聽せん。義經の若きは則ち欲せざるなり」と。衆、景時を目笑す。景時慚志す。

文治元年の二月、義經は京都を出發して、渡部といふ所で船を出す用意をした。所が關東の兵は水上の戦争には慣れてゐないので、誰れも彼れも皆危なしく感じてゐた。梶原景時が曰ふのに「何卒、逆櫓を造る事に致し度いものであります」と。義經が「逆櫓つて、何んだ」といふ。景時が對へていふのに「逆櫓と申すものは船にも、櫓にも皆櫓を作り置いて、進むときには船を先きにして進み、退くときには櫓を先きにして退くのであります」と。それを聞いて義經が「軍といふものは、進めよ」と、望んでも、兎角退却し勝ちなものであつて、これは軍の通患である。それを初めから退却しようと思つてかかるのか」と。景時がいふのに「宜しく進むべき時に進み、宜しく退く可き時に退くのが良い大將である。進むことばかりして、退くことを知らないのは、左様、野猪が鎧を着たとしても申しませう」と。義經は顔色を變へて怒つて曰ふのに「猪か鹿か我輩は知らぬ。この我輩は進んで敵を刺すの愉快を知つてゐるばかりぢや。貴君が大將になつたら、千百の逆櫓、隨意に幾らでも作つたら宜からう。この義經の如きは、失禮だがそんなことは欲する所ではないのである」と。大勢の者は皆互に見合つて景時の卑怯を笑つた。景時は慚ち無念に思つた。

○逆櫓(逆に舟を行ふことも出来るやうに) ○船櫓(説文には船船尾、櫓は船頭とあるのが、和名抄に船はへ、櫓はトモと訓じ、小爾雅に解す) ○進以櫓(櫓者多くつてなる解す。櫓を以て進むといふことは、櫓の方の櫓を用ひ) ○猪乎鹿乎(自ら猪か鹿か何か

二五二

義經遂令將士曰進而死者從我退而生者自此去畠山重忠熊谷直實金子家忠佐佐木高綱等願從者數百人將發逆風俄起舟艦壞破乃留修艦艦成義經託言落宴以具糧食即夜令解纜時風反而益暴舟人不肯義經曰風順盍發伊勢義盛張弓注矢曰不用命者射殺舟人相謂曰行死死死一耳乃發從者五艦百五十騎獨置炬於義經舟乘暗而南舟駛如射黎明達尼子浦望岸上有赤幟可三百騎義經令曰我馬足瑟縮不可直用驅而游之結束騎焉勿虛發以費箭衆從之上岸大戰擒敵將田口良連

義經、遂に將士に令して曰く「進んで死なん者は我に從へ。退いて生きん者は此より去れ」と。畠山重忠・熊谷直實・金子家忠・佐佐木高綱等、從はんことを願ふ者數百人。將に發せんとす。逆風俄に起り、舟艦壞破す。乃ち留まりて艦を修む。艦成る。義經、落宴に託言し、以て糧食を具へ、即夜、纜を解かしむ。時に風反つて益々暴る。舟人肯んぜず。義經曰く「風順なり。盍ぞ發せざる」と。伊勢義盛、弓を張り、矢を注して曰く「命を用ひざる者は射殺せん」と。舟人相謂つて曰く「行くも死し、止まるも死す。死は一のみ」と。乃ち發す。從



ふ者五艦。百五十騎なり。獨り炬を義經の舟に置き、暗に乗じて南す。舟駛すること射るが如し。黎明、尼子浦に達す。岸上を望めば、赤幟有り、三百騎可り。義經、令して曰く、「我が馬足瑟縮し、直に用ふ可からず。驅つて之を游がしめ、結束して騎れ。虚しく發して箭を費すこと勿れ」と。衆之に従ふ。岸に上つて大に戦ひ、敵將田口良連を擒にす。

**通釋** 義經は遂に將士に命令を出していふのに「進んで死ぬる覺悟のある者は自分に從いて來い。退いて生きようと思ふ者は、此處から直ぐ立ち去つたら宜からう」と、畠山重忠・熊谷直實・金子家忠・佐佐木高綱等を初め從はんことを願ひ出た者が數百人からゐた。これから出發しようとした。すると逆ひ風が急に起つて來て、舟と舟とが風の爲めに衝突して破壊した。そこで致方なく、暫時逗留して艦を修復することになつた。其の内に修繕も出來上り、元のやうになつたので、義經は艦の落成した祝宴を開くといふ事に事よせて、艦の中にドン／＼兵糧を運び込み、其の方の用意を整へ、其の夜すぐ纜を解いて出帆させることにした。所が丁度、これまで逆風であつたのが、吹き返して順風にはなつたが、前よりはもつと／＼暴ひ風であつた。船頭共は、これぢや迎も船は出せないと頑張つた。義經がいふのに「風は追つ手であるぞ。何故あつて出發しないのだ」と。伊勢義盛は弓を張り矢を注がへていふのに「君の命令通りにしない奴は射殺してやるぞ」と。船頭共は互に言ひ合つていふのに「此の風ぢや、船を出したつて死ぬるんだし、出さなきあ、あの矢でお陀佛と來らあ、どつちにしたつて死ぬるに變りはない。(同じ死ぬなら出掛るとうしようではないか)」と。そこで愈々出發した。從ふものは五艘の艦、百五十騎であつた。義經の乗り込んでゐる艦にだけ、炬火を設け置き、闇夜に乗じて敵へ敵へと艦を走らせた。追手のこ

とではあるし、舟の駛ることは矢を射るがやうに速やかかつた。夜明け方尼子の浦に到着した。岸の上を望み見るに、平家の赤旗が樹つてゐる、三百騎ばかりの兵が守つてゐた。義經は命令を出して曰ふのに「何しろ船の中で長い間馬を、すくませ置いたので、馬の足が縮みすくんでゐて、今直ぐの用には立たぬ。馬を追ひ込んで海の中で游がせて足を伸ばせ、それ／＼身支度をして乗るやうにしる。又矢鏢に、無駄矢を放つて、箭を浪費してはならぬぞ」と。部下の衆はその言葉通りにした。かくて岸の上上つて大に戦ひ敵の大將の田口良連を擒にした。

**語釋** 尼子浦(阿波) ○瑟縮(足が立ちすくむこと。馬は眠る時でも立つたままのもの。それを)

其捕虜言「櫻間良遠以五十兵守勝浦城。義經馳抵城、疾攻拔之。進至中山。見一卒齋書。京人也。義經問曰「子何之。」曰「之屋島。義經曰「吾阿波人、應内府徵者。如聞源氏、儀淀河子必途觀之。其兵幾何。」卒曰「可六萬。」曰「子所齋誰書。」曰「六條夫人書。夫人内府妹也。曰「書中何言。」曰「吾焉得知之。獨口授我曰「九郎既發京矣。彼真可畏者。以木曾如鬼神、彼一舉取之。君急修城集兵、以爲之備。」書辭亦如。是耳。若公等亦宜亟赴之。」曰「諾。且子屢赴屋島乎。」曰「然。曰「聞其城甚固。然否。」曰「否。潮來則須舟、潮去可騎渡。」義經乃叱曰「吾九郎也。」奪其書縛卒于樹、以五十騎疾馳。



其の捕虜言ふ、「櫻間良遠、五十の兵を以て勝浦城を守る」と。義經馳せて城に抵り、疾く攻めて之を拔き進んで中山に至る。一卒の書を齎らすを見る。京人なり。義經問うて曰く、「子、何くに之く」と。曰く、「屋島に之く」と。義經曰く、「吾は阿波の人、内府の徴に應ずる者なり。聞くが如くんば、源氏、淀河に贓すと。子、必ず途に之を觀たらん。其の兵幾何ぞ」と。卒曰く、「六萬可り」と。曰く、「子の齎らす所は誰の書ぞ」と。曰く、「六條夫人の書なり」と。夫人は内府の妹なり。曰く、「書中何をか言ふ」と。曰く、「吾れ焉んぞ之を知るを得ん。獨り口づから我に授けて曰く、「九郎、既に京を發せり。彼は眞に畏るべき者、木曾の鬼神の如きを以てするも、彼れ一舉にして之を取れり。君、急に城を修め兵を集め、以て之が備を爲せよ」と。書辭も亦是くの如くならんのみ。公等の若きも、亦宜しく亟に之に赴くべし」と。曰く、「諾。且つ子、屢く屋島に赴くか」と。曰く、「然るべし」と。曰く、「其の城、甚だ固しと聞く。然るや否や」と。曰く、「否。潮來らば則ち舟を須ひ、潮去らば騎渡すべし」と。義經、乃ち叱して曰く、「吾は九郎なり」と。其の書を奪ひ、卒を樹に縛し、五十騎を以て疾く馳す。

**通釋** 其の時の捕虜の者が言ふのに「櫻間良遠が五十騎の兵を率ゐて勝浦の城を守つて居ります」と。義經は馳せて勝浦城に至り、急に攻めて之を陥れ、それから進んで中山といふ所まで来た。一人の兵卒が手紙を持つて道を急いでゐるのに出會つた。京都の者である。義經が問うて曰ふのに「貴公は何處へ行かつしやるのだ」と。其の卒が曰ふに「屋島に行きます」と。義經が曰ふのに「拙者は阿波の者だが、内大臣宗盛卿のお召しに應じて參つてゐる者だ。聞く所によると源氏は淀河で出船の用意をしてゐるといふことだ。貴公は屹度途中で其の様子を觀たことだらう。一監源氏の兵はどれ位ゐた」と。其の卒が曰ふのに「左様、六萬計りもゐたやうです」。義經

は「貴公の持參してゐるのは誰れの手紙なのだ。」「これですか、これは六條様の奥方の手紙でさあ。この六條夫人といふ人は平宗盛の妹に當る人である。そこで義經は尋ねて曰ふのに「その手紙の中には何が書いてあるのだ」と。其の卒が曰ふのに「それや駄目です。どうして分るものですかね。ただ奥方様が口づから、この私に仰せらるるには『九郎義經は早や既に京都を出發しました。九郎は眞固に畏るべき男で、あの木曾義仲程の鬼神のやうに強い男でも、あの九郎は、一度の戦ひで倒して終ひました。(その男が兄上様を攻めに都を立ちましたから)兄上様には大急ぎでお城の御修理をなされ、兵をお集めなさいまして、十分な用意をなされませ。』と。此の手紙の中に書いてある文句も、矢張りそんな事だらうと思ふ。貴公等の若きも早く内府を援けに行かれたら宜しいでせう」と。義經が曰ふのに「承知した。それに貴公は度々屋島へ行つたことがあるのか」と。其の卒が曰ふのに「ハイ、度々行つたことがあります」と。義經が曰ふのに「屋島の城は大層堅固だと聞いてゐるが、眞實か」と。其の卒が曰ふのに「なあに、潮がさし込んで來ますと舟でなければ渡れませぬから、自然と舟が必要になるのですが、潮が退けば馬に乗つて渡ることが出來ます」と。言はせるだけ言はせて置いて義經は叱りつけて曰ふのに「此の間抜け野郎め、この俺れが其の九郎なのだ」と。其の手紙をフン奪り、其の卒を樹に縛りつけて、五十騎を引きつれ大急ぎで屋島へ馳せ行つた。

**語釋** 其捕虜(田口良遠に非ず。その) ○勝浦城(阿波) ○中山(阿波と讃岐の界) ○六條夫人(六條殿といはれた攝政藤原基實の夫人) ○夫人内府妹也(筆者の施した注脚である。この句を京卒の言として譯する説もある。)

明日、至屋島、縱火於高松里。平氏大驚、以爲大兵至也。舉族乘舟而義經已至城下。



矣。騎能屬者七人而已。城兵有平有國呼曰「大將誰」。伊勢義盛對曰「九郎判官」。曰「是義朝婢子、從鐵賈如陸奥者乎」。義盛怒。城兵嘲罵不已。金子家忠令弟近範注箭射殺罵者。義經恐敵知其寡單也、乃縱火燒城。平氏兵皆航、更來迫岸。七騎拒射。我兵後者稍稍來屬。又有州人藤原範忠者、以生兵數騎來曰「臣曾祖範明、嘗從八幡公戰陸奥者。義經喜以為先鋒、戰而交退。日既晡、敵以一舟載美姬、插扇子竿植之。去陸五十步、麾而請射。義經曰「誰命中之者」。衆薦下野人那須宗高、義經召而命之。宗高騎而獨出、兩軍注視。宗高一發、斷扇、扇翻而墮。兩軍大呼。

**訓讀** 明日、屋島に至り、火を高松里に縦つ。平氏、大に驚き、以て大兵至ると爲し、擧族、舟に乗る。而して義經、已に城下に至る。騎の能く屬する者、七人のみ。城兵に平有國なるあり、呼んで曰く「大將は誰ぞ」と。伊勢義盛對へて曰く「九郎判官なり」と。曰く「是れ義朝の婢子、鐵賈に従ひ陸奥に如きし者か」と。義盛怒る。城兵嘲罵して已まず。金子家忠弟近範をして箭を注し、罵る者を射殺せしむ。義經、敵の其の寡單なるを知らんことを恐れ、乃ち火を縦つて城を燒く。平氏の兵、皆航し、更來つて岸に迫る。七騎拒ぎ射る。我が兵の後るる者、稍々來り屬す。又州人藤原範忠といふ者あり、生兵數騎を以て來つて曰く「臣の曾祖範明は、嘗

て八幡公に従ひて陸奥に戦ひし者なり」と。義經喜び、以て先鋒と爲し、戰つて交々退く。日既に晡なり。敵、一舟を以て美姬を載せ、扇を竿に挿み、之を船に植つ。陸を去ること五十步。麾いて射んことを請ふ。義經曰く、「誰か之に命中する者ぞ」と。衆、下野の人那須宗高を薦む。義經召して之に命ず。宗高騎して獨り出づ。兩軍注視す。宗高一發にして、扇を斷ち、扇翻つて墮つ。兩軍大に呼ぶ。

**通釋** 其の翌日、義經は屋島に着いて、火を高松の里につけた。平氏の方では大に驚き、これは源氏方の大兵がやつて来たのであらうと思ひ、一族の者残らず皆舟に乗り込んだ。さう斯うしてゐる間に早や義經は、屋島の城の下までやつて来た。義經によく續いて來ることの出來た部下の騎は僅かに七人だけであつた。城中の兵に平有國なる男がゐて、大聲に呼ばはつて曰ふには、「一體お前方の大將は誰なのだ」と。伊勢義盛がそれに答へて曰ふには「九郎判官義經公だ」と。すると有國が曰ふのに「それでは、アノ義朝の下女が生んだ子で、鐵商人にお供して陸奥へ行つた男のことか」と。義盛はカツと怒つた。所が城中の兵は悪口雜言して止まない。金子家忠は弟の近範をして箭を注へて、その悪口する者を射殺させた。義經は、敵が味方の手薄い事を知るのを恐れたので、それで火をつけて城を燒いた。平氏の兵は皆舟に乗つて、代るくやつて來て岸の源氏方へ迫つた。七騎の者はここを先途と拒ぎ射る。その内に味方の兵で後れた者が、だんくやつて來て附いた。その上に土地の者で藤原範忠といふ者が新しの兵數騎を率ゐてやつて來て曰ふには、「私の曾祖の範明と申す者は、以前八幡太郎義家公のお供をして、陸奥で戦ひましたので御座います」と。義經は喜んで範忠を先鋒となして戰つたが、やがて兩軍ともに退却した。その内に日が早や暮れかかつて來た。敵方では一艘の舟に美しい女を乗せ、扇を竿の先きに



挿んで、それを舟のへ先に立てた。丁度陸を離ること五十歩位の處である。何をするかと見てみると、其の女が手招きして、この扇を射て御覽なさいといはぬ許りに所望してある。義經が曰ふのに、「誰か之に射中てる者はぬか」と。多勢の者は皆下野の人那須餘一宗高が宜しいでせうと推薦した。そこで義經は宗高を召んで、射中てるやうに命令した。宗高は馬に騎つて獨りで海に乗り出して行つた。敵も味方も片唾を呑んで、皆注目してゐる。宗高はヒヨウと一發放つて、扇の要を射ち切り、扇はヒラ／＼と飄つて、海中に墮ちた。その鮮やかな手の内に、思はず敵も味方もワイ／＼唯し立て喝采した。

**語釋** 高松里(岐) ○七人(重忠・直實・季重・實平・義盛・高綱等。盛衰記には源氏五千餘騎にて) ○州人(土地の人即ち) ○美姬(建禮門院玉島であつたと) ○五十歩(一步は六尺である)

平氏兵怒而來戰。義經親擊卻之、追而入海。遺其所執弓于波上。俯欲取之。敵兵爭以鐵搭鉤其胃。義經以刀扞之、鞭扱其弓。從兵呼曰「舍之」。義經不聽。終取之還。從兵曰「君何輕身而重弓」。曰「不也。使吾弓如叔父鎮西八郎之弓、則可。否者、是貽敵笑也」。宗盛憾失義經、令教經率精兵追岸射義經。佐藤嗣信以身蔽義經、輒仆。教經豎菊王、下舟欲斬其首。嗣信、弟忠信、射殺菊王、扶兄還營。

**通釋** 平氏の兵怒つて來り戰ふ。義經、親ら撃つて之を卻け、追つて海に入る。其の執る所の弓を波上に遺す。

俯して之を取らんと欲す。敵兵争ひ鐵塔を以て、其の胃を鉤す。義經、刀を以て之を扞ぎ、鞭もて、其の弓を扱らんとす。從兵呼んで曰く、「之を舍けよ」と。義經聽かず、終に之を取りて還る。從兵曰く、「君、何ぞ身を輕んじて弓を重んずるか」と。曰く、「不らざるなり。吾が弓をして叔父鎮西八郎の弓の如くならしめば、則ち可なり。否らざれば、是れ敵に笑を貽すなり」と。宗盛、義經を失ひしを憾み、教經をして精兵を率ゐて岸に迫り、義經を射しむ。佐藤嗣信、身を以て義經を蔽ひ、輒ち仆る。教經の豎、菊王、舟を下りて、其の首を斬らんと欲す。嗣信の弟忠信、菊王を射殺し、兄を扶けて營に還る。

**通釋** 平氏の方では眞逆と思つてゐた扇を射落されて癩に觸り、腹立ちまぎれにやつて來て戰つた。義經は自身撃つて之を退け、逃げる奴を追かけて海の中へ入つて行つた。其の時自分の持つてゐた弓を、誤つて波の上に取り落した。義經はうつつ向いて、其の弓を拾ひ取らうと思つた。敵は隙さず、我も我もと、鐵の熊手で以て義經の胃を引つ掛けようとする。義經は刀で以て之を扞ぎ乍ら鞭で以て其の弓をかき寄せた。供の兵士が、その危険な有様を見て、呼んでいふのに、「お止しなさい、危いからお棄て置きなさい」と。義經は承知しないで、たうとう其の弓を取り上げて引き還した。供の兵が諫めて曰ふに、「吾が君には、何故あつて左様にお身を輕んぜられて弓を重んじられるので御座いますか」と。すると義經が曰ふのに、「いや／＼さうではない。自分の弓が、叔父様の鎮西八郎爲朝公のお用ひになつたやうな強弓ならそのまま捨てて置いて宜いのである。左様でないからには、ナンダ義經はこんな弱い弓を彎くのかと、敵に笑ひの種を残すといふものだ。」と。宗盛は義經を今一息といふ所で失つたことを残念がり、教經に言ひつけて、選り拔きの強い兵を率ゐて、岸に迫つて義經を射たしめた。佐藤



嗣信といふ義經の家來が、自分の身體で義經をかばひ、教經の弓に應じて仕れた。教經のお小姓の菊王といふものが、舟から下りて、嗣信の首を斬らうと思つた。嗣信の弟の忠信が菊王を射殺して、兄を扶けて兵營へ引き還した。

精兵(盛綱・景清・忠光等三十餘人の者)

義經親視嗣信、枕之膝、問所欲言。嗣信曰、「臣自出陸奥、已委身於君。代君而死、且不朽。獨不覩君、塵敵爲憾耳。」義經泣曰、「我塵敵在旬日、而不及疇汝勞。」嗣信肯謝而絶。是日、鎌田光政亦被箭死。義經請僧葬、光政嗣信于高松、贈以名馬。蓋藤原秀衡所贖、宇治一谷二役所騎也。一軍感泣、皆思爲義經死。

訓讀 義經、親ら嗣信を視て、之を膝に枕せしめ、言はんと欲する所を問ふ。嗣信曰く、「臣、陸奥を出でしより、已に身を君に委す。君に代つて死す、死すとも且朽ちず。獨だ君の敵を塵にするを觀ざるを憾みと爲すのみ」と。義經泣いて曰く、「我れ敵を塵にするは、旬日に在り。而るに汝の勞に疇ゆるに及ばず」と。嗣信、肯謝して絶ゆ。是の日、鎌田光政も亦箭を被つて死す。義經、僧に請ひ、光政・嗣信を高松に葬り、贈するに名馬を以てす。蓋し藤原秀衡の贖する所にして、宇治・一谷の二役に騎る所なり。一軍感泣して、皆義經の爲めに死せんことを思ふ。

通釋 義經は自身嗣信を介抱し、自分の膝の上に枕をさせて、何か言ひ度いことがあれば言ふようにと尋ねた。嗣信が曰ふのに「私は陸奥を立ち出でました時から、早く既に我が身は、君にお委せ致しました。斯うして君の身代りになつて討死致しますことは、誠に名譽のことで御座いまして、我が身は死にましても、この譽れは未代まで朽ち申しませぬ。ただ残念なのは、君が敵を塵になさるのを見ないで死ぬことはかりで御座います」と。義經はそれを聽いて、泣いて曰ふのに「自分が敵を皆殺にするのは十日以内にあるのだ。其の許の骨折に酬ゆる所まで行かないで残念だ」と。嗣信は肯づき禮をして、呼吸が絶れて終つた。この日鎌田光政も亦箭に中つて討死した。義經は土地の僧侶に頼んで、光政と嗣信とを高松に葬つてやり、そして贈物として名馬を兩人に贈つた。この馬は藤原秀衡が餞別として呉れたもので、宇治の戦・一谷の戦の二役に義經が騎つたものである。斯く名馬を、部下の忠臣の供養に下さるといふことは、全軍に非常な感激を興へ、全軍のものはそれが爲めに感泣して、皆此の義經公の爲なら働き甲斐があるといふもの、命を的に働かうと思つた。

語釋 死且不朽(身は死んでも名は朽ちない) ○贈(死人に物を贈るを贈といふ、香奠供養のやうなもの。春秋では車馬を贈る場合を贈といふ。貨財の時贈といふ) ○名馬(大夫馬といつた)

是夜、西軍陣屋島、故趾東軍陣高松。東軍皆倦臥。獨伊勢義盛、虞敵來襲、徇警徹明。明日、義經侵晨復赴屋島。西兵善戰、擊破之。平氏走保志度浦。義經追擊復破之。因降將言、聞平氏將田口成能遣其子成直、以兵三千徇伊豫。命伊勢義盛往說降之。義經并其兵、使成直作書招成能。成能終送款焉。平氏舟逃志度。而西義經循陸追



之。東軍阻風後發者悉來屬軍益振。時三月廿三日也。

是の夜、西軍は、屋島の故趾に陣し、東軍は高松に陣す。東軍、皆倦臥す。獨り伊勢義盛、敵の來襲を虞れ、洵警して明に徹す。明日、義經、晨を侵し、復屋島に赴く。西兵善く戰ふ。撃つて之を破る。平氏走つて志度浦を保つ。義經、追撃して復之を破る。降將の言に因つて、平氏の將田口成能、其の子成直を遣はし、兵三千を以て伊豫を徇へしむと聞き、伊勢義盛に命じ、往いて説き、之を降さしむ。義經、其の兵を并はせ、成直をして書を作り、成能を招かしむ。成能遂に款を送る。平氏の舟、志度を逃れて西す。義經、陸に循ひて之を追ふ。東軍、風に阻てられ後れて發せし者、悉く來り屬し、軍益々振ふ。時に三月廿三日なり。

この夜、平氏の軍は屋島の城の燒跡に陣を取り、源氏の軍は高松に陣取つた。源氏の軍は皆疲れ切つて横になつた。ただ伊勢義盛だけは、萬一敵が夜來り襲ふことがあつては大變と、夜明け方まで、陣中を見廻り警戒した。翌日義經は朝早くから再び屋島へ出掛けて行つた。平氏の軍は中々善戰した。しかし結局義經は之を撃ち破つた。平氏は逃げて志度浦を保つた。義經は之を追ひ撃つて、また打ち破つた。降參した大將の言葉で、平氏の大將田口成能が、その子の成直を派遣し、兵三千人を率ゐて伊豫を定めんとしてゐると聞いたので、伊勢義盛に命じて成直の處へ行つて説いて降參させた。義經はその兵三千人を味方にし、且つ成直をして其の父の成能をも招かせることにした。終に成能は源氏の方へ好みを通ずることとなつた。平氏の舟は志度浦から逃げて西の方へ往つた。義經は陸を傳つてその舟を追つかけた。渡部で逆風に妨げられ、それが爲に遅れて出發した連中が、皆後から來り附いて、源氏は益々振つた。その時は三月二十三日であつた。

故趾(源氏の爲めに燒か) ○志度浦(屋島の)

宗盛欲赴鎮西。範頼以三萬騎軍豐後。平氏不能入還泊壇浦。兵艦凡五百艘。熊野、河野、通信、皆來附義經。明日、義經以兵艦七百艘、大戰海上。西兵殊死戰。我兵少卻。義經厲衆進。和田義盛挺進而射。箭軼二百步。及平知盛舟。知盛使新居親清答射。箭汰義盛、胃傷。其後騎我軍羞之。義經命安田義遠還射。義遠按其箭曰「幹短且弱。請以我箭。」乃注十四拳。箭洞親清胸。而過海三十步。義遠義定、弟也。義盛慚憤、迫敵亂射。殺傷甚多。

宗盛鎮西に赴かんと欲す。範頼三萬騎を以て豊後に軍す。平氏入る能はず、還つて壇浦に泊す。兵艦凡そ五百艘。熊野、河野、通信、皆來つて義經に附く。明日、義經、兵艦七百艘を以て、大に海上に戰ふ。西兵殊死して戰ふ。我が兵少しく卻く。義經、衆を厲まして進む。和田義盛挺進して射る。箭二百歩を軼ぎ、平知盛の舟に及ぶ。知盛、新居親清をして答射せしむ。箭、義盛の胃を汰して、其の後騎を傷つく。我が軍之を羞づ。義經、安田義遠に命じて還射せしむ。義遠其の箭を按じて曰く「幹短く且つ弱し。請ふ、我が箭を以てせん」と。乃ち十四拳の箭を注し、親清の胸を洞して、海を過ぐるること三十歩。義遠は義定の弟なり。義盛慚憤し、敵に迫つて亂射す。殺傷甚だ多し。



**通釋** 宗盛は、九州へ往かうと思つた。所が範頼が三萬騎を率ゐて、豊後に頑張つて居た。それで九州へ入ることが出来ぬため、引き還へして壇浦に碇泊してゐた。その兵船は、凡そ五百艘ばかりあつた。熊野湛増、河野通信などは、皆やつて来て義經の方に屬いた。翌日、義經は、兵艦七百艘を率ゐて大に海上で戦つた。平氏の軍は、死物狂ひで戦つた。我が兵はその爲め少しくひるんだ。義經は、衆を激勵して進んだ。和田義盛はひとり抜けがけして進出し敵を射つた。その矢は、二百間以上飛んで、平知盛の舟まで届いた。知盛は、新居親清をして返へし矢を射させた。その矢は、義盛の胃を擦つてその後に居た騎兵を傷けた。我が軍は之を羞ぢた。そこで義經は安田義遠をして、其の矢を取つて射還へさせた。義遠はその矢を調べて見て曰ふに「これは、矢竹が短くて、その上に弱い。自分の矢にしよう」と。そこで十四拳もある矢をつがへ、射つて、親清の胸を貫ぬき、なほ三十間も先き、海の上に飛んで落ちた。義遠は義定の弟である。義盛は、義遠に功名を取られたので慚ぢ憤り、敵に近づいて滅茶々に射ちまくつた。殺したりの傷つけたりしたものが随分多かつた。

義經以成能言、知宗盛等所在、麾軍萃之、令成能爲内應。西軍大敗。教經怒、入我船、薄義經。義經躍入別舟。教經不能及。乃赴海死。知盛以下六人、前後皆死。二位尼懷養和帝投海。平太后繼投。我兵搭得之。義經使徇曰、赴海者、貴人也。我兵勿得辱。於是奉太后以下于其船。遂生擒宗盛、慶平氏軍。海水爲之赤。四月、東軍振旅、以浮獲旋徇之。京師還納鏡璽。範頼留鎮西海。六閱月、乃還。

獲旋徇之。京師還納鏡璽。範頼留鎮西海。六閱月、乃還。

**訓讀** 義經、成能の言を以て、宗盛等の在る所を知り、軍を麾いて之に萃り、成能をして内應を爲さしむ。西軍大に敗る。教經怒りて我が船に入り、義經に薄る。義經躍つて別舟に入る。教經及ぶ能はず。乃ち海に赴いて死す。知盛以下六人、前後皆死す。二位の尼、養和帝を懷いて海に投ず。平太后、繼いで投ず。我が兵搭して之を得たり。義經徇へしめて曰く、「海に赴く者は、貴人なり。我が兵辱かしむるを得る勿れ」と。是に於て、太后以下を其の船に奉じ、遂に宗盛を生擒し、平氏の軍を擧にす。海水之が爲めに赤し。四月、東軍振旅し、俘獲を以て旋り、之を京師に徇へ、鏡璽を還納す。範頼留つて西海を鎮すること六閱月、乃ち還る。

**通釋** 義經は田口成能の言葉で、宗盛等の居るところが分つてゐたので、軍を指麾して、それに集中し戦ひの最中に成能に寝返りを打たせることにしたのである。それで、平氏の軍は、大敗北をした。教經は、怒つて、我が船に跳り込んで、義經に迫つて来た。義經は、身を躍らせて、別の舟へ飛び乗つた。教經は追つつけなかつた。そこで海に飛び込んで死んだ。知盛以下六人は、相前後して皆死んだ。二位尼は、安徳天皇をお抱き申して入水した。平太后(建禮門院)もつづいて飛び込まれた。我が兵は熊手を引かけて、之を引き揚げた。義經は觸れ廻らせて曰ふに「海に飛び込むものは皆身分の高い人である。我が兵は無禮をしてはならぬぞ」と。そこで太后以下を自分の舟へ御つれ申し、遂に宗盛を生捕りにし、平氏の兵を皆殺にした。海の水は其の血で赤くなつた程である。四月、源氏の軍は凱旋し、捕虜、分捕品を携へて還り、これを京都に引き廻し、御鏡と御玉(三種の神器)とを朝廷に納めた。範頼は、六ヶ月も留まつて、西海道を鎮めて後に還つて来た。



語釋 六人(知盛、行盛、有盛、敦盛、經盛、資盛) ○養和帝(安德天皇)

賴朝遣使二名西禁兵士侵掠事無大小一奉朝旨行將士不因其奏而拜衛府官者不許東歸詔敍賴朝從二位五月檻致宗盛父子於鎌倉義經護送行至內海使父子徒行七匝養朝墳六月至鎌倉於是賴朝大會諸將士自坐簾內而延宗盛於前舍使比企能員言之曰賴朝非敢復私仇乃成王命爾今日之臨何幸甚也宗盛懾伏請宥死不許諷使自殺不解乃復令護送西還更宗盛名末國貶爲讚岐權守斬之于篠原傳首京師梟于右獄斬平重衡于南都處大納言平時忠於流八月詔使使就義朝墓贈內大臣正二位是月賴朝奏請以同姓五人補東國諸守特詔任義經伊豫守兼院厩別當宿衛京師

訓讀 賴朝、使二名を遣はして西せしめ、兵士の侵掠を禁じ、事、大小と無く、一に朝旨を奉じて行はしむ。將士、其の奏に因らずして衛府の官に拜する者は、東歸を許さず。詔して賴朝を從二位に敍す。五月、宗盛父子を鎌倉に檻致す。義經護送し、行いて内海に至り、父子をして徒行して、義朝の墳を七匝せしむ。六月、鎌倉に至る。是に於て、賴朝大に諸將士を會し、自ら簾内に座して、宗盛を前舍に延き、比企能員をして之に言はし

めて曰く、「賴朝、敢て私仇を復するに非ず。乃ち王命を成すのみ。今日の臨、何ぞ幸の甚だしきと。宗盛懾伏し、死を宥さんことを請ふ。許さず。諷して自殺せしむ。解せず。乃ち復護送して西還せしむ。宗盛を更めて末國と名づけ、貶して讚岐權守と爲し、之を篠原に斬り、首を京師に傳へて、右獄に梟す。平重衡を南都に斬り、大納言平時忠を流に處す。八月、詔して、使をして義朝の墓に就き、内大臣正二位を贈らしむ是の月、賴朝奏請して、同姓五人を以て、東國の諸守に補す。特に詔して、義經を伊豫守に任じ、院厩別當を兼ね、京師に宿衛せしむ。

通釋 賴朝は、使者二名を派遣して、京都に行かせ、戦勝の兵士に、掠奪を禁じ、何でも事件があつたら大小となく、皆朝廷のお指圖によつて行はせるやうにした。そして、士にして、賴朝の奏上を待たずに、六衛府の官になるものがあつたら、その者は關東に還ることを許さないことにした。詔して、賴朝を從二位に叙せられた。五月、宗盛親子を牢興で鎌倉へ送り届けた。義經は之を護送し、尾張の内海に來た時、親子を牢興から引き出して、歩かせ、義朝の墓を七遍廻らせた。六月、鎌倉へ着いた。そこで賴朝、大に諸將士を集め、自分は簾の内に入り、宗盛を庭を隔て、前の座敷に引き入れ、比企能員をして、言はせて曰ふには「私は、決して私個人の仇をかへすのではありません。天子の御命令を成したに過ぎないのです。今日御出で下さつたことは、ほんとは喜ばしく存する」と。宗盛は恐れて、ひれ伏し、命だけは、お助け下さいと頼んだ。許されなかつた。それとなく申し含めて自殺させようとした。併し宗盛にはそれが分らなかつた。そこで、又護送して、西へ歸らせた。宗盛の名をかへて末國といひ、内大臣の官から貶して、讚岐權守となし、近江の篠原で斬り殺し、その首を京都



へ持つて行つて右獄の門前に曝した。又平重衡は、奈良で斬り殺し、大納言平時忠は流し者にした。八月、詔して、使をやり義朝の墓前で内大臣正二位を贈らせた。この月、頼朝お願ひ申上げて同姓の源氏五人の者を關東諸國の國守に任じて貰つた。特に詔して義經を伊豫守に任じ、院の厩の別當を兼ね、京都に戻つて守護させることになされた。

語釋 使二名(實平) ○篠原(近) ○右獄(京都に左右兩獄があつた) ○時忠(能登へ) ○五人(山名義範を伊豆守、大内惟義を相模守、足利義兼を上總介、加賀美義遠を信濃守に、安田義資を越後守に補した。)

初頼朝擇西征大將、欲試諸弟之材、陰以火烙盟器、而使諸弟更侍執焉。執輒驚釋、獨義經終不釋、神色自若。頼朝是以知其堪事、而心陰畏之。梶原景時有寵、監義經軍。義經不與諮事。景時怒、屬範頼。畠山重忠、初隸範頼、憎景時、負寵凌人、去屬義經。景時益怒、寢譖之於頼朝。頼朝性忌克、平廣常、源忠頼、皆以驕傲見誅殺。聞義經亦負功、自專也、稍惡之。景時又爭逆櫓議、相啣益甚。壇浦之役、請爲先鋒。義經不聽、而自先。景時諍罵不已。義經怒、欲誅殺之。景時撫刀曰、我知有鎌倉公而已。諸將居間、事乃解。景時歸鎌倉、百方讒之。

訓讀 初め頼朝、西征の大將を擇ぶるとき、諸弟の材を試みんと欲し、陰に火を以て盟器を烙き、而して諸弟をして更々侍執せしむ。執れば輒ち驚き釋つ。獨り義經のみは、盟を終ふるまで釋てず、神色自若たり。頼朝、是を以て其の事に堪ふるを知る。而れども心陰に之を畏る。梶原景時、寵有り。義經の軍を監す。義經、與に事を諮らず。景時怒り、範頼に屬す。畠山重忠、初め範頼に隸す。景時、寵を負み人を凌ぐを憎み、去つて義經に屬す。景時益々怒り、寢く之を頼朝に譖す。頼朝、性忌克、平廣常、源忠頼、皆驕傲を以て誅殺せらる。義經も亦功を負み自ら專らにすに聞き、稍く之を惡む。景時、又逆櫓の議を争ひ、相啣むこと益々甚だし。壇浦の役に先鋒と爲らんと請ふ。義經聽さずして自ら先だつ。景時諍罵して已まず。義經怒り、之を誅殺せんと欲す。景時、刀を撫して曰く、「我れ鎌倉公有るを知るのみ」と。諸將、間に居り、事乃ち解く。景時、鎌倉に歸りて、百方之を讒す。

通釋 はじめ頼朝が、平氏追討の大將を選擇するとき、弟共の才力を試めさうと思ひ、内々火で以て盟をあぶり焼き、弟等に交るく持つて側に立たせた。皆熱いものだから手に執ると吃驚して手から離した。ただ、義經だけは、頼朝が手を洗つて終ふまで、我慢して手から離さず、又容子も平氣であつた。頼朝は、これで以て、義經はどんな事にも堪へ得る男だと知つた。そして、心の内でひそかに彼を畏れた。梶原景時は、頼朝に寵せられてゐた。景時は義經軍のお目付となつてゐた。義經は景時と事を相談しなかつた。そこで景時は怒つて、範頼の方に屬した。畠山重忠は、はじめ範頼に屬してゐた。景時が来て、頼朝の寵を恃みにし人を押し凌ぐことばかりやるのを憎んで、範頼の處を去つて義經に屬した。景時は、愈々怒り、それから段々義經を惡しざまに頼朝



に讒言した。頼朝は、生れつき人を忌み嫌ひ、且つ自分の思ふ通りにやる男であつて、平廣常、源忠頼などは皆功を誇り傲慢であつたといふので殺された程である。義経も自分の手柄を鼻にかけ、我儘な振舞のあることを聞いて、段々これを悪みだした。景時、又義経と逆槽のことで争ひ、互に心よからず、根に持つこと益々甚しかつた。壇浦の戦争でも景時は先鋒となりたいと頼んだ。義経は許さず、自身で先鋒となつた。景時はその時悪口して止まなかつた。義経は、怒つて、之を殺さうと思つた。景時は刀に手をかけて曰ふに「自分は鎌倉殿(頼朝)のあるを知るばかりで、他の者は眼中にはない」と。諸將は、その間へ入つて仲裁したので、その事は、漸く収まつた。そんな譯で景時は鎌倉に還つてから手をかへ品をかへて、義経を讒言した。

語釋

凌人(人に無禮を加ふること) ○忌克(人を疑ひ忌むこと) ○諸將居間(三浦義澄、土肥實平等が仲へ入つた)

平時忠爲平氏疏屬。其從西奔竊贊謀畫。及其就擒、有簿書一篋。爲義經所收。時忠與其子謀奪還之以除禍本。乃以女妻義經。義經乃還其篋。頼朝聞而惡之。頼朝方舉一男。而親信其外舅北條時政。諸骨肉皆被猜防。

訓讀

平時忠は平氏の疏屬たり。其の西奔に從ふや、竊に謀畫を贊く。其の擒に就くに及んで、簿書一篋有り。義經の收むる所となる。時忠、其の子と、之を奪ひ還し以て禍本を除かんと謀り、乃ち女を以て義經に妻はす。義經、乃ち其の篋を還す。頼朝聞いて之を惡む。頼朝、方に一男を擧ぐ。而して其の外舅北條時政を親信す。諸の骨肉は、皆猜防せらる。

平時忠は、平氏の遠い親類筋であつた。彼は平氏の西奔に從つた際、ひそかに參謀となり、謀を助けたのである。彼が生捕にされた時帳簿の入つた箱が一つあつた。それを義經の爲めに没收された。時忠は其の子と相談して、之を取り戻して、後日禍の本になるものを除かうと思ひ、自分の娘を義經に嫁した。そこで義經は、其の箱を舅に還した。頼朝は、その話を聞いて義経を惡んだ。頼朝は、その時、はじめて男の子を設けた。而してその妻の父、北條時政を親み信用してゐた。多くの兄弟は、皆疑はれ警戒せられた。

語釋

其子(中將時實) ○一男(家) ○猜防(人を疑ひ、警戒すること)

義經東獻。俘鎌倉。至腰越驛。頼朝弗許入。使時政出受俘。義經乃寄書於大江廣元。自訴曰「義經代征討之勞。上夷國賊。下雪家恥。心竊期褒賞。不圖忽蒙讒言。曠日於此。莫以自明。徒涕泣爾。將永違恩顔。骨肉誼絶。自非先人之再生。誰爲分疏焉。義經幼孤。從母逃匿。流寓諸國。爲氓隸所役。未嘗一日安居焉。然而幸慶忽會。至忝重任。或策馬峻坂。或凌風大海。不敢顧軀命。欲以慰冤魂。伸宿憤。豈有他哉。既辱五位。尉榮顯何加。而忽遭此厄。憂深悲切。敢上誓書。要之百神。而威猶不霽也。不得仰公之救護。伏願乘間進說。庶幾亮其無他。卒被恩宥。得享終身之安。不報。義經快



快而西。

**訓讀** 義經、東、俘を鎌倉に獻せんとして、腰越驛に至る。頼朝、入るを許さず。時政をして出でて俘を受けしむ。義經、乃ち書を大江廣元に寄せ、自ら訴へて曰く、「義經、征討の勞に代り、上は國賊を夷げ、下は家の恥を雪ぐ。心竊に褒賞を期す。圖らざりき、忽ち讒言を蒙り、日を此に曠しうせんとは以て自ら明にする莫く。徒に涕泣するのみ。將に永く恩顔に違ひ、骨肉の誼絶えんとす。先人の再生に非ざるよりは、誰か爲めに分疏せん。義經、幼にして孤、母に従つて逃匿し、諸國に流寓し、氓隸の役する所となり、未だ嘗て一日も安居せず。然り而して幸慶忽ち會し、重任を忝うするに至る。或は馬に峻坂に策うち、或は風を大海に凌ぎ、敢て軀命を顧みず。以て冤魂を慰め、宿憤を伸べんと欲す。豈に他有らんや。既に五位尉を辱うす。榮顯何ぞ加へん。而して忽ち此の厄に遭ふ。憂深く、悲切なり。敢て誓書を上りて、之を百神に要す。而れども威猶ほ霽れず。公の救護を仰がざるを得ず。伏して願ふ、間に乘じて進み説かば、庶幾はくは、其の他無きを亮として、卒に恩宥を被り、終身の安きを享くることを得ん」と。報ぜず。義經、快快として西す。

**通釋** 義經は、東の方、俘虜を鎌倉に獻じようとして、腰越驛まで来た。頼朝は、鎌倉に入ることを許さなかつた。時政をして、そこへ行つて俘虜を受取らせた。そこで義經は、書面を大江廣元に寄せ、自ら心の内を訴へて曰ふには、「私は、兄上御自身が征伐の御苦勞をなされるのに代り、上は國賊平氏を平げ、下は源家の耻辱を雪ぎました。私は心の内で御褒美が戴けるとあてにしてあました。所が意外にも忽ち讒言せられて、この腰越で止められ、空しく日を送らうとは、全く思ひがけないことです。私は自分の罪のないことを明かにすること

も出来ないで、ただ泣いてゐる計りで御座います。永久にこれでは御目にかかれないうで、兄弟の誼は絶えて終ふでせう。亡くなられた父上がもう一度生き返つてお出でにならぬからは、誰が私の爲めに言ひ譯をして呉れませうぞ。私は幼いときに孤兒となつて、母に従つて逃げ匿れ、諸國をそれからそれへさまよひ歩き、賤しき下僕のやうなものにまでこき使はれたりしまして、これまで一日として安穩に暮したことはありません。けれども源家再興のよい運命に廻り合はせ、平家追討といふ重大な仕事を仰せつかるまでに至りました。私はその爲めに、或る時は嶮しい坂(鴨越)を馬に鞭を當てて下り、或る時は大海(屋島)で風を押し切つて戦ひに出かけ、決して自分の軀や生命を顧みたことはありません。そのやうにして父上の無實な罪で殺され給ひし靈魂を慰め奉り、源家の古い怨を晴らさうと思つたのです。決して、他に考へるあらう筈は御座いません。かくて、功勞により従五位左衛門尉の官位を頂戴致しました。出世の上もないことで御座います。而るに忽ちこんな讒言の災難に遭ひました。私は非常に心配で又非常に悲しんで居ります。そこで、誓書を上つて、多くの神々に誓ひを立てて他意のないことを證しました。それでもまだ、兄上の怒が霽れません。貴殿の御取りなしを是非共仰がない譯に行かなくなつたのであります。伏してお願ひしますが、折を見て兄上に説きつけ、何卒、私に異心のないことを明かにし、結局御赦を蒙つて一生樂に暮らせるやうにして戴き度いものであります」と。此の書面に對し、廣元は、返事をしなかつた。義經は、不愉快な心持で京都に還つて行つた。

**語釋** 腰越(相模、鎌倉の入口) ○違(恩顔)の出來ないこと ○氓隸(田父) ○幸慶(源氏再興) ○要(誓ふ) ○亮(まこと)

頼朝聞其怨望也怒奪其邑。時行家匿京師。義經濟相往來。頼朝遣梶原景季命義



經討行家且調之。義經稱病。問日乃見景季。景季反言其病羸狀。景時曰「兩日間廢寢食以裝病焉爾。」賴朝乃召諸將言曰「誰爲我擊九郎者。」九郎亦不負我知耳。而先我昇殿不告我爲五位尉車服華侈。翱翔院中。饒有君寵。何不自孫壇浦之役與太。后同舟。又娶平虜女。橫恣如此。不得不誅鋤。誰爲我擊九郎者。」衆莫敢答。賴朝不懌。乃命景時。景時辭曰「判官素惡於臣。臣往判官必備之。不若遣其意外者襲之。」乃命昌俊。

**訓讀** 賴朝、其の怨望するを聞きや、怒つて其の邑を奪ふ。時に行家、京師に匿る。義經、潛に相往來す。賴朝、梶原景季を遣はして、義經に行家を討つを命じ、且之を調はしむ。義經、病と稱し、日を間て乃ち景季を見る。景季反つて、其の病羸の狀を言ふ。景時曰く、「兩日の間、寢食を廢し以て、病を裝ふのみ」と。賴朝、乃ち諸將を召し、言つて曰く、「誰か我が爲めに九郎を撃つ者ぞ。九郎も亦我が知に負かざるのみ。而して我先だつて昇殿し、我に告げずして五位尉と爲り、車服華侈、院中に翱翔す。饒ひ君寵有るも、何ぞ自孫せざる。壇浦の役に、太后と舟を同じし、又平虜の女を娶る。横恣此くの如し。誅鋤せざるを得ず。誰か我が爲めに九郎を撃つ者ぞ」と。衆、敢て答ふる莫し。賴朝懌はず。乃ち景時に命ず。景時辭して曰く、「判官、素より臣に惡し。臣往かば、判官必ず之に備へん。其の意外の者を遣はして之を襲ふに若かず」と。乃ち昌俊に命ず。

**通釋** 賴朝は、義經が怨んでゐるといふことを聞いて、怒つて義經の領地を取り上げて終つた。その時、行家は、京都に匿れて居た。義經は、内々交際してゐた。賴朝は、梶原景季を京都へ遣はして、義經に行家を討つと命じさせ、且つ義經の様子を伺はせた。義經は病氣だといつて、一日間を置いて、景季に會つた。景季は鎌倉へ還つて、義經が病氣で弱つてゐる様子を陳べた。景時が曰ふのに、「二日の間、眠らず、食はずで病氣に見せかけたのである」と。そこで、賴朝は、諸將を呼び寄せ、言つていふのに、「誰か私の爲めに九郎義經を撃つて呉れるものはないか。九郎も、油斷のならぬ男だと思つてゐたが、矢張りその通りであつた。その上に、我先だつて、昇殿をなし、又我に告げないで從五位左衛門尉となり、その乗物や衣裳は贅澤千萬なもので、法皇の御殿を得意になつてかけ廻つて居る。よし、君の寵愛があるにした所で何故少つとは謙遜しないか。壇浦の戦争の時に建禮門院と同じ舟に乗り、又平家の捕虜の娘を嫁に貰つたりした。以上申したやうな我儘をしてゐるのである。こんな男は之を殺して根を絶やさなければならぬ。誰か私の爲めに九郎を撃つて呉れるものはないか」と。多勢の者で我こそと申出るのはなかつた。賴朝は不機嫌であつた。そこで、景時にお前行けと命じた。景時は辭退して曰ふのに、「判官義經はもとく私と仲が惡いのであります。私が往けば、判官は屹度用心するに決つてゐます。それよりは思ひかけぬやうな者を遣つて油斷してゐる所を不意に襲つた方が好いと思ひます」と。そこで昌俊に命じた。

**語釋** 其邑(二十四) 個所。○我知(豫て油斷ならぬ男と) 知つてゐたこと。○同舟(姦淫を) 疑ふ。○昌俊(土佐) 坊。

昌俊者、南都僧也。因事鎌倉。以勇桀見親近。於是授計而西。至京師。去義經堀川。



第四町而舍。義經尤其不亟來謁。召而詰之。對曰「臣此行詣七大寺。欲畢事然後謁耳。義經笑曰「否、否、得非以二位旨圖我乎。吾今欲囚汝。顧恐人謂吾爲怯也。且汝兄氏使者、吾不可先發。昌俊獻誓書歸舍。義經所幸舞姬曰靜。闕昌俊謂義經曰「彼將去、四顧第中而注目於厩。恐有異志。義經不爲意。及昏、又告曰「大達塵起、人行踉蹌。不可不虞也。使二童往調昌俊舍。久之不還。又使婢婢走還曰「童駢死于門、門內鞍馬可五十匹、士擐甲將騎焉。」

**訓讀** 昌俊は南都の僧なり。事に因つて鎌倉に在り。勇策を以て親近せらる。是に於て、計を授けて西せしむ。京師に至り、義經の堀川の第を去ること四町にして舍す。義經、其の亟に來り謁せざるを尤め、召して之を詰る。對へて曰く、「臣、此の行は七大寺に詣づ。事を畢て然る後に謁せんと欲するのみ」と。義經笑つて曰く、「否、否。二位の旨を以て、我を圖るに非ざるを得んや。吾れ今汝を囚へんと欲す。顧つて恐る、人、吾を謂つて怯と爲さんことを。且つ汝は兄氏の使者、吾先づ發すべからず」と。昌俊、誓書を獻じて舍に歸る。義經幸する所の舞姬を靜と曰ふ。昌俊を闕ひ、義經に謂つて曰く、「彼れ將に去らんとし、第中を四顧して、目を厩に注げり。恐らくは異志あらん」と。義經、意となさず、昏に及び、又告げて曰く、「大達、塵起り、人行踉蹌たり。虞らざる可からざるなり」と。二童をして往いて昌俊の舍を調はしむ。之を久しうして還らず。又婢を使はす。婢走り

還つて曰く、「童、門に駢死し、門内に鞍馬五十四可り、士、甲を擐し將に騎せんとす」と。  
**通釋** 昌俊は、奈良の僧であつた。或る事の爲めに鎌倉に來て居た。勇氣があつて力傑れた男で頼朝に可愛がられて居た。そこで、計を教へて、京都へ行かせた。昌俊は京都へ行き、義經の堀川の邸を離るる四町ばかりの處へ宿を取つた。義經は何故早く會ひに來ぬかと咎め、呼び付けて詰問した。昌俊は對へて曰ふのに「私の今度の旅行は、奈良の七大寺へ參詣することでありませぬ。それを済ませてからお目にかからうと思つて居つたものですから」と。義經は笑つて曰ふのに、「いや、さうではない。其の方は、二位(頼朝)の命令を受けて、我を殺さうと企ててゐるのであらう。予は今、其の方を獄舎に繋いで終ふとおもふ。併しそんなことをすれば人が予を臆病者だといふだらうと思つて、それが嫌やだ。それに其の方は兄上のお使者であるから、俺の方から手を出してはならぬ」と。昌俊は、決して左様なことはないと言ひ、誓書を差出して宿へ歸つた。義經の寵愛して居る白拍子に靜といふ女があつた。この時、昌俊の様子を覗ひ見て、義經に向つて曰ふのに、「彼は、ここを立ち去らうとした時、屋敷の中をあちこちと見まはし、厩の方がちつと目を注いで居りました。謀叛の心があるらしいです」と。義經は意にも留めないであつた。暮方になつて靜が又告げて曰ふのに、「大通に塵埃が立つて、路行く人が騒がしい様子であります。ただ事ではありませぬから御用心なされねばなりません」と。二人の童子をやつて昌俊の宿へ行つて様子を窺はせた。いくら經つても還つて來ない。そこで、又下女を見にやつた。その下女は、走り還つて曰ふに「童子等は昌俊の宿の門の處に於て殺されてゐました。門内には鞍をつけた馬が五十四ばかりあり、武士は鎧を着け、今にも馬に乗らうとしてゐました」と。



語釋 七大寺(奈良の東大寺、興福寺、元興寺、○大達(往來の) ○踞躩(人立ちがして)

夜既三鼓第外大譟直于第者僅七人靜急取甲被義經義經令開門騎而突出呼曰在今日誰敢圖義經者昌俊與兒玉黨六十餘騎散而亂射義經從士聞變四至行家亦來救昌俊終敗走義經徑詣法皇宮箭蝟集於胃而在箠者三奏變而還昌俊逃鞍馬山山僧與義經有故索獲獻之義經誚其背誓對曰誓者昌俊襲者二位義經怒毆其面曰我面即二位面毆我面是毆二位面也義經壯之欲使活還昌俊請速死乃斬之

訓讀 夜既に三鼓なり。第外大に譟し。第に直する者、僅に七人なり。靜急に甲を取りて義經に被らす。義經、門を開かしめ、騎して突出し、呼んで曰く、「今日に在つて、誰か敢て義經を圍る者ぞ」と。昌俊、兒玉の黨六十餘騎と、散じて亂射す。義經の從士、變を聞き四もより至る。行家も亦來り救ふ。昌俊終に敗走す。義經徑に法皇の宮に詣る。箭、胃に蝟集す。而して箠に在る者三。變を奏して還る。昌俊、鞍馬山に逃る。山僧、義經と故あり。索め獲て之を獻す。義經、其の誓に背くを誚む。對へて曰く「誓ふ者は昌俊、襲ふ者は二位なり」と。義經怒り、其の面を毆つ。曰く「我が面は即ち二位の面。我が面を毆つは、是れ二位の面を毆つなり」と。義經之を壯とし、活して還らしめんと欲す。昌俊、速に死せんことを請ふ。乃ち之を斬る。

通釋 夜もすでに子の刻になつた。義經の屋敷の外が大層騒がしくなつた。屋敷に宿直してゐた者は、たつた七人であつた。靜は甲斐々々しく鎧を取つて、義經に着せた。義經は門を開かせ馬に乗つて、突き出で、大聲で呼ばはつて曰ふのに「今日に在つて、敢て義經を圍らうとする者は何奴だ」と。昌俊は兒玉の黨六十騎と、散り散りになつて矢鱈に射つた。義經の供の士が騒動を聞きつけて、四方から集つて來た。行家も亦援けに來た。昌俊はとうとう敗れて逃げた。義經は直ぐ法皇の御所へ行つた。矢は蝟の毛のやうに胃に中つてゐた。箠には三本の矢しか残つて居なかつた。義經は一と先づ變事を奏上して歸つて來た。昌俊は鞍馬山に逃げ込んだ。山の僧は義經と縁故があつた。さがし出して之を義經に差し出した。義經は、昌俊が誓書に背いたことを責めた。昌俊は對へて曰ふのに「誓をしたのは私ですが、あなたを襲つたのは私ではなくて二位殿であります」と。義經は怒つて、其の顔を毆りつけた。昌俊は曰ふのに「私は二位殿のお使であるから、私の顔は二位殿の顔といふことになる。私の顔をたたたくのは二位殿の顔をたたたくも同様である」と。義經は、その氣象を壯なりとして活かして還へしてやらうと思つた。昌俊は早く殺して呉れと頼んだ。そこで之を斬つて終つた。

語釋 三鼓(今の午後十二時)

義經行家遂迫請討頼朝宣旨公卿皆憚義經欲權許之獨藤原兼實不肯曰頼朝罪未至當討且命弟討兄如之何法皇遂許之義經僕安達清經常爲頼朝間義經於是走報之鎌倉頼朝方落長勝壽院聞報曰可也畢禮而歸曰彼殺我使可



伐也。乃戒諸將束裝曰。旦日將發。小山朝政以下五十餘人請即夜發。乃以爲先鋒。命之曰。及我未至。誅彼二兇。後五日。親發鎌倉。檄諸道會軍於途。義經聞之。詣法皇。請勅關西兵援己。法皇許之。補義經九國地頭。行家四國地頭。十一月三日。義經與行家及女婿源有綱等。俱奔竄西海。不知所往。伊勢義盛與義經訣。歸伊勢。襲守護首藤經俊。敗。匿鈴鹿山。經俊攻殺之。

**訓讀** 義經、行家遂に迫つて頼朝を討つの宣旨を請ふ。公卿皆義經を憚り、權に之を許さんと欲す。獨り藤原兼實肯んぜずして曰く、「頼朝の罪未だ當に討つべきに至らず。且つ弟に命じて兄を討たしむるは、之を如何」と。法皇、遂に之を許す。義經の僕安達清經、常に頼朝の爲めに義經を問す。是に於て、走つて之を鎌倉に報ず。頼朝、方に長勝壽院を落す。報を聞いて曰く、「可なり」と。禮を畢りて歸り、曰く、「彼れ我が使を殺す。以て討つ可きなり」と。乃ち諸將を戒めて束装せしめ、曰く、「旦日、將に發せんとす」と。小山朝政以下五十餘人、即夜、發せんと請ふ。乃ち以て先鋒と爲す。之に命じて曰く、「我が未だ至らざるに及んで、彼の二兇を誅せよ」と。後五日、親ら鎌倉を發す。諸道に檄し、軍に途に會せしむ。義經、之を聞き、法皇に詣り、關西の兵に勅して己を援けしめんことを請ふ。法皇、之を許し、義經を九國の地頭に補す。十一月三日、義經、行家及び女婿源有綱等と、俱に西海に奔竄し、往く所を知らず。伊勢義盛、義經と訣れ、伊勢に歸り、守護首藤經俊を襲ひて敗れ、鈴鹿山に匿る。經俊之を攻殺す。

**通釋** 義經と行家とは遂に法皇に迫つて、頼朝を討つ詔を戴き度いと願ひ出た。公卿衆は皆義經を恐れて一時之を許さうと思つてゐた。ただ藤原兼實だけは之を承知しないで曰ふには「頼朝の罪はまだ征伐するまでに行つてゐない。それに弟に命じて兄を討たせるといふことは不義な話で如何なもので御座らう」と。法皇は遂に之を許された。義經の下僕の安達清經はいつも頼朝の爲めに義經の様子を伺つて間諜となつて居た。そこで走つて之を鎌倉に報告した。頼朝は丁度、この時、長勝壽院の落成の式を擧げてゐた。この報告を聞いて「宜しい」といつた。そして落成式を滞りなく済ませて歸つて曰ふには「彼は我が使の昌俊を殺した。それだけの理由で征伐して宜いのだ」と。そこで、諸將に命じて身支度をさせて曰ふに「明朝出發しようと思ふ」と。小山朝政以下五十餘人の者は今夜直ぐ出發し度いと願ひ出た。そこで小山等を先鋒とした。之に命じて曰ふには「乃公が京都へ着かない中に、かの二人の悪者(義經、行家)を誅して終へ」と。其の後五日たつて頼朝は鎌倉を出發した。國國へ觸れを出して途中で本隊に合するやうにした。義經はそのことを聞いて、法皇の御所へ行き、關西の兵士に詔を下されて、自分を援けしめるやうにして戴き度いと願ひ出た。法皇は之を許され義經を九州の地頭に任せられ、行家を四國の地頭に補せられた。十一月三日、義經は、行家及び其の婿源有綱等と一緒に西海道の方へ逃げかくれ行衛不明となつた。伊勢義盛は義經と別れ、自分の故郷の伊勢に歸り、其處の守護首藤經俊を襲つて敗れ、鈴鹿山に匿れてゐた。經俊は之を攻めて殺した

語釋 鈴鹿山(伊勢)



頼朝至黃瀬河、聞義經既奔、乃還鎌倉。以朝廷宣討已訴冤不已。法皇乃急宣諸州、索義經未獲也。平氏餘黨又竄匿所在。天下騷然。頼朝患之。大江廣元建策曰：「方今大亂初平、關東倚安帥府、而姦豪伏匿於諸道。隨起隨討、輒發東兵、則勞費不量、民苦誅求。爲今計者、莫若國司置守護、莊園置地頭、所在追捕。則天下可坐而定也。」頼朝大悅。遣北條時政、護衛京師、因奏請之。且請課畿内及西南四道、每段五升、以充兵食。朝議從之。頼朝薦家人有功勞者、分爲守護地頭、而身統之。世因稱頼朝曰「十六國總追捕使」。

**訓讀** 頼朝、黃瀬河に至り、義經、既に奔ると聞き、乃ち鎌倉に還る。朝廷宣して己を討つを以て、冤を訴へて已まず。法皇乃ち急に諸州に宣して、義經を索めしむ。未だ獲ず。平氏の餘黨、又所在に竄匿す。天下騷然たり。頼朝、之を患ふ。大江廣元、策を建てて曰く、「方今、大亂初めて平き、關東は帥府に倚安す。而れども姦豪諸道に伏匿す。隨つて起り隨つて討ち、輒ち東兵を發すれば、則ち勞費量られず。民、誅求に苦しむ。今の計を爲す者は、國司に守護を置き、莊園に地頭を置き、所在追捕するに若くはなし。則ち天下坐して定むべきなり」と。頼朝大に悦び、北條時政を遣はして、京師を守護せしめ、因つて之を奏請し、且つ畿内及び西南の四道に課し、

段毎に五升、以て兵食に充てんと請ふ。朝議之に従ふ。頼朝、家人の功勞ある者を薦め、分ちて守護、地頭と爲し、而して身ら之を統ぶ。世、因つて頼朝を稱して、十六國の總追捕使と曰ふ。

**通釋** 頼朝は、黃瀬河まで来て、義經が西海へ走つたと聞いて、一と先づ鎌倉へ引き揚げた。朝廷では、義經に院宣を下して自分を討たれるといふので、頼朝の方から無實の罪だと訴へて止まない。そこで法皇は急に諸國へ詔を下されて義經を捜し索めさせられた。中々見つからなかつた。又平氏の殘黨も到る處にかくれてゐた。それがため天下はざわつた。頼朝は之を心配した。大江廣元は計略を立てて曰ふには「今日大亂がやつと平いで關東地方は幕府にたよつて安堵してゐるのであります。併し悪者が諸國に懸れてゐる。亂が起る毎に隨つて之を討つとなりますと、其の度に關東の兵士を繰り出し結局その勞力と入費とは量られない程要し、人民は人民で軍費の取り立てに苦しむこととなるのであります。今の場合最もよい仕方は國司(朝廷の直轄地)には守護を置き、莊園(個人の所有地)には地頭を置き到る處で悪者を追捕するやうにしたら宜いでせう。さうすれば天下は坐つて居て平定することが出来ます」と。頼朝はその説を非常に悦んで、北條時政を遣はし、京都を護衛させることにし、そこで守護地頭を置くことをお願ひ申し、且つ畿内及び西南の四道に割りあてて一段について五升づつ取り立てて兵糧に充てたいとお願ひした。朝廷では評議の結果それに従つた。頼朝は家來で功勞のあつたものを推薦し、夫々或る者は守護となし、或る者は地頭となし、自身で之を統御した。そこで世の人は頼朝をさして、十六國の總追捕使といつた。

**語釋** 帥府(鎌倉) ○西南四道(山陰、山陽、南海、西海)



頼朝素聞兼實賢。且德其爭院宣也。貽之書曰。頼朝當平賊之熾。孤身舉義。得至奏功。而不敢自專。今亂人乃挾命恃柄。敢規非分。頼朝特恐禍亂之端。復自是起。近日所奏請。非以營私。乃爲天下定亂焉耳。因奏請置議奏官十人。撰公卿充焉。按治公卿以下。預東討宣者。二年春。兼實遂爲攝政。

**訓讀** 頼朝素より兼實の賢を聞く。且つ其の院宣を争ひしを徳として、之に書を貽りて曰く「頼朝、平賊の熾なるに當り、孤身義を挙げ、功を奏するに至るを得たり。而して敢て自ら専らにせず。今亂人乃ち命を挾み、柄を恃み敢て非分を規る。頼朝特に禍亂の端、復是れより起るを恐る。近日奏請する所、以て私を營むに非ず。乃ち天下の爲めに亂を定むるのみ」と。因つて奏請して議奏官十人を置き、公卿を撰んで充つ。公卿以下、東討の宣に預かりし者を按治す。二年春、兼實遂に攝政と爲る。

**通釋** 頼朝は、平素から兼實の賢明なことを聞いてゐた。それに義經が自分を討つ院宣を請うたとき、兼實だけが議論して反對したのを徳とし、之に書面を送つて曰ふには「私は、平氏の勢が盛んであつた時に當り、獨りで義兵を挙げ、追討の功を成就することが出来たのであります。けれども決して氣儘な事はしませんでした。今義經、行家などの亂人が却つて君命を鼻にかけ權柄を恃みにし、敢て分に非ざることを規りました。私は天下が亂れる發端がここから起るのではないかと心配して居ります。此の頃朝廷に申上げてお願ひしましたところの守護地頭の件は自分の都合の爲めにしたのではないのであります。天下の爲めに亂を定めようとするばかりではありません」と。そこで奏請して議奏官を十人置き、公卿の中から選んでその官に充てた。そして公卿以下の朝官の中で義經が自分を討つ院宣を願つた際、それに賛成したものを調べて處分した。二年の春、兼實は遂に攝政となつた。

**語釋** 挾命恃柄(君命を笠にき、權柄を恃みにする。權) ○預東討宣者(平親宗、高階泰經等十餘人)

四月、頼朝又貽書議奏官曰。僕生武門長鄙野。不諳知朝章。偶有所奏。願諸公簡之。專執公平。以安天下。至如宣旨。或有不便民。亦當盡言焉。面從非忠也。時北條時定代時政。護京師。獲行家于和泉。有綱于大和。斬之。十二月、以天野遠景爲筑紫奉行。聞行家義經。黨與竄鬼界島。擊平之。先是、頼朝奏以比年軍興。民不任農。蠲其管内九國逋租。遂薄其正稅。而諸國準之。是歲、又發倉賑相模。窮民。三年春、遣中原親能大江廣元等。修閑院殿。時輦下多強盜。遣千葉常胤。下河邊行平。按之。寓書於藤原經房。稱鎮壓亂賊。莫若二人。二人至京師。盜賊悉平。四年六月、造六條殿。五年正月、叙正二位。三月、修大内。

**訓讀** 四月、頼朝、又書を議奏官に貽つて曰く「僕、武門に生れ、鄙野に長じ、朝章を諳知せず。偶々奏する



所あらば願はくば諸公之を簡び、専ら公平を執り、以て天下を安んぜよ。宣旨の如きに至つても、或は民に便ならざる有らば、亦當に言を盡すべし。面従は忠に非ざるなり」と。時に北條時定、時政に代つて京師を護る。行家を和泉に、有綱を大和に獲て、之を斬る。十二月、天野遠景を以て、筑紫の奉行と爲す。行家、義經の黨與、鬼界島に竄ると聞き、撃つて之を平ぐ。是より先き、頼朝奏するに、比年、軍興り、民、農に任へざるを以て、其の管内九國の逋租を蠲かんと。遂に其の正税をも薄くし、而して諸國も之に準ず。是の歳、又倉を發して相模の窮民を賑はす。三年春、中原親能、大江廣元等を遣はし、閑院殿を修む。時に輩下強盜多し。千葉常胤、下河邊行平を遣はし之を按ぜしむ。書を藤原經房に寓せて、亂賊を鎮壓するは、二人に若くは莫しと稱す。二人、京師に至る。盜賊、悉く平ぐ。四年六月、六條殿を造る。五年正月、正二位に叙せらる。三月、大内を修む。

**通釋** 四月、頼朝は書面を議奏官に送つて曰ふに「私は、武家に生れ、田舎で人となり、朝廷の規則制度などを熟知して居りませぬ。ひよつと申出る事がありました際には何卒あなた方が宜きやうにお選び下さつて、専ら公平な處置をお取なされ、天下を安らかにするやうにして下さい。法皇から下される宣旨でも、場合によつて、人民に不便なことがあつたら、これも亦十分意見を陳べて戴きたいと思ひます。何でもかでも遠慮して、君の目の前で逆はぬのは、本當の忠義ではありません」と。其の時、北條時定が、時政に代つて京都を護つた。行家を和泉で、有綱を大和で捕へ、之を斬つた。十二月、天野遠景をば筑紫奉行とした。行家、義經の一味が鬼界島にかくれて居ると聞いて、撃つて、之を平げた。これより先き、頼朝は奏するのに年々戦争が起つて、人民は農業に従事することが出来ないから、自分の管轄内の九ヶ國の未納の年貢を許したいと。遂にきまつた税まで安くし

たが、他の諸國も皆之にならつて税を減らした。この年、又倉を開いて、相模の貧民に施した。三年春中原親能、大江廣元等を京都へやり皇居の閑院殿を修復した。當時、京都には強盜が多かつた。千葉常胤、下河邊行平を遣はして、之を調べさせた。藤原經房に手紙を寄せて「亂賊をしづめるのはこの二人に限る」といつて頼んだ。二人は京都に着いた。かくて盜賊は悉く平いだ。四年六月、法皇の御所の六條殿を造つた。五年正月、頼朝は正二位に叙せられた。三月には御所を修復した。

**語釋** 筑紫奉行(九州の) ○管内九國(相模、武藏、伊豆、駿河、上) ○逋租(未納)

七月、奏請討陸奥藤原氏。以其舍義顯也。義顯即義經削籍改名。義經之出京師也。上舟于大物浦。遇颶。與行家相失。匿吉野。五日、山僧群聚捕之。佐藤忠信曰「臣兄既授命於屋島。臣今亦將代君死。乃伴稱義經。亂射。義經得間逃。至多武峯。又徙十津川。復還匿京師。忠信亦來匿。而發覺。與吏卒鬪。終自殺。義經乃與妻河越氏及辨慶等爲道士裝。由北陸道奔陸奥。」

**訓讀** 七月、奏請して陸奥の藤原氏を討つ。其の義顯を舍するを以てなり。義顯は、即ち義經にして、籍を削り名を改めしなり。義經の京師を出づるや、舟に大物浦に上る。颶に遇ひ、行家と相失ふ。吉野に匿ること五日、山僧群り聚り之を捕へんとす。佐藤忠信曰く、「臣の兄、既に命を屋島に授けたり。臣も今亦將に君に代つて



死せんとす」と。乃ち伴つて、義經と稱して亂射す。義經、間を得て逃れ、多武峰に至り、又十津川に徙り、復還つて、京師に匿る。忠信も亦來り匿る。而して發覺し、吏卒と闘ひ、終に自殺す。義經、乃ち妻河越氏、及び辨慶等と、道士の装を爲し、北陸道より陸奥に奔る。

**通釋** 七月、奏請して、陸奥の藤原泰衡を征伐した。それは、泰衡が義顯をとめ置いてゐるからである。義顯とは即ち義經であつて、これは頼朝が一族の戸籍から義經の名を削つて義顯と改めたのである。義經が京都から逃げ出すときには大物浦で舟に乗つた。大風に會つて難儀をし、行家とはぐれて終つた。吉野に匿れて居ること五日、山僧どもが寄つてたかつて彼を取り押へようとした。佐藤忠信が曰ふのに「私の兄(嗣信)は前に屋島で君の身代りになつて命を棄てました。私も兄と同様に今君に代つて死にませう」と。そこで自分は義經だと伴り名乗り、無暗に矢を射かけた。義經はその間に隙を得て、逃げ出し、多武峰に行き、又十津川にうつり再び還つて來て京都に匿れた。忠信も亦吉野から逃げて來て京都に匿れた。而し忠信の方は露顯して役人兵卒と戦ひ、遂に自殺した。そこで義經は妻の河越氏及び辨慶等と山伏の姿をして、北陸道から陸奥へ走つたのである。

**語釋** 大物浦(津) ○吉野(大) ○多武峰(大和、鎌足の) ○十津川(和) ○河越氏(重頼の女)

初、義經、姫靜、從匿吉野。義經諭之訣別、使僕齎資送歸京師。僕奪其資、棄靜。靜獨行風雪中、爲山僧獲。致於北條時政、送之鎌倉。詰義經所在。靜固陳不知。以其有姪、留之。夫人政子聞其善歌舞、欲一見。引病不往。頼朝夫妻詣鶴岡祠、召靜命舞。垂簾觀焉。靜固辭、強之再三。乃起上場。工藤祐經、搥鼓。畠山重忠、擊銅拍子。靜整衣而進、唱離別曲。又作歌言慕義經。意衆皆垂泣。頼朝色變曰：「賤婢不肯頌我、而敢慕亂人。欲誅之。」政子諫止、賜纏頭罷之。祐經與梶原景茂等、俱就靜舍飲。景茂景時、季子也。醉挑靜。靜怒而泣曰：「吾嘗侍豫州。豫州非鎌倉公親弟哉。汝乃公家人。何遇吾亡狀。使公而全友道、汝欲識我面、得乎。」景茂大慚。已而分身生男。安達清經受命、奪而戕之。靜見放還。政子厚賜遣之。

初、義經の姫靜、從つて吉野に匿る。義經、之を諭して訣別し、僕をして資を齎らし送つて京師に歸らしむ。僕、其の資を奪ひ靜を棄つ。靜、獨り風雪中のを行き、山僧の爲めに獲らる。北條時政に致し、之を鎌倉に送る。義經の在る所を詰る。靜、固く知らずと陳ぶ。其の姪める有るを以て、之を留む。夫人政子、其の善く歌舞するを聞き、一見せんと欲す。病を引いて往かず。頼朝夫妻、鶴岡祠に詣で、靜を召し舞を命じ、簾を垂れて觀んとす。靜固く辭す。之を強ふること再三。乃ち起ちて場に上る。工藤祐經、鼓を搥ち、畠山重忠、銅拍子を撃つ。靜、衣を整へて進み、離別の曲を唱へ、又歌を作つて、義經を慕ふ意を言ふ。衆、皆泣を垂る。頼朝、色變じて曰く、「賤婢、肯て我を頌せずして、敢て亂人を慕ふ」と。之を誅せんと欲す。政子諫止し、纏頭を賜うて之を罷む。祐經、梶原景茂等と、俱に靜の舍に就いて飲む。景茂は、景時の季子なり。醉うて靜を挑む。靜怒

初め義經の姫靜、從つて吉野に匿る。義經、之を諭して訣別し、僕をして資を齎らし送つて京師に歸らしむ。僕、其の資を奪ひ靜を棄つ。靜、獨り風雪中のを行き、山僧の爲めに獲らる。北條時政に致し、之を鎌倉に送る。義經の在る所を詰る。靜、固く知らずと陳ぶ。其の姪める有るを以て、之を留む。夫人政子、其の善く歌舞するを聞き、一見せんと欲す。病を引いて往かず。頼朝夫妻、鶴岡祠に詣で、靜を召し舞を命じ、簾を垂れて觀んとす。靜固く辭す。之を強ふること再三。乃ち起ちて場に上る。工藤祐經、鼓を搥ち、畠山重忠、銅拍子を撃つ。靜、衣を整へて進み、離別の曲を唱へ、又歌を作つて、義經を慕ふ意を言ふ。衆、皆泣を垂る。頼朝、色變じて曰く、「賤婢、肯て我を頌せずして、敢て亂人を慕ふ」と。之を誅せんと欲す。政子諫止し、纏頭を賜うて之を罷む。祐經、梶原景茂等と、俱に靜の舍に就いて飲む。景茂は、景時の季子なり。醉うて靜を挑む。靜怒



つて泣いて曰く、「吾嘗て豫州に侍す。豫州は、鎌倉公の親弟に非ずや。汝は乃ち公の家人なり。何ぞ吾を遇すること亡状なる。公にして友道を全うせしめば、汝、我が面を識らんと欲するも得んや」と。景茂、大に慚づ。已にして分身して、男を生む。安達清經、命を受け、奪つて之を戕す。靜、放還せらる。政子、厚く賜うて之を遣る。

**通釋** はじめ、義經の妾の靜は義經に供をして吉野に匿れてゐた。義經はよく言つて聞かせて長の別れをなし、下僕に色々の物を持たせて、之を京都に送り歸らせた。所が、その下僕は悪い奴でその預かつた物を奪ひ取り、靜を放擲らして逃げて終つた。靜はただ一人で、吹雪の中を行つたが終に吉野の山僧の爲めに捕へられた。山僧は之を京都の北條時政に引き渡し、時政は之を鎌倉に送つた。鎌倉では義經の在りかを喧しく責め問うた。靜はどこ迄も知らないといふと申し立てた。靜は懐妊してゐたので、留め置いた。頼朝の夫人の政子は、靜が歌や舞が上手だと聞いてゐたので、一度見たいと思つた。靜は病氣だと言ひ立てて往かなかつた。頼朝夫妻が鶴岡八幡宮に參詣したとき、靜を召んで舞を命じ、簾を垂れて觀ようとした。靜はどこ迄も辭つた。兩三度も強ひた。そこで、起つて舞臺に上つた。工藤祐經が鼓を打ち、畠山重忠が銅拍子をたたいた。靜は着物をキチンと整へて進み出て別れの歌をうたひ、又自分で歌を作つて、義經を焦がれる心持を述べた。大勢の人は皆涙を流した。頼朝は顔色をかへて曰ふのに「この端た女は予を褒めたたへないで、敢て謀叛人を戀ひ慕ふとは不都合だ」と。これを殺さうとした。政子が諫めて止めさせ、纏頭をやつて罷めた。祐經は、梶原景茂等と一緒に靜の處へ往つて酒を飲んだ。景茂は景時の末子である。景茂は酒に酔拂つて、靜を口説いた。靜は怒つて、泣いて曰ふのに「妾は嘗て伊豫守(義經)の御側にかしづいてゐたのである。伊豫守は鎌倉公(頼朝)の眞身の弟ではないか。お前は、乃ち鎌倉公の家來だらう。何ぞ妾に向つてそんな無禮な仕打ちをするのか。鎌倉公が兄弟仲よく友愛の道を全うされたら、お前などは妾の面を見たいと思つても見ることは出来ないことなのである」と。景茂は大に愧ぢ入つた。その中に、靜は身二つになつて男子を生んだ。安達清經が頼朝の命を受けて其の男子を奪つて殺した。靜は放ち還へされた。政子は手厚く物をやつて歸へしてやつた。

**語釋** 引病(病氣と言ひ立てる) ○作歌(吉野山峯の白雪ふみわけて入りにし人のあとそ戀しき、次いで離別の曲を歌ひ、又歌を) ○纏頭(藝人帛を與へその頭に置いたか) ちかくいふはなのこと。

初頼朝聞藤原秀衡舍義經、奏劾其納亂人。院宣讓秀衡。秀衡陳謝。尋病卒。遺言子泰衡等、舉二國聽於義經、以抗頼朝。有院宣、使泰衡圖義經。泰衡疑惑。是歲二月、頼朝奏曰「泰衡庇反者、罪與反同。臣請奉王命伐之。」因大徵兵。四月晦、泰衡遣兵襲衣川。辨慶、經春等奮戰死。義經手刃妻子而自殺。五月、泰衡乃使使齎義經首來獻。鎌倉頼朝方落鶴岡浮屠、使使止之於途。六月、首至盛。以漆函、醇酒浸之。令和田義盛、梶原景時檢之。或曰「義經不死。匿在蝦夷。」頼朝不復推究。遂奏「泰衡負險阻化、不速奉勅。不可不伐。」朝議未許。而徵兵稍聚。頼朝諮之大庭景能。



**訓讀** 初め頼朝、藤原秀衡、義經を舍すと聞き、奏して其の亂人を納るるを効す。院宣もて、秀衡を讓む。秀衡陳謝す。尋いで病んで卒す。子泰衡に遺言し、二國を擧げて義經に聽せ、以て頼朝に抗せしむ。院宣有り、泰衡をして義經を圖らしむ。泰衡疑惑す。是の歳二月頼朝、奏して曰く、「泰衡、反者を庇ふ。罪、反と同じ。臣請ふ、王命を奉じて之を伐たん」と。因つて大に兵を徵す。四月晦、泰衡兵を遣はし衣川を襲ふ。辨慶、經春等、奮戦して死す。義經、妻子を手及して自殺す。五月、泰衡、乃ち使をして義經の首を齎らし、來つて鎌倉に獻ぜしむ。頼朝、方に鶴岡の浮屠を落す。使をして之を途に止めしむ。六月、首至る。盛るに漆函を以てし、醇酒之を浸す。和田義盛、梶原景時をして、之を檢せしむ。或ひと曰く、「義經は死せず。匿れて蝦夷に在り」と。頼朝、復推究せず。遂に奏す、「泰衡、險を貪み、化を阻て、速に勅を奉ぜず。伐たざる可からず」と。朝議未だ許さず。而して徵兵稍く聚る。頼朝、之を大庭景能に諮る。

**通釋** はじめ、頼朝は、藤原秀衡が義經をかくまつて居ると聞いたので、朝廷に申上げ、秀衡が謀叛人を入れたことを彈劾した。法皇の詔が出て、秀衡を責められた。秀衡は譯を話して謝つた。その中に病氣で死んで終つた。死際に倅の泰衡等に遺言して、陸奥出羽の二國の全部を擧げ、義經にまかせて、頼朝に對抗させることにした。又院宣が下つて、泰衡に義經を滅すようにとのことであつた。泰衡はどちらに爲ようかと思つて、疑ひ迷つた。この年(文治五年)二月に頼朝は奏上して曰ふには、「泰衡は謀叛人をかばつて居ります。その罪は、謀叛人と同様で御座います。私はお願ひ申しますが、勅命を承けて、彼を伐ちたいもので御座います」と。そこで大に兵士を召集した。所が四月三十日、泰衡は兵を遣はして、義經の據つてゐた衣川を襲つた。辨慶や鷲尾經春等

は奮闘して死んだ。義經は手づから妻子を刺し殺し自分も自殺した。そこで五月泰衡は、使をして、義經の首を持參して、鎌倉に獻上に来させた。頼朝は、折しも、鶴岡の塔の落成式を行つてゐた。そこへ首等を持つて來られては困るから使を出して之を途中に差し止めて置いた。六月になつて、首が到着した首は漆塗りの首桶に盛れてあり、腐敗を恐れて濃い酒につけてあつた。和田義盛と梶原景時の兩人に首實驗をさせた。或る人は曰ふのに「義經はまだ生きてゐる。蝦夷に匿れてゐる」と。頼朝はもう吟味することはしなかつた。遂に奏して曰ふのに「泰衡は、險阻を恃みにして、天皇の御政治を妨害し、義經を討ち取れとの御命令も早く實行しませんでした。不都合ですから之を伐たない譯には行きませぬ」と。朝廷の意向ではまだそれを許さなかつた。所が召集した兵士は段々と聚まつて來た。頼朝は如何したものかと、大庭景能に相談した。

**語釋** 蝦夷(今の北海道) ○阻(天子の教化を妨害する)

景能曰「大將臨事、不顧君命、且泰衡先世爲君家人、君討其罪、何須勅允。聚兵徒費、毋爲也。」頼朝從之、使景能及三善康信等留守鎌倉。分爲三軍、常陸下總兵、自東海道進、千葉常胤、八田知家將之。武藏上野兵、自北陸道進、比企能員、宇佐美實政將之。頼朝自將中軍、以畠山重忠爲先鋒。自東山道直入陸奥、次于多古。小山政光迎犒之、入謁。見一甲士侍問其名。頼朝曰「此本朝無雙勇士、熊谷直家者也。」政光曰「此



輩單進、與臣等異。故易成名耳。士赴君難、何有彼此。顧其子朝政、朝光曰、汝等亦單進。

景能曰、大將、事に臨んでは、君命をも顧みず。且つ泰衡の先世は君の家人たり。君、其の罪を討つに何ぞ勅允を須たん。兵を聚め、從に費すは、爲すこと毋れ」と。頼朝、之に従ひ、景能及び三善康信等をして、留つて鎌倉を守らしむ。分つて三軍と爲し、常陸、下總の兵は、東海道より進み、千葉常胤、八田知家、之に將たり。武藏、上野の兵は、北陸道より進み、比企能員、宇佐美實政、之に將たり。頼朝は自ら中軍に將とし、畠山重忠を以て先鋒と爲す。東山道より直に陸奥に入らんとし、多古に次す。小山政光迎へて之を犒ひ、入りて調す。一甲士の侍するを見て、其の名を問ふ。頼朝曰く、「此れ本朝無雙の勇士熊谷直家といふ者なり」と。政光曰く、「此輩單進、臣等と異なる。故に名を成し易きのみ。士、君の難に赴くに、何ぞ彼此有らんや」と。其の子朝政、朝光を顧みて曰く、「汝等も亦單進せよ」と。

通釋 景能は曰ふのに「大將といふ者は戰事に當つては、君の命令でも無視することがあります。それにその泰衡の先代清衡は源家の家來であります。君が家來の罪を討つのに、何にも勅許などを仰ぐ必要はありませんまい。兵士を聚めて置いて無駄な入用を費すことなどは爲さいまするな」と。頼朝は、其の説に従ひ、愈々出發することにし、景能及び三善康信をして、留まつて鎌倉を守らせた。全軍を分けて三軍となし、常陸下總の兵は東海道から進み、千葉常胤と八田知家とがその大將となつた。武藏上野の兵は北陸道から進み、比企能員と宇佐美實政とがその大將となつた。頼朝は自ら本隊の大將となつて、畠山重忠を先鋒とした。そして東山道から直ぐに陸奥

に入らうとし、多古といふ所に宿つてゐた。小山政光は、出迎へて頼朝の軍を犒ひ、入つて頼朝に拜調した。その時政光は、一人の具足を着けた武士が頼朝の傍に侍してゐるのを見て、その名を尋ねた。頼朝は曰ふのに「これは、今日日本で雙びない勇士の熊谷直家といふ者だ」と。政光は曰ふのに「この連中は單獨に敵中へ突込んで行き、自分等とはやり方が違つて居る(隊伍をなして戦つてゐるから)。だから勇名を成し易いのである。併し士たるものが君の大事に出かけるのに何も甲乙の別はないのである」と。その倅の朝政と朝光を顧みて曰ふのに「お前たちも今後は一騎で進む様にしろ」と。

八月、頼朝進至白河關。泰衡軍于鞭楯而城厚。檜山北、使庶兄國衡將精兵二萬守之。國衡將金剛秀綱、以數千人爲先鋒。山下穿大壕、引遇隈河、瀦之。頼朝令重忠赴攻。發卒填壕。朝光挺軍、與加藤景廉等進擊。重忠繼進、大破之。秀綱退合於國衡。日既暮。頼朝令軍中明日攻城。三浦義村、葛西清重先登、斃數千人。旦日、頼朝親進攻。城甚固。國衡善拒。朝政朝光以下、皆殊死戰。呼聲動地、積鏃成堆。朝光與族朝綱、豫遣死士七人、自城後冒險入、大呼而射。城兵謂大兵夾擊、則大亂。

訓讀 八月、頼朝進んで白河關に至る。泰衡、鞭楯に軍し、而して厚檜山の北に城き、庶兄國衡をして、精兵二萬に將として之を守らしむ。國衡の將金剛秀綱、數千人を以て先鋒と爲り、山下に大壕を穿ち、遇隈河を引い



て、之に瀕す。賴朝、重忠をして赴き攻めしむ。卒を發し濠を填む。朝光、軍を挺いて、加藤景廉等と進み撃つ。重忠繼いで進み、大に之を破る。秀綱退いて國衡に合す。日既に暮る。賴朝、軍中に令して、明日、城を攻めしむ。三浦義村、葛西清重、先登して、數千人を斃す。且日、賴朝親ら進み攻む。城甚だ固く、國衡善く拒ぐ。朝光、朝光以下、皆殊死して戦ふ。呼聲、地を動し、積鏃堆を成す。朝光、族朝綱と、豫め死士七人を遣はし、城後より險を冒して入り、大に呼んで射しむ。城兵、大兵夾撃すと謂ひ、則ち大に亂る。

**通釋** 八月、賴朝は進んで白河の關まで來た。泰衡は、鞭楯に陣取り、而して厚樫山の北に城を築き、妾腹の兄國衡に精兵二萬を率ゐて其處を守らしめた。國衡の大將の金剛秀綱は、數千人を引き具して、先鋒となり、厚樫山の下に大きな濠を掘り、遇隈川の水を引いて溜めて置いた。賴朝は重忠をやつて其處を攻めさせた。重忠は士卒を繰り出して、濠を埋めた。朝光は、抜け驅けして、加藤景廉等と一緒に進み撃つた。重忠はそれに繼いで進み、大に敵を撃ち破つた。そこで秀綱は、退却して、國衡の軍と合併した。その時既に日は暮れて終つた。賴朝は軍中に命令を出して、明日、城を攻めることにした。三浦義村、葛西清重は、先登して、數千人を斃した。そのあくる日、賴朝は親ら進み攻めた。城は非常に堅固で、國衡も上手に拒いだ。朝政、朝光以下、皆命がけで戦つた。その叫び聲は地をも動した位で、射たれた矢鏃は積んで、山のやうであつた。朝光は一族の朝綱と相談して、前以て、決死の士七人を遣はし城の後方から險阻を冒して敵中へ入らせ、大聲を揚げて射ちかけさせたのであつた。城兵は、大軍が押しよせ來み撃ちするのだと思ひ大混亂に陥つた。

**語釋** 鞭楯(前陸) ○厚樫山(城) ○遇隈河(今の阿武)

國衡潰圍北走。和田義盛張弓追之。國衡亦回馬射。義盛先發中其左膊。國衡傷走。重忠部將大串某追斬之。朝光亦追獲秀綱。泰衡聞敗而遁。賴朝進至國府。東海道軍、斬敵將佐藤元治以下十八輩。而來會。賴朝未詳泰衡所在。使朝政等攻物見岡。而自圍誰母城。城兵皆降。乃出令曰。我軍至津雲橋。則敵避之。平泉、以死守之。先鋒諸將勿貪功。輕進傷吾一士。遂以諸軍進。連破栗原。三迫諸寨。遂至平泉。泰衡已火城遁。使使乞降。不許。

**訓讀** 國衡、圍を潰やして北に走る。和田義盛、弓を張つて之を追ふ。國衡も亦馬を回して射んとす。義盛、先づ發ちて、其の左膊に中つ。國衡傷つきて走る。重忠の部將大串某、追つて之を斬る。朝光も亦追つて秀綱を獲たり。泰衡敗を聞いて遁る。賴朝、進んで國府に至る。東海道の軍、敵將佐藤元治以下十八輩を斬つて、來り會す。賴朝、未だ泰衡の在る所を詳にせず。朝政等をして物見岡を攻めしめ、而して自ら誰母城を圍む。城兵皆降る。乃ち令を出して曰く、「我が軍津雲橋に至らば、則ち敵、之を平泉に避け、死を以て之を守らん。先鋒の諸將は、功を貪り輕くしく進み、吾が一士をも傷ふ勿れ」と。遂に諸軍を以て進み、連りに栗原、三迫の諸寨を破り、遂に平泉に至る。泰衡、已に城を火いて遁れ、使をして降を乞はしむ。許さず。

**通釋** 國衡は、圍をつき破つて、北に走つた。和田義盛は弓を張つたままで之を追つかけた。國衡も亦馬をひ



きかへして、射ようとした。義盛の方が先きに矢を放つて、國衡の左肩先にうち中てた。國衡は負傷して逃げ出した。重忠の部下の隊將大串某が追つかけてきて、之を斬つた。朝光も、亦追つかけて来て秀綱を生捕りにした。國衡は、國衡が敗れたことを聞いて逃げうせた。頼朝は進んで國府まで来た。そこへ東海道方面の軍勢が敵の大將佐藤元治以下十八人を斬つて、來り會はせた。頼朝は、泰衡の居る處がまだよく分らなかつた。朝政等をして、物見岡を攻めさせ、そして、自分は誰母城を取り圍んだ。城兵は皆降参した。そこで命令を出して曰ふのには「我が軍が津雲橋に至らば、敵は、平泉に避けて命を守るであらう。そこでわが先鋒の諸將は自分の手柄を食つて、軽々しく進んで、我が兵一人でも傷つけるやうなことをしてはならぬ」と。遂に諸軍を率ゐて進み、連續的に栗原、三迫などの諸々の塞を破り、とうとう平泉まで行つた。所が泰衡はその時既に平泉の城を燒いて遁れ、使をよこして降参を申出させた。頼朝は之を許さなかつた。

語釋 大串某(重親) ○國府(賀多) ○東海道軍(常胤、知) ○物見岡・誰母城・津雲橋(前陸) ○平泉(中陸) ○栗原・三迫(前陸)

九月、進軍陣岡。北陸軍、度念珠關、斬敵將田河行文等而來會。兵總三十萬騎、白旗蔽空。泰衡奔蝦夷、至贊柵。其將河田二郎、襲殺泰衡、持其首來降。頼朝誚讓之曰「泰衡在吾掌中、何須若力哉。若忘恩、規利大逆無道。乃斬之、命梟泰衡首、而宣旨適至。乃進至厨川。泰衡族俊衡以下、悉出降。頼朝出鎌倉、四十餘日而平陸奥、出羽。」

萬騎、白旗、空を蔽ふ。泰衡、蝦夷に走らんとして、贊柵に至る。其の將河田二郎、泰衡を襲殺し、其の首を持つて來り降る。頼朝、之を誚讓して曰く、「泰衡、吾が掌中に在り。何ぞ若力が須あらんや。若、恩を忘れ、利を規る。大逆無道なり」と。乃ち之を斬り、命じて泰衡の首を梟す。而して宣旨適至る。乃ち進んで厨川に至る。泰衡の族俊衡以下、悉く出で降る。頼朝、鎌倉を出でてより四十餘日にして、陸奥、出羽を平ぐ。

通釋 九月、頼朝は進んで陣岡に陣取つた。北陸道方面の軍隊は、念珠關を通り敵の大將田河行文等を斬つて來り會した。兵數總てで三十萬騎、白旗は空を蔽ふ程澤山あつた。泰衡は、蝦夷へ逃げようとして贊柵に至つた。するとその大將河田二郎は、泰衡を不意打ちして殺し、其の首を持ち、降参して來た。頼朝は之を責めて曰ふのに「泰衡は、吾が手の中にあつたのである。お前の力をからなくともよかつたのだ。お前は主人の恩を忘れて自己の利益を計る。實に大逆無道の奴だ」と。そこで、之を斬り、命じて泰衡の首を獄門にかけた。そこへ泰衡を征伐せよとの宣旨が届いた。そこで、進んで、厨川まで往つた。泰衡の一族俊衡以下、悉く出でて降参した。頼朝は、鎌倉を出発してから四十餘日間、陸奥出羽を平定したのである。

語釋 陣岡(前陸) ○北陸軍(能員、實) ○念珠關(前羽)

乃索其版籍、皆羅兵燹。既聞實俊實昌者諳州事、召見之。使圖其所記、以知其戶口。阨塞復流民、賚老人、放俘囚、禁鹵掠、取糧於上野下野、毫不累土人。乃至國府、大書其廳曰「國法一切仍秀衡之舊、勿得更革。」令葛西清重留釐州事、使使奏捷、謝其擅。



伐簿上將士功請分予二州地十月還鎌倉十一月法皇欲賞其戰功遣大江廣元  
辭之請賑貸陸奥窮民十二月法皇封賴朝以伊豆相模促朝京師

訓讀 乃ち其の版籍を索むるに皆兵燹に罹れり。既にして實俊、實昌なる者、州事を語んずと聞き、召して之を見る。其の記する所を圖せしめ、以て其の戸口、阨塞を知る。流民を復し、老人に資ひ、俘囚を放ち、鹵掠を禁じ、糧を上野、下野に取り、毫も土人を累はさず。乃ち國府に至り、其の廳に大書して曰く、「國法は、一切秀衡の舊に仍り、更革することを得る勿し」と。葛西清重をして、留つて州事を釐めしむ。使をして捷を奏し、其の擅に伐つを謝せしむ。將士の功を簿上し、請うて二州の地を分予す。十月、鎌倉に還る。十一月、法皇、其の戰功を賞せんと欲す。大江廣元を遣はし之を辭せしめ、陸奥の窮民に賑貸せんことを請ふ。十二月、法皇、賴朝を封するに、伊豆、相模を以てし、促して京師に朝せしむ。

通釋 そこで、奥陸出羽の土地戸籍の記録をさがしたが皆今度の兵火に遭つて、無くなつて終つた。兎角する内に實俊、實昌といふ二人が、二國の事を語んじ知つて居るといふことを聞いたので、賴朝は呼び寄せて之に會つた。彼等二人の記憶してある事を繪圖にかかせて、二國の戸數人口及び要害の場所を知つた。又流浪してゐる人民を元へ返へしてやり、老人には、米穀を與へ、捕虜を解放し、兵士の略奪を禁じ、自分等に必要な兵糧は上野下野から取り寄せて、少しも土地の人に迷惑をかけなかつた。そこで、賴朝は國府に至り、その役所に大きく書き出しているには「國の法律は、すべて秀衡のやつてゐた儘に従ひ、變へたり改めたりしてはならぬ」と。葛西清重をして留まつて、二國の政事を處理せしめた。一方使を京都に派遣して勝利を奏上し、自分が朝廷の許可を催促なされた。

待たないで勝手に征伐したことを謝罪せしめた。將士の功績を帳簿に書き記して奏上し、お願ひして陸奥出羽の地を彼等に分ち與へることにした。十月、賴朝は、鎌倉に還つた。十一月、法皇は、奥羽鎮定の功を賞せられようと思はれた。賴朝は大江廣元を京都に遣つて之を辭退せしめ、それよりは陸奥の困つてゐる人民に施しなり、貸し與へたりされんことを請ふた。十二月、法皇は賴朝に伊豆、相模の二國を賜り、早く京都に入朝するやうに催促なされた。

先是出羽留守檢邑將廢間田賴朝禁止之以安人心已而泰衡舊臣大河兼任在  
出羽聚數千人詐稱源義經木曾義高建久元年正月轉入陸奥由利維平逆戰死  
之清重上變使者謬報曰由利維平走橋公成死賴朝曰維平非走者公成非死者  
驗之果然乃令上總介足利義兼與千葉常胤比企能員將兵伐之小山朝光以下  
邑陸奥者道會之相模以西具兵待命脅從降者勿斬二月義兼等與兼任戰于栗  
原大敗之兼任卻阻衣川陣義兼等亂流又大敗之清重率州兵來會兼任逃之外  
濱壘子兜味山義兼等圍而廕之兼任脫走踰龜山爲樵夫斧殺賴朝責出羽留守  
失政罰甲二百



**訓讀** 是より先き、出羽の留守、邑を檢し、將に間田を廢せんとす。頼朝、之を禁止し、以て人心を安んず。已にして泰衡の舊臣大河兼任、出羽に在つて、數千人を聚め、詐つて、源義經、木曾義高と稱す。建久元年正月、轉じて陸奥に入る。由利維平逆へ戦つて、之に死す。清重、變を上る。使者、謬り報じて曰く、「由利維平走り、橋公成死す」と。頼朝曰く、「維平は走る者に非ず。公成は死する者に非ず」と。之を驗するに、果して然り。乃ち上總介足利義兼をして、千葉常胤、比企能員と、兵に將として之を伐たしむ。小山朝光以下、陸奥に邑する者は、道より之に會し、相模より以西は、兵を具へて命を待ち、脅從して降る者は斬る勿らしむ。二月、義兼等、兼任と栗原に戦ひ、大に之を敗る。兼任卻き、衣川を阻て陣す。義兼等、流を亂り、又大に之を敗る。清重、州兵を率ゐて來り會す。兼任逃れて外濱に之き、兜味山に壘す。義兼等圍んで之を壘にす。兼任脱れ走り、龜山を踰え、樵夫の爲めに斧殺せらる。頼朝、出羽の留守、政を失ふを責め、甲二百を罰す。

**通釋** 是より先き、出羽の留守役が方々の村を檢べて税のかからぬ田地を廢めて終はうとした。頼朝は之を禁止して人民を安心させた。その中に泰衡の舊臣大河兼任が出羽に居て、數千人を集め、詐つて、源義經・木曾義高だと稱へた。建久元年正月、兼任は出羽から轉じて、陸奥に入り込んだ。由利維平は迎へ戦つて討死した。葛西清重が變事を注進した。その使者が間違へて報告していふには「由利維平が逃げ、橋公成は討死をしました」と。頼朝がいふのに「維平は逃げる男ではない。公成は討死するやうな男ではない」と。之を調べて見ると矢張り然うであつた。そこで、上總介足利義兼をして、千葉常胤・比企能員と與に、兵に將として之を討たしめた。小山朝光以下陸奥に土地を持つて居るものは途中で之に一緒になることとし、相模より以西のものは兵士を捕へて

命令を待たしめることとし、又脅かされて敵に従いてゐたものが降参した際には殺さないようにした。二月、義兼等は、兼任と栗原で戦ひ大に之を敗つた。兼任は退却して衣川を前にとつて陣した。義兼等は流を横きつて進み、又大に之を敗つた。丁度其の時清重が、陸奥の兵を率ゐてやつて來た。兼任は、迎も叶はぬと見て取り外濱に逃れ、兜味山に壘をこしらへた。義兼等は之を圍んで、皆殺にした。兼任は、ひとり脱け出して逃げ、龜山を越え、樵夫の爲めに斧で打ち殺されて終つた。頼朝は、出羽の留守役が政治の仕方を誤つたから今度の事件が起つたので、それを責め、罰として鎧二百を差し出さしめた。

**語釋** 間田(無税地) ○建久(後鳥羽天皇の年號) ○外濱・兜味山・龜山(陸奥)

頼朝以天下全定乃議入朝。重忠爲前隊常胤殿之。十月、發鎌倉、由海道入朝。途過内海、謁義朝墓、至青墓、召女延壽。先是、延壽聞頼朝起返、致其所託刀截鬚。於是相見道舊故。十一月、入京師、居六波羅。先謁法皇、即日、朝帝。帝直授權大納言、尋兼右近衛大將。法皇待之甚厚。每入見、漏數刻、不許出。十二月、辭兩職、賜大功田百町、薦功臣十人、拜衛府官。使藤原高能留守六波羅、而辭歸鎌倉。凡往還所需、不累百姓。遠近悅服。

**訓讀** 頼朝、天下全く定まるを以て、乃ち入朝を議す。重忠、前隊と爲り、常胤、之に殿す。十月、鎌倉を發



し、海道より入朝す。途に内海を過ぎ、義朝の墓に謁し、青墓に至り、女延壽を召す。是より先き延壽、頼朝の起るを聞き、其の託する所の刀截鬚を返致せり。是に於て、相見て舊故を道ふ。十一月、京師に入り、六波羅に居る。先づ法皇に謁し、即日、帝に朝す。帝、直に權大納言を授け、尋いで右近衛大將を兼ねしむ。法皇、之を待つこと甚だ厚し。入見する毎に、漏數刻、出づるを許さず。十二月、兩職を辭す。大功田百町を賜ひ、功臣十人を薦めて、衛府官に拜す。藤原高能をして、留つて六波羅を守らしめ、而して辭して鎌倉に歸る。凡そ往還需むる所、百姓を累はさず。遠近悦服せり。

**通釋** 頼朝は、天下が全く平定したので、京都に入朝することを相談した。重忠が先手となり、常胤が後詰となることとなつた。十月に鎌倉を出發し、東海道から入朝した。途中、尾張の内海を通り、義朝の墓に參詣した。青墓驛に至つて、驛長の女延壽を召した。これより先き、延壽は、頼朝が起つたことを聞いて預つて居た太刀の截鬚を送り返した。ここに於て、相會つて、昔の話を語り合つた。十一月京都に入り、六波羅に居た。最初に後白河法皇に謁見し、其の日後鳥羽天皇にも朝した。天皇は其の場で權大納言を授けられ、尋いで右近衛大將をも兼ねしめられた。法皇は頼朝を大層手厚く取扱はれた。法皇の御所に入つて拜謁する毎に數時間たつても退出することを許されなかつた。十二月、頼朝は權大納言と右近衛大將との兩職を辭した。大功田百町を下賜され、手柄を立てた家來十人を推薦せしめ六衛府の官に拜せられた。藤原高能をして、留まつて六波羅を守護させ、而して自分は暇乞ひをして、鎌倉に還つた。凡そ往き還りに必用であつた物はすべて頼朝自身の自辨で、ちつとも人民に厄介をかけなかつた。遠きも近きも悦んで心服した。

**語釋** 六波羅(平賴盛の)〇漏(水時)

二年正月、改公文所稱政所。凡事以政所下文行。二月、修法住寺殿。冬、法皇弗豫。頼朝齋戒禱祈焉。三年三月、遂崩。頼朝因大張法會、施浴於民。二百日。七月、天皇詔以頼朝爲征夷大將軍、使中原景能就拜之。頼朝曰、「吾爲武臣、敢坐受王命乎。」使三浦義澄迎天使于鶴岡祠、受詔書。思其父死義、以榮之也。

**訓讀** 二年正月、公文所を改めて、政所と稱す。凡そ事、政所の下文を以て行ふ。二月、法住寺殿を修む。冬、法皇、弗豫なり。頼朝、齋戒して禱祈す。三年三月、遂に崩す。頼朝、因つて大に法會を張り、浴を民に施す。二百日。七月、天皇詔して、頼朝を以て征夷大將軍と爲し、中原景能をして、就いて之を拜せしむ。頼朝曰く、「吾は武臣たり、敢て坐ながら王命を受けんや」と。三浦義澄をして、天使を鶴岡祠に迎へて、詔書を受けしむ。其の父義に死したるを思ひ、以て之を榮するなり。

**通釋** 二年正月、公文所を改めて、政所といつた。なんでも事は、政所より出した下文を以て行ふこととした。二月、法皇の御所法住寺殿を修理した。冬、法皇は病氣になられた。頼朝は物忌みをして御平癒を祈つた。三年三月、法皇は遂に崩せられた。そこで頼朝は盛に法會を營み、百日間も風呂を民に施した。七月、天皇は詔して頼朝を以て征夷大將軍となし、中原景能をして、鎌倉へ出かけて任命させられた。頼朝はいふのに「自分は武臣である、じつとしてゐて天子の命を受けることは出来ない」と。三浦義澄をして天子のお使者を鶴岡八幡に迎へてそこで詔書を受取らせた。これは義澄の父義明が頼朝擧兵の時に義の爲めに討死をしたのを思ひ、義澄に此



の名譽ある役目をさせて、面目を施させたのである。

語釋

下文(くだしぶみとて文言の終始に下の字を書く故に名づけた。下文のことは貞丈雜記に詳に見ゆ。)

四年正月、定將士座次。四月、獵于那須野。五月、大獵于富士野。長子賴家從焉。獵罷、將還。伊東祐成者、與弟時致、夜入工藤祐經舍、斫殺之。會雷雨。士卒出鬪、多死者。遂斬祐成。時致犯幕被捕。旦日、賴朝親詰之。蓋祐成父祐泰、嘗爲祐經所殺、奪其會我莊。故復仇也。賴朝問「何犯吾幕」曰「吾祖祐親、將軍仇之。吾仇祐經、將軍寵之。吾是以怨焉。賴朝壯之、思宥其死。祐經子哀訴、乃處斬。復會我莊租、以弔二孤。」

訓讀

四年正月、將士の座次を定む。四月、那須野に獵す。五月、大に富士野に獵す。長子賴家從ふ。獵罷み將に還らんとす。伊東祐成なる者、弟時致と、夜、工藤祐經の舎に入り、斫つて之を殺す。會く雷雨あり。士卒出で鬪ひ、死する者多し。遂に祐成を斬る。時致、幕を犯して捕へらる。旦日、賴朝親ら之を詰る。蓋し祐成の父祐泰、嘗て祐經の殺す所と爲り、其の會我の莊を奪はる。故に仇を復せしなりと。賴朝問ふ。「何ぞ吾が幕を犯せる」と。曰く、「吾が祖祐親は、將軍之を仇とす。吾が仇祐經は、將軍之を寵す。吾れ是を以て怨む」と。賴朝、之を壯とし、其の死を宥さんと思ふ。祐經の子哀訴す。乃ち斬に處す。會我莊の租を復し、以て二孤を弔はしむ。四年正月、將士の座次を定めた。四月、那須野で獵をした。五月、富士の裾野で大々的に獵を催した。

長男の賴家もお供をして往つた。獵も濟んで、還らうとしてゐた。その時、伊東祐成といふものが、弟の時致と二人で夜工藤祐經の陣屋に斬り込み、祐經を斬り殺した。丁度その夜は雷雨の烈しい夜であつた。士卒は出で鬪ひ討ち死したものが多かつた。遂に祐成を討ち取つた。時致は賴朝の陣屋に斬り込んで、捕へられた。翌日、賴朝は自分の手で之を責問した。これは祐成の父祐泰は嘗て、祐經に殺されて、その所有してゐた會我の莊を奪はれた。それで其の仇を報いたのである。賴朝は訊ねていふに「何故我が陣屋に斬り込んだか」と。時致は答へて曰ふに「吾が祖父の伊東祐親は、將軍が怨んで仇となされた。吾が仇の祐經は將軍が御寵愛なされてゐる。そんな譯で將軍を怨んでゐたのである」と。賴朝は時致を元氣のある男だとして其の死を赦さうと思つた。所が祐經の倅が悲しんで訴へ出た。そこで斬罪に處した。そして會我の莊の年貢を免除してやつて、その代り祐成、時致の跡を弔はせた。

- 那須野(下野) ○富士野(駿河) ○祐成(郎) ○時致(郎) ○會成莊(相模) ○祐經子(祐時、幼字は犬坊丸)
- 復(年貢を免除すること) ○二孤(祐成、時致)

二孤之變、鎌倉訛傳、賴朝遭害。夫人駭悲。範賴曰「安之。範賴在焉。賴朝聞而惡之。初義經負功專恣、而範賴每事稟賴朝。及義經反、令範賴討之。固辭不許。將發、入見。賴朝曰「汝亦爲九郎之貳舞者。範賴大懼、不敢發。獻誓書千通。至是、又獻焉。就大江廣元謝失言。賴朝見其誓書、署源範賴曰「稱姓濫也。使者辯之不釋。賴朝夜聞床下有



人氣息、急呼衛士。結城朝光發床、獲一人。乃範賴力臣當麻也。曰「臣視參州、憂迫欲聞幕中之議耳。」掠治之、無異辭。八月、遂命狩野氏、拘範賴于伊豆、修禪寺。其羣臣相聚濱濱館、遣兵夷之。梶原景時勸殺。範賴以其手兵五百襲之。範賴射殪十餘人、縱火自殺。

**訓讀** 二孤の變、鎌倉訛傳す、一頼朝、害に遭ふ」と。夫人駭き悲しむ。範賴曰く、「之を安んぜよ。範賴在り」と。頼朝聞いて之を惡む。初め義經、功を貧みて専恣、而して範賴は事毎に頼朝に稟く。義經反くに及んで、範賴をして之を討たしむ。固辭す。許さず。將に發せんとし、入つて見ゆ。頼朝曰く、「汝も亦九郎の貳舞を爲す者」と。範賴、大に懼れ敢て發せず。誓書千通を獻す。是に至りて、又獻じ、大江廣元に就いて失言を謝す。頼朝、其の誓書に「源範賴と署するを見て、曰く、「姓を稱するは濫なり」と。使者、之を辯ずれども、釋けず。頼朝、夜、床下に人の氣息有るを聞き、急に衛士を呼ぶ。結城朝光、床を發し、一人を獲たり。乃ち範賴の力臣當麻なり。曰く、「臣、參州の憂迫を視て、幕中の議を聞かんと欲するのみ」と。之を掠治するに、異辭無し。八月、遂に狩野氏に命じて、範賴を伊豆の修禪寺に拘せしむ。其の群臣相聚りて、濱館に據る。兵を遣はして之を夷げしむ。梶原景時、範賴を殺さんことを勤め、其の手兵五百を以て之を襲ふ。範賴射て十餘人を殪し、火を縱ちて自殺す。

**通釋** 祐成、時政の變事が鎌倉に間違つて、頼朝が殺害されたと傳はつた。夫人の政子は、驚き悲しんだ。範賴が慰めていふには「御心配なされますな。私が居ります」と。頼朝は此の事を聞いて、範賴を惡んだ。初め、義經は、功を恃んで氣儘な振舞があつたが、範賴は事ごとに、頼朝の指圖を受けて居た。義經が謀叛をした時に範賴をして、之を討たせた。範賴は固く辭退した。併し許さなかつた。範賴は致方なく出發しようとして、幕府に入つて頼朝に謁見した。頼朝は曰ふのに「お前もいづれば九郎の二の舞をやる奴だ」と。範賴は大に懼れ出發をし兼ねた。とうとうそれで誓の書面一千通を獻じた。以前そんなことがあつたところへ又この失言をしたので二孤の變について又誓書を獻じ、大江廣元に頼んで失禮なことをいつたお詫びをした。頼朝はその誓書に、源範賴とかいてあるのを見て曰ふには「源といふ姓を名乗るとは仰山なことだ」と。使者は之を辯解したが、頼朝は中々水釋しなかつた。頼朝は夜、床の下に人の氣息のするのを聞いて、急に護衛の武士を呼んだ。結城朝光が床板をめくつて一人の男を捕へた。捕へて見るとそれは範賴の家來で力士の當麻といふものであつた。當麻はいふに「私は、範賴殿の御心配がひどいのを見て、氣にかかり、幕府の評議の様子を聞き取らうと思つたばかりである」と。之を拷問にかけたが別に變つたこともいはない。八月、遂に狩野氏に命じて、範賴を伊豆の修善寺に拘禁した。範賴の家來どもは、相集つて、由井が濱の屋敷に立て籠つた。頼朝は兵士を遣はして、之を平けしめた。梶原景時は、頼朝に、範賴を殺すやうに勧め、自分の手下の者五百人をつれて之を襲うた。範賴は射て十餘人を殪し、それから火をつけて自殺した。

**語釋** 不釋(一説に釋は) ○當麻(當麻) ○參州(河守) ○狩野氏(宗)

五年八月、安田義定亦被殺。義定子、義資、嘗挑頼朝、侍女爲景時所發、處斬。義定坐



免憤怨。有告其反者。於是殺之。六年三月、賴朝與政子、賴家赴南都、落東大寺。寺嘗爲平氏所燒夷。法皇修之。賴朝爲給其資、令僧文覺司役。慶以馬千匹。遂朝京師。踰月而歸。時平賀義信爲武藏地頭。百姓便之。賴朝揭其廳曰「凡守國者、當則義信」。八月、令東國地頭有匿姦盜者、皆奪其職、以予捕獲者。

**訓讀** 五年八月、安田義定も亦殺さる。義定の子義資、嘗て賴朝の侍女を挑み、景時の發く所となりて、斬に處せらる。義定、坐して免ぜられ、憤怨す。其の反を告ぐる者有り。是に於て、之を殺す。六年三月、賴朝、政子、賴家と、南都に赴き、東大寺を落す。寺は嘗て平氏の燒夷する所と爲る。法皇、之を修む。賴朝、爲めに其の資を給し、僧文覺をして役を司らしむ。慶するに馬千匹を以てす。遂に京師に朝し、月を踰えて歸る。時に平賀義信、武藏の地頭たり。百姓、之を便とす。賴朝、其の廳に掲げて曰く、「凡そ國を守る者は、當に義信に則たるべし」と。八月、東國の地頭に令す、「姦盜を匿す者有らば、皆其の職を奪ひ、以て捕獲する者に予へん」と。

**通釋** 五年八月、安田義定も亦殺された。義定の子の義資が嘗て賴朝の腰元を口説いて梶原景時に見付かり、發かれて、義資は斬罪に處せられた。義定も、その罪に連坐して役を免められ、心に憤り怨んで居た。義定が謀叛をするといつて訴へたものがあつた。そこで之を殺したのである。六年三月、賴朝は夫人政子、子賴家と一緒に奈良に赴き、東大寺の落成式を行つた。この寺は嘗て、平氏の爲めに燒き拂はれたのである。それを法皇が修理されたのである。賴朝は爲めにその資金を出し僧の文覺をして、工事を司らしめた。かくて落成したので、祓として、馬千匹を寄進した。それから京都に朝し、その翌月、鎌倉に歸つた。當時平賀義信は、武藏の地頭であつた。よい政治をしたので人民は甚だ都合がよいとおもつて居た。賴朝は幕府に揭示して「凡そ國を守るものは、義信を手本とすべきである」と。八月、關東諸國の地頭に命令を出した「若し惡る者姦盜を匿すものがあつたら、その職を取り上げて、その姦盜を捕へたものに、その職を與へる」と。

七年六月、平知忠者聚兵京師、謀襲賴朝。妹夫藤原能保能保初請賴朝、延後藤基清自衛。於是基清攻殺知忠。平氏餘黨於是悉平。八年十二月、賴家敍從五位上、爲右近衛權少將。九年十二月、稻毛重成修相模川橋。賴朝親臨落之、歸墜馬疾作。明年正月、遂薨。年五十三。賴朝年三十三起兵、六歲夷平氏、握天下兵馬者十五年、乃歿。詔以賴家爲右近衛權中將、總天下守護地頭。是歲、正治元年也。

**訓讀** 七年六月、平知忠なる者、兵を京師に聚めて、賴朝の妹夫藤原能保を襲はんと謀る。能保、初め賴朝に請うて、後藤基清を延いて自ら衛る。是に於て、基清、知忠を攻殺す。平氏の餘黨、是に於て、悉く平げり。八年十二月、賴家、從五位上に叙せられ、右近衛權少將と爲る。九年十二月、稻毛重成、相模川の橋を修む。賴朝親ら臨んで之を落し、歸るとき、馬より墜ちて、疾作る。明年正月、遂に薨す。年五十三。賴朝、年三十三にして兵を起し、六歳にして平氏を夷げ、天下の兵馬を握ること十五年にして、乃ち歿す。詔して、賴家を以て



右近衛權中將と爲し、天下の守護、地頭を總べしむ。是の歳、正治元年なり。

**通釋** 七年六月、平知忠といふ者が、兵を京都に聚めて、頼朝の妹婿藤原能保を不意討しようとした。能保は、初め、頼朝に頼んで、後藤基清を引き入れて、護衛として居た。そこで基清は、知忠を攻めて殺した。平氏の殘黨もこれで、すっかり平らひだ。八年十二月、頼家は、從五位上に叙せられ、右近衛權少將となつた。九年十二月、稻毛重成が相模川の橋を架けた。頼朝は自身其處へ出張して落成式を行ひ、歸途馬から落ちて、それをもとで病氣が起つた。明年正月、遂に薨去した。年は五十三。頼朝は三十三の時に兵を起し六年目に平氏を滅し、天下兵馬の權を握ること十五年で薨じたのである。そこで、詔して、頼家をば右近衛權中將となし、天下の守護地頭を總管せしめた。この年は、後鳥羽天皇の正治元年であつた。

**語釋** 相模川(今馬入川)

頼家年十八。北條時政以外祖執政、不使頼家親聽、獨與其狎臣五人游處、寢淫縱。母政子驟戒之、不悛。時政如不聞知也。頼家有弟、曰千幡。爲頼朝所愛、嘗置之懷中、召宗族諸將、囑之。小山朝光與焉。及頼朝薨、朝光欲爲削髮、以有遺託、未果。一日、衆言其意、梶原景時讒之於頼家、曰朝光有忠臣不事二君之語、恐有異志。朝光聞而自危、問計於三浦義村、義村、義澄、子也。固善朝光、乃與和田義盛、安達盛長以下

六十六人、俱罪狀。景時因大江廣元上焉。廣元欲其和解、不敢上。義盛促廣元、廣元以實對。義盛責之、乃上。頼家以其疏、示景時。景時奔其邑、一宮無何潛還鎌倉。頼家命義盛等逐之、毀其第。景時據邑聚兵、欲擁武田有義爲將軍。約至京師、舉關西兵。有義者、信義子也。

**訓讀** 頼家年十八。北條時政、外祖を以て政を執り、頼家をして親ら訟を聽かしめず。獨り其の狎臣五人と游處し、寢く淫縱なり。母政子驟之を戒むれども、悛めず。時政、聞知せざるが如し。頼家、弟有り、千幡と曰ふ。頼朝の愛する所たり。嘗て之を懷中に置き、宗族諸將を召して之を囑す。小山朝光與る。頼朝薨するに及んで、朝光、爲めに髮を削らんと欲す。遺託有るを以て、未だ果さず。一日、衆に其の意を言ふ。梶原景時、之を頼家に讒して曰く、「朝光、忠臣、二君に仕へざるの語有り。恐らくは異志有らん」と。朝光聞いて自ら危み、計を三浦義村に問ふ。義村は義澄の子なり。固より朝光に善し。乃ち和田義盛、安達盛長以下六十六人と、俱に景時を罪狀し、大江廣元に因つて上る。廣元其の和解を欲し、敢て上らず。義盛、廣元を促す。廣元、實を以て對ふ。義盛之を責む。乃ち上る。頼家、其の疏を以て景時に示す。景時、其の邑一宮に奔る。何も無くして潛に鎌倉に還る。頼家、義盛等に命じて之を逐ひ、其の第を毀たしむ。景時、邑に據つて兵を聚む。武田有義を擁して將軍と爲さんと欲す。京師に至り、關西の兵を擧げんと約す。有義は、信義の子なり。

**通釋**

頼家は、この時、年十八であつた。北條時政は、母方の祖父であるので、政治を執り行ひ、頼家には訴



訟事を直接聽かしめなかつた。頼家はただお氣に入りの家來五人と遊び暮し、追ひく酒色に耽り、ふしだらになつて來た。母の政子が、度々意見をしてみたが改める様子もない。時政は一向聞き知らぬ風をしてゐた。頼家に弟があつて、千幡といつた。頼朝に愛せられて居た。頼朝はある時、之を懐に入れ、一族の者や、諸將を呼び寄せて、千幡の行末をたのんだ。小山朝光も亦頼まれた中に入つてゐた。頼朝が薨じてから朝光は後生を弔ふ爲めに坊主にならうと思つた。千幡を頼まれた遺言があるので、まだ髪を剃らずに居た。或る日、大勢の人の中朝光は自分の意中を話した。梶原景時は朝光を頼家に讒して曰ふには「朝光が忠臣は二君に事へずと申して居ました。ひよつとすると千幡を守り立てようとする謀叛心があるのかも知れませんか」と。朝光は之を聞いて、自ら危険を感じ、計を三浦義村に問うた。義村は、義澄の子である。もとく朝光と仲が善かつた。そこで、和田義盛、安達盛長以下、六十六人と一緒に、景時の罪の次第を書きつらね、大江廣元に頼んで頼家に上つた。廣元は和解をさせようと思つて上らずに置いた。義盛は廣元に催促をした。廣元は有の儘を答へた。義盛は啗しく責め立てた。そこで廣元は之を上つた。頼家はその訴への上書を景時に見せた。景時は吃驚して、自分の領地一宮に逃げ込んだ。幾もなくして、こつそり鎌倉に還つて來た。頼家は義盛に命じて、之を追拂ひ、その屋敷を破壊せしめた。景時は一宮に立て籠つて兵を聚めた。彼は武田有義を守り立てて、將軍としようと思つた。京都に行き關西の兵を擧げることと有義と約束した。有義は、信義の子である。

狎臣五人(小笠原長經、比企三郎、和田朝盛、中野能成、細野四郎) ○忠臣不事二君(齊の王麴) ○一宮(橋)

二年正月、景時擧族西奔、頼家遣兵追之。景時至狐崎、爲土豪吉香某所、慶殺衆、快

レ之。景時終頼朝、世、信寵不、義建久中、熊谷直實與久下直光、爭疆、而詛直實口、不  
能辨。怒曰、景時黨直光、臣無所望矣。走出、拔刀、斷髮、西奔、京師、頼朝使人遮止之、而  
不問。景時、義盛有疾、景時借其士、所別當、而遂不還焉。至是、義盛乃得復職。

二年正月、景時、族を擧りて西奔す。頼家、兵を遣はし之を追はしむ。景時、狐崎に至り、土豪吉香某の慶殺する所と爲る。衆、之を快とす。景時、頼朝の世を終るまで、信寵衰へざりき。建久中、熊谷直實、久下直光と、疆を争うて訟ふ。直實、口、訥にして辨する能はず。怒つて曰く、「景時、直光に黨す。臣望む所無し」と。走り出で、刀を抜き、髪を断ち、西、京師に奔る。頼朝、人をして之を遮り止めしむ。而して景時を問はず。義盛疾有り。景時、其の士、所別當を借りて、遂に還さず、是に至りて、義盛乃ち職に復するを得たり。

二年正月、景時は、一族を引きつれて西へ走つた。頼家は、兵を遣はして、之を追はしめた。景時は狐崎に至り、土地の豪族吉香某の爲めに、全軍皆殺にされて終つた。多勢の人々は皆氣味善がつた。景時は、頼朝の死ぬるまで、信用と寵愛とが衰へなかつた。建久年中、熊谷直實が久下直光と領地の境界の争ひがあつて、訴へ出た。直實は口が吃つて、思ふままに言ひ譯することが出来ない。怒つて曰ふには「景時が直光に加勢してゐる。もう此の上は望みはない」と。さういつて直實は走り出で、刀を抜いて髪を切り坊主となつて西、京都に狂奔した。頼朝は人をやつて、之を遮り止めさせた。さりとて景時の罪は不問に附して置いた。和田義盛が、ある時、病氣に罹つた。景時は、義盛の代理で一時、士所の別當の職を借りたが、義盛の病氣が癒つても遂に其の



職を還さなかつた。景時が死んだので義盛は其の職に復へることが出来た。

遣兵(比企能員等) ○狐崎(駿河) ○吉香某(小二) ○建久(後鳥羽天皇) ○奔京師(新黒谷の僧源空の弟子と  
なり、名を蓮生といふ)

建仁元年正月、越後、人城長茂、作亂於京師、襲小山朝政第。朝政時從、幸不在。其兵拒卻之。賊圍上皇宮、請討賴家。宣不許。奔匿吉野。賴家下令急索。二月、獲而誅之。長茂、姪資盛、據鳥坂反。賴家命佐佐木盛綱伐之。盛綱適出、在其門外。命至不入。家而發、三國至鳥坂。其子盛季先登、資盛逃亡。其姑曰板額、醜而多力善射。遂被虜、送到鎌倉。安田義遠請娶之。賴家問其意、對曰「欲使生勇士、以益於君耳」。賴家笑而聽之。賴家累遷、是歲七月、終襲征夷大將軍、敍從二位。五月、有告叔父全成在阿野謀反。使武田信光捕放之、常陸尋命八田知家殺之。

訓讀 建仁元年正月、越後の人城長茂、亂を京師に作し、小山朝政の第を襲ふ。朝政、時を幸に從ひて、在らず。其の兵、拒いで之を卻く。賊、上皇の宮を圍みて、賴家を討つの宣を請ふ。許さず。奔つて吉野に匿る。賴家、命を下して急に索む。二月、獲て之を誅す。長茂の姪資盛、鳥坂に據つて反す。賴家、佐佐木盛綱に命じて之を伐たしむ。盛綱、適く出でて其の門外に在り。命至る。家に入らずして發し、三月にして、鳥坂に至る。其

の子盛季、先登し、資盛逃じす。其の姑を板額と曰ふ。醜にして多力、善く射る。遂に虜へられ、送つて鎌倉に到る。安田義遠、之を娶らんと請ふ。賴家、其の意を問ふ。對へて曰く、「勇士を生ましめ、以て君に益せんと欲するのみ」と。賴家、笑つて之を聽す。賴家、累遷して、是の歲七月、終に征夷大將軍を襲ぎ、從二位に叙せらる。五月、叔父全成、阿野に在つて反を謀ると告ぐる有り。武田信光をして捕へしめ、之を常陸に放ち、尋いて八田知家に命じて之を殺さしむ。

通釋 建仁元年正月、越後の人城長茂、京都で亂を起し、小山朝政の屋敷を襲うた。丁度朝政は、天皇の行幸の御供をして不在であつた。留守番の兵士が拒いで、之を撃退した。賊は、上皇の御所を圍んで、賴家を討伐する院宣を下されたいと強請した。許されなかつた。賊は走つて吉野に匿れた。賴家は命令を下して急に嚴しく詮索した。二月、捕へて之を誅した。長茂の甥の資盛が鳥坂に立て籠つて謀叛した。賴家は、佐佐木盛綱に命じて、之を伐たせた。盛綱は丁度自分の家の門の外に居た。そこへ資盛を討てよとの君命が來た。家に入らないで其の儘出發し、三日で鳥坂に到着した。其の子盛季が先登し、資盛は逃げうせた。資盛の叔母に板額といふのがあつた。容色が悪く、併し力があつて、弓を射ることが上手であつた。とうく捕へられ、鎌倉に送られた。安田義遠は之を嫁にしたいと願ひ出た。賴家は、その心を問うた。義遠は對へていふに、「勇士を生ませて、君の御役に立てたいと思ふばかりで御座います」と。賴家は笑つて之を許した。賴家はどんく出世して、この年七月には終に征夷大將軍の職を繼ぎ、從二位に叙せられた。五月、叔父の全成が阿野で謀叛を企て居ると告げた者があつた。武田信光をやつて捕へさせた。之を常陸に追放し、間もなく、八田知家に命じて殺させた。



語釋 建仁(土御門天皇)の年號(越) ○鳥坂(後) ○阿野(江)

當是時幕政無大小皆決於時政其族黨半於一府賴家受制心不能平八月賴家有疾政子與時政議令傳總守護于其長子一幡而割關西三十八州地頭以予千幡一幡外祖比企能員因其女謂賴家曰近日之議分權起爭不便莫大焉賴家亦憤北條氏所爲密召能員於臥內與議事政子側耳障外聞之使人馳告於時政時政與其黨謀之伏甲而託事召能員能員子弟皆曰母往即往以兵自備能員曰是啓釁也彼何有他意遂往甲起殺之從者走歸告之其子宗員宗員舉族奉一幡據小御所時政遣長子義時率諸將攻之宗員等奮擊卻之畠山重忠選兵疾攻宗員力盡焚第自殺遂悉夷其族并殺一幡諸與能員親善者皆見誅竄

訓讀 是の時に當り、幕政、大小と無く、皆時政に決す。其の族黨、一府に半ばす。賴家、制を受け、心平なる能はず。八月、賴家疾有り。政子、時政と議して、總守護を其の長子一幡に傳へ、而して關西三十八州の地頭を割いて以て千幡に予へしめんとす。一幡の外祖比企能員、其の女に因つて、賴家に謂つて曰く、「近日の議は、權を分ち、争を起す。不便焉より大なるは莫し」と。賴家も亦北條氏の爲す所を憤り、密に能員を臥内に召

して、與に事を議る。政子、耳を障外に側てて之を聞き、人をして馳せて時政に告げしむ。時政、其の黨と之を謀り、甲を伏せて、事に託し能員を召す。能員の子弟、皆曰く、「往くこと毋れ。即し往かば、兵を以て自ら備へよ」と。能員曰く、「是れ釁を啓くなり。彼れ何ぞ他意有らん」と。遂に往く。甲起つて之を殺す。從者走り歸りて之を其の子宗員に告ぐ。宗員、族を擧げ、一幡を奉じて、小御所に據る。時政、長子義時を遣はし、諸將を率ゐて之を攻めしむ。宗員等奮撃して、之を卻く。畠山重忠、兵を選んで疾く攻む。宗員、力盡き、第を焚いて自殺す。遂に悉く其の族を夷げ、并はせて一幡を殺す。諸の能員と親善なる者は、皆誅竄せらる。

通釋 その當時、幕府の政治は、大小となく皆時政の手で決せられてゐた。北條氏の一族徒黨は幕府に半ばする位であつた。賴家も、自然北條氏に掣肘されるので、心中、不平であつた。八月、賴家は病氣に罹つた。政子は、時政と相談して、總守護の職をその長男の一幡に傳へ、そして關西三十八ヶ國の地頭を割いて、弟の千幡に與へさせようとした。一幡の母方の祖父比企能員は、その娘を通して、賴家に謂はせるのには「此の頃決められた御評議は政治の大權を二つに分けて、争を起す本になります。こんな都合の悪いことはありませぬ」と。賴家も亦北條氏の仕方を怒り、ひそかに能員を寢室に呼び入れ、與に事を相談した。政子は襖の外で耳を側だて立聞き、急に人をやつて、之を時政に告げさせた。時政は、味方の者と相談し、兵士を匿して置いて、佛事にかこつけ、能員を招いた。能員の子弟は皆曰ふのに「御出でなさるなら、兵士を連れて、萬一に備へなさい」と。能員は曰ふのに「それでは此方から事を始めることになる。彼は別に悪い考へがある筈はない」と。遂に出かけた。武装した兵士が急に出て來て能員を殺した。供の者が走り歸つてこのことを能員の子



の宗員に告げた。宗員は一族を全部引きつれ一幡を奉じて小御所に立て籠つた。時政は、長子義時を遣はし、諸將を率ゐて攻めさせた。宗員等は奮闘して、之を撃つて退けた。畠山重忠は兵士を選んで急に攻めかけた。宗員は力盡き、屋敷を焼いて自殺した。遂に悉く能員の一族を殺し、一緒に一幡をも殺した。多くの能員と親密なる間柄であつた者は皆誅せられたり流されたりした。

其女(若狭局、頼家の妾) ○近日之議(守護職を譲り地頭を割く相談) ○小御所(一幡の屋敷)

頼家病間聞變、大恨怒。時政歸罪於仁田忠常、殺之。忠常刃能員者也。既而宣言「頼家與忠常圖己」。遂迫頼家削髮、幽之修禪寺。以千幡代之。頼家幽囚無慘、寄書於母與弟、請得故近臣數人侍己。己不答。遣三浦義村視察之、禁其通書。明年七月、時政遣人圖之。憚頼家趨捷、候其浴圍之、飛繩約首以殺之。年二十三。子一幡先卒。猶有二子。長者四歲。政子使千幡養之、遂爲僧。曰公曉。次者曰千壽丸。爲中務丞某所養。

頼家、病間に、變を聞き、大に恨怒す。時政、罪を仁田忠常に歸して之を殺す。忠常は、能員を及せし者なり。既にして宣言す、「頼家、忠常と、己を圖る」と。遂に頼家に迫りて髮を削らしめ、之を修禪寺に幽し、千幡を以て之に代らしむ。頼家、幽囚無慘、書を母と弟とに寄せて、故の近臣數人を得て、己に侍せしめんことを請ふ。答へず。三浦義村を遣はし之を視察せしめ、其の書を通ずるを禁ず。明年七月、時政、人を遣はして

之を圖る。頼家の趨捷を憚り、其の浴を候ひて之を圍み、繩を飛ばして、首を約し、以て之を殺す。年二十三。子一幡、先だちて卒す。猶ほ二子有り。長は四歲。政子、千幡をして之を養はしめ、遂に僧と爲し、公曉と曰ふ。次は千壽丸と曰ひ、中務丞某の養ふ所と爲る。

頼家は病氣の少し快い時、この變事を聞いて、大に恨み怒つた。それで時政は罪を仁田忠常になすりつけて之を殺した。忠常は、時政の命で能員を斬り殺したものである。間もなく時政は宣言していふには「頼家が忠常と一緒に自分を殺さうとした」と。遂に頼家に迫つて、髮を剃らせ、之を修禪寺に押し籠め、弟千幡を以て、之に代らせた。頼家は押し籠められて退屈し、手紙を母政子と、弟千幡によせてもとの近臣四五人を得て、自分の側に侍せしめられたいと頼んだ。しかし返事をしなかつた。その代りに三浦義村を遣はして、その動靜を視察せしめ、頼家が手紙を遣り取りするのを禁じた。明年七月、時政は、人を遣はして、頼家を殺させることにした。頼家は身輕で敏捷いので逃げられるのを憚つて彼が入浴する時をねらつて取り圍み、繩を飛ばして首にくくり、そして之を殺した。その時、年二十三であつた。子の一幡はそれに先だつて死んだ。一幡の外にはまだ二人の子があつた。上の方が四歳であつた。政子は、千幡をして之を養はせたが、遂に坊主にして公曉といつた。下の方は千壽丸といひ、京都の中務丞の何某に養育せられて居た。

病間(病氣が少しく) ○修禪寺(伊豆) ○長者(幼名) ○中務丞(中務省は宮中のことを領す。丞は少輔の次官)

千幡十二歳而立。詔叙從五位下。襲征夷大將軍。賜名實朝。居北條氏第。下令安撫。



諸將、徵誓於京畿西國、將士遣武藏、守平賀朝雅、率關西地頭、監護京師。元久元年三月、伊賀伊勢盜起、伊賀守護首藤經俊逃走、實朝令朝雅討之、獲盜魁平基度。平盛時、乃奪經俊職、授於朝雅。朝雅義信子也。與畠山重忠、皆娶時政女。而朝雅所娶、其後妻牧氏出也。以故時政偏愛朝雅、寢惡重忠、終欲殺之、誣以謀反。令二子義時、時房攻殺重忠、子重保其第一。

**訓讀** 千幡、十二歳にして立つ。詔して、從五位下に叙し、征夷大將軍を襲がしめ、名を實朝と賜ふ。北條氏の第に居り、令を下して諸將を安撫し、誓を京畿、西國の將士に徵す。武藏守平賀朝雅を遣はし、關西の地頭を率ゐて、京師を監護せしむ。元久元年三月、伊賀、伊勢に盜起る。伊賀の守護首藤經俊逃れ走る。實朝、朝雅をして之を討たしめ、盜魁平基度、平盛時を獲たり。乃ち經俊の職を奪ひ、朝雅に授く。朝雅は、義信の子なり。畠山重忠と、皆、時政の女を娶る。而して朝雅の娶る所は、其の後妻牧氏の出なり。故を以て、時政、偏に朝雅を愛し、寢く重忠を惡み、終に之を殺さんと欲し、誣ふるに反を謀るを以てす。二子義時、時房をして重忠の子重保を其の第に攻め殺さしむ。

**通釋** 千幡は十二歳で將軍の位に立つた。詔して、從五位下に叙し、征夷大將軍の職を繼がしめ、名を實朝と賜はつた。實朝は、北條氏の屋敷に居て命令を下して、諸將を安んじ愛撫し、京畿西國の將士から銘々誓書一札

を入れたせた。武藏守平賀朝雅を遣はして關西の地頭を率ゐて、京師を監護し、保護させた。元久元年三月、伊賀、伊勢に於て賊が起つた。伊賀守護首藤經俊は逃げ走つた。實朝は、朝雅をして、之を討たしめ、賊の頭目平基度、平盛時を生捕つた。そこで實朝は經俊の職を取り上げ、之を朝雅に與へた。この朝雅は、平賀義信の子である。畠山重忠と與に、皆時政の娘を娶つてゐた。しかし朝雅の娶つてゐたのは時政の後妻牧氏の方の生んだ女である。そんな譯で時政は朝雅の方を格別愛し、だんく重忠を惡み出し、遂に之を殺さうと思つて、重忠は謀叛を圖つたと、無い事を言ひ立てた。時政は、二子義時、時房をやつて、重忠の屋敷を攻めさせ、重忠の子の重保を殺させた。

**語釋** 徵誓(新任の將軍に叛かぬといふ誓) ○元久(土御門天皇)の年號

時重忠在其邑。時政遣人給告、鎌倉有難、宜赴援。重忠即從、百餘騎而發。中途望見大兵蔽野而來、始知其實。部下交勸其據邑聚兵。重忠不肯曰、吾不做梶原景時之苟免而貽譏也。奮戰中、箭死。重忠族稻毛重成、榛谷重朝等、同日皆斬。重成初媚時政、構陷重忠、而終爲時政所殺。北條氏忌重忠日久。重忠勇而有衆。從賴朝常爲軍鋒。而性忠厚、不與人爭功。賴朝深知其長者、委託後事。而爲北條氏所陷。天下冤之。七月、分畠山氏邑。以賞將士。



**訓讀** 時に重忠、其の邑に在り。時政、人を遣はし、給き告げしむ。「鎌倉に難有り。宜しく赴き援くべし」と。重忠、即ち百餘騎を從へて發す。中途にして、大兵の野を蔽うて來るを望見し、始めて其の實を知る。部下、交々其の邑に據りて兵を聚めよと勸む。重忠肯んぜずして曰く、「吾れ梶原景時の苟も免れて譏を貽すに倣はざるなり」と。奮戦して箭に中りて死す。重忠の族稻毛重成、榛谷重朝等、同日に皆斬らる。重成、初め時政に媚びて、重忠を構陷し、而して終に時政の殺す所となる。北條氏、重忠を忌むこと、日久し。重忠、勇にして衆有り。頼朝に従ひ、常に軍鋒と爲る。而して性忠厚、人と功を争はず。頼朝、深く其の長者なるを知り、後事を委託す。而して北條氏の陷る所と爲る。天下之を冤とす。七月、畠山氏の邑を分ち、以て將士を賞す。

**通釋** その時、重忠は、自分の領邑に歸つて居た。時政は、人を遣つて、詐り告げさせた。「鎌倉に騒動が持ち上つたから、早く來て援けたら宜からう」と。重忠は、早速百餘騎を從へて出發した。途中多勢の兵が野に一杯になつてこちらに來るのを望み見て始めて譯が分つた。部下の者が、かはるゝ重忠に、領地に立て籠り、兵を聚めて、防ぐようと勸めた。重忠は聞き入れないで曰ふには、「かの梶原景時が一時の難を逃れて、後世に物笑ひの種を残したやうな真似は自分には出来ない」と。そこで奮戦し、矢に中つて死んだ。重忠の一族、稻毛重成、榛谷重朝などもその日に皆斬られた。重成は、はじめ、時政に媚びて、重忠を讒言して、斯様な酷い目に遭はせたが、結局彼も時政に殺されて終つた。一體、北條氏が、重忠を忌み嫌つたのは、久しい間のことであつた。抑も、重忠は、勇氣があつて、且つ部下も多かつた。頼朝に従ひ、いつも先鋒となつてゐた。そして、性質も忠義で、人情厚く、人と手柄を争はない。頼朝は深く、その人物に感心し、徳の高い男と知つて、死後の事まで、何

かと委託してゐた。それが北條氏の爲めに陥られて終つた。天下の者は、之を冤罪だとして、皆重忠に同情した。七月、畠山氏の領地を分けて將士を賞した。

**語釋** 其邑(武藏) ○長者(敦厚の) 菅谷(君子)

實朝在時政第。時政終謀弑實朝立朝雅。因聚兵事。覺閏月、政子遣諸將遷實朝於義時宅。兵皆從歸焉。義時終徙時政夫妻於北條里。令京師將士誅殺朝雅。當是時、諸豪傑千葉常胤、土肥實平等皆老死。佐佐木高綱、熊谷直實前後逃隱。獨北條氏專掌幕府事。而實朝仰其成。實朝性喜文事。師文章博士源仲章。學和歌于中納言藤原定家。而武技不及賴家。然賴家荒淫。至奪安達景盛妾。欲殺景盛。賴朝召呼諸將。不敢名之。賴家輒名之。平知康等。以技藝進。負寵凌人。將士憤怨。實朝爲人優柔。爲將士所愛。初年令將士各獻賴朝所下文書。爾時所授地頭不輒褫職。自賴朝賴家之世。數禁守護地頭干與吏務。侵取分外。至是又徵其下文。辨恩勳之殊。使結番追捕遣使者行管内。問吏民冤枉。然政權在於義時。實朝日夜與文士飲宴。耽溺歌



詠不問外事義時益專

**訓讀** 實朝、時政の第に在り。時政、終に實朝を弑し、朝雅を立てんと謀る。因つて兵を聚む。事覺る。閏月、政子、諸將を遣はし、實朝を義時の宅に遷す。兵皆從ひ歸す。義時、終に時政夫妻を北條里に徙し、京師の將士をして、朝雅を誅殺せしむ。是の時に當り、諸々の豪傑千葉常胤、土肥實平等、皆老死し、佐佐木高綱、熊谷直實は、前後逃げ隠れ、獨り北條氏のみ、専ら幕府の事を掌る。而して實朝、其の成を仰ぐ。實朝、性、文事を喜み、文章博士源仲章を師とし、和歌を中納言藤原定家に學ぶ。而して武技は賴家に及ばず。然れども賴家は荒淫、安達景盛の妾を奪ひ、景盛を殺さんと欲するに至る。賴朝、諸將を召呼するに、敢て之を名いはず。賴家は輒ち之を名いふ。平知康等、技藝を以て進み、寵を負んで人を凌ぐ。將士憤怨す。實朝、人となり優柔、將士の愛する所となる。初年に將士に令して、各賴朝下す所の文書を獻せしめ、爾の時授くる所の地頭は、輒く職を禡はず。賴朝賴家の世より、數守護、地頭の吏務に干與し、分外を侵取するを禁ず。是に至つて、又其の下文を徴し、恩勳の殊なるを辨じ、結番追捕せしむ。使者を遣はし、管内を行き、吏民の冤枉を問はしむ。然れども政權は義時に在り。實朝、日夜、文士と飲宴して、歌詠に耽溺し、外事を問はず。義時、益々専らなり。

**通釋** 實朝は、時政の屋敷に居た。時政は、遂に實朝を弑して、婿の朝雅を將軍に立てようと計畫した。その爲めに兵を聚めた。その事が露顯して終つた。閏月、政子は、諸將を遣はして、實朝を義時の屋敷に遷させた。諸將の兵は、皆實朝に付き従つた。義時は終に時政夫婦を北條の里に移し、一方京都の兵士に命じて朝雅を誅殺せしめた。この當時、創業の功臣である豪傑どものうち千葉常胤、土肥實平等は皆年取つて死んで終ひ。佐佐木高

綱、熊谷直實は相前後して、隱遁し、ただ北條氏だけが専ら幕府の事を切り盛りしてゐた。實朝はただそのなすまゝにして居た。實朝は生れつき文學の事が好きで、文章博士の源仲章を先生として勉強し、又和歌を中納言藤原定家に學んだ。而して武藝の方は兄の賴家には及ばなかつた。けれども、賴家は、酒色に耽溺し、安達景盛の妾を奪ひ、景盛を殺さうとまでしたことさへあつた。一體賴朝は諸將を呼ぶのに決して名前をいはなかつた。賴家は誰れを呼ぶときでも名前で呼んだ。鼓打ちの平知康は、技藝で召し出されたものだが、寵愛を待みにして人を押し凌ぐ行爲が多かつた。將士は憤り怨んで居た。これと打つて變つて、實朝は人物優しく、しとやかで、將士に愛せられて居た。將軍になつた初めの年に將士に命令して、賴朝が嘗て下した文書を各提出させ、其の時授けられた地頭は、滅多に其の職を取り上げないことにした。賴朝、賴家の頃から、守護地頭が本職以外に國司行政上の事務にまで容喙したり、きまり以上の租税を取つたりするものがあるのでそれを禁じたことは度々であつた。そこで實朝はその當時の下文を提出させて調査し、恩惠勳功の違ひを判別し、組合を作つて、罪人を追捕させることにした。又使者を遣はして、將軍直轄の土地を廻らせ、官吏や人民の無實の罪に陥つてゐるものを探訪させた。けれども政治の大權は、依然義時の手中に在つたのである。實朝は日夜、文士と酒を飲んで、宴會を催し、歌に耽溺して、その外の事は一切關係しなかつた。義時はそれを宜い事にして、益々氣儘に振舞つてゐた。

**語釋** 文章博士(文學を掌る官) ○平知康(鼓判) ○結番追捕(番組を拵へ、或る時期を限つて應番に交代して追捕する) ○外事(外職のこと、即ち政務)

建保元年、信濃、人泉親衡、奉故賴家子千壽丸、起兵討義時、使僧安念說諸將、諸將



多應者。義盛、二子義直、義重、姪胤長等與焉。次至千葉成胤。成胤不肯執安念、送之。義時令家臣金窪行親、安藤忠家鞠之、得狀遣兵執親衡。親衡、姓源、經基子滿快之遠孫也。有勇力、殺吏卒數十人而逃。千壽削髮匿京師。義直等就虜。是時、義盛在上總、馳歸面謁、請贖二子。義盛爲實朝所親信、特受命、與結城朝光、竝統衛兵。於是、聽其請、義盛大喜而出。且日、以其族九十八人、列幕府南庭、因大江廣元乞赦胤長。義時素忌其強宗、欲激而除之、命行親、忠家、縛胤長、過義盛前、而屬之吏、放陸奥。義盛慚忿、塞門不出。胤長第在便地、多欲得之者。義盛請實朝遣人守焉。義時請而奪之、逐守者、割與行親、忠家。

**訓讀** 建保元年、信濃の人泉親衡、故の頼家の子千壽丸を奉じ、兵を起して義時を討たんとす。僧安念をして諸將に説かしむ。諸將、應ずる者多し。義盛の二子義直、義重、姪胤長等、與る。次に千葉成胤に至る。成胤肯んぜず。安念を執へて、之を義時に送る。義時、家臣金窪行親、安藤忠家をして、之を鞠せしめ、狀を得たり。兵を遣はして親衡を執へしむ。親衡、姓は源、經基の子滿快の遠孫なり。勇力有り、吏卒數十人を殺して逃る。千壽、髮を削り京師に匿る。義直等、虜に就く。是の時、義盛、上總に在り、馳せ歸り面謁して、二子を贖はんと請ふ。義盛は

實朝の親信する所たり。特に命を受けて、結城朝光と、竝に衛兵を統ぶ。是に於て、其の請を聽す。義盛、大に喜んで出づ。且日、其の族九十八人を以て、幕府の南庭に列し、大江廣元に因つて、胤長を赦さんと請ふ。義時素より其の強宗を忌み、激して之を除かんと欲し、行親、忠家に命じ、胤長を縛し、義盛の前を過ぎて、之を吏に屬し、陸奥に放つ。義盛慚忿し、門を塞ぎて出でず。胤長の第、便地に在り。之を得んと欲する者多し。義盛、實朝に請うて、人を遣はして守らしむ。義時請うて之を奪ひ、守者を逐ひ、行親、忠家に割與す。

**通釋** 建保元年、信濃の人泉親衡は、故の頼家の子千壽丸を守り立てて、兵を起し、義時を討たうとした。安念といふ坊主をして、諸將を説いて廻らせた。之に應じた諸將が多かつた。義盛の二子義直、義重及び甥の胤長等も關係してゐた。次に、千葉成胤の處へ行つた。成胤は承知しなかつた。安念を捕へて義時の所へ送り届けた。義時は、家來の金窪行親・安藤忠家をして、之を調べさせ、すつかりその事情が分つた。そこで兵を遣はして、親衡を捕へさせた。この親衡は、姓は源氏、經基の子で、滿快の遠い子孫であつた。勇氣と力があつて、役人や兵卒數十人を殺して逃げた。千壽は、髮を剃つて京都に匿れた。義直等は捕へられた。この時、義盛は、その領分の上總に居つたが馳せ歸つて、實朝にお會ひして、自分の手柄で二人の子の罪を赦して貰ひ度いと願うた。元來義盛は、實朝に親しまれ信用されて居た。特別に命令を受けて、結城朝光と一緒に實朝の護衛兵を統御して居た。そんな譯で實朝は義盛の請を許した。義盛は非常に喜んで出て行つた。その翌日、一族九十八人を連れて幕府の南の庭に列び、大江廣元に頼んで胤長をも赦して貰ひ度いと乞うた。義時は、平素より和田の一族が勢の盛なのを嫌つてゐたので、此の際之を怒らせて、滅ぼして終はうと思ひ、行親・忠家に命じ、胤長を縛つて故らに義盛



の前を通過させ、役人に引き渡し、陸奥へ追放した。義盛は恥ぢ怒り、門を閉め切つて出なかつた。胤長の屋敷は都合のいい場所に在つた。それを得たがるものが多かつた。義盛は、實朝に請うて、人を遣つて、之を守らしめた。義時は、實朝に請うてこの屋敷を奪ひ取り、義盛方の番人を逐つばらひ、その屋敷を家來の行親と忠家の二人に分ち與へた。

語釋 建保(順徳天皇の年號) ○遠係(滿快九世の孫)

義盛大怒、遂欲滅北條氏。日夜會宗黨謀之。謀泄、幕府使者來問之。義盛陳謝無他。使者微見其子弟、閱兵狀、還報。有令徵兵、更遣使者、誚義盛。義盛乃對曰、「老夫受故將軍殊恩、豈敢謀反。獨兒輩憤義時專恣、欲往問狀。老夫諭之、而弗聽也。」遂以百五十騎、分爲三隊、分攻義時、廣元、第。而急赴幕府、欲取實朝。其族三浦義村、與弟胤義、約守北門。而意中變、走告義時。義時與廣元、自北門入。義盛隨圍之。三子義秀、排門而入、所向皆破。與足利義氏、遇、攫其甲袖。義氏鞭馬踰壕、袖斷。義秀與土屋義清、古郡保忠、俱奮擊。一府中皆辟易。有縱火者、烟焰滿天。義時、廣元、挾實朝、避之法華堂。接戰一晝夜。

義盛、大に怒り、遂に北條氏を滅さんと欲す。日夜、宗黨を會し之を謀る。謀泄る。幕府の使者來りて之を問ふ。義盛、他無きを陳謝す。使者、微に其の子弟、兵を閱する狀を見て、還り報す。令有り、兵を徵し、更に使者を遣はし、義盛を誚めしむ。義盛乃ち對て曰く、「老夫、故將軍の殊恩を受く。豈に敢て反を謀らんや。獨り兒輩、義時の專恣を憤り、往いて狀を問はん」と欲す。老夫、之を諭せども、聽かざるなり」と。遂に百五十騎を以て分つて三隊と爲し、分れて、義時、廣元の第を攻む。而して急に幕府に赴き、實朝を取らんと欲す。其の族三浦義村、弟胤義と、北門を守るを約す。意、中ごろ變じ、走つて義時に告ぐ。義時、廣元と北門より入る。義盛隨つて之を圍む。三子義秀、門を排いて入り、向ふ所皆破る。足利義氏と遇ひ其の甲袖を攫む。義氏、馬に鞭うちて濠を踰ゆ。袖斷つ。義秀、土屋義清、古郡保忠と俱に奮擊す。一府中皆辟易す。火を縱つ者有り、烟焰、天に滿つ。義時、廣元、實朝を挾んで、之を法華堂に避く。接戰すること一晝夜なり。

通釋 義盛は、非常に怒つて、遂に北條氏を滅さうと思つた。日夜、一族徒黨を集めて謀をめぐらした。その謀が泄れて終つた。幕府の使者がやつて来て、之を尋ねた。義盛は、別に悪心はないと辯解して謝まつた。使者がそれとなく、義盛の子弟が武器を取り調べて居るのを見て、還つて来て報告した。實朝は、命令を下して、兵士を召集し、更に使者を遣つて、義盛を責めさせた。そこで義盛は、對へて曰ふには「私は故將軍頼朝公の特別の恩寵を受けました。それでどうして謀叛など出来ませうぞ。ただ倅共が、義時の專横を憤り、義時の處へ押しかけて行き、其の譯を尋ねるといきり立つのであります。私は随分論しましたが中々承知しないのであります」と。遂に百五十騎をば、分けて三つの隊となし、三隊別々に一隊は義時の屋敷を、一隊は廣元の屋敷を



攻めた。そしてあとの一隊は、急いで幕府に行き、實朝をつれて来ようとした。義盛の一族の三浦義村は、弟の胤義と一緒に、幕府の北門を守り、義盛方に便宜を興へる約束をしてゐた。併し中途から心變りして走つて、之を義時に告げた。義時は廣元と一緒に、北門から幕府に入つて行つた。義盛は跡を追つて取り巻いた。第三子の義秀は、門を押し開いて攻め込み、打ち向ふ所皆破つた。足利義氏と出會つて、その鎧の袖を引つ掴んだ。義氏は馬に鞭をあてて堀を飛び踰えた。そのはづみに袖が切れた。義秀は、土屋義清・古郡保忠と俱に奮ひ撃つた。幕府の者共は、皆恐れ逃げた。さう斯うしてゐる内に誰か火をつけたものがあつて、烟焰が天に滿ち渡つた。義時と廣元とは、實朝をつれて法華堂に避難した。接戦すること一晝夜にも及んだ。

【語釋】使者(橋公) ○法華堂(頼朝の影堂)

黎明、義盛兵疲退軍前濱。會横山時兼舉族來援、得三千騎、軍復振。近國兵聞變來聚。義時召之、疑而不至。請實朝教書示之。乃至。既而義直戰死。義盛泣而氣沮。終爲江戶能範所射殺。七子皆死。義秀以五百人航海而逃。義時分和田氏邑以賞將士。二年六月、早實朝齋戒誦經。既而雨、減東國租稅。十一月、義盛遺臣奉千壽聚兵京師。事覺、大江氏卒攻殺之。十二月、實朝命僧修法會。曰、疇昔夢義盛率族群至我前。吾爲修其冥福也。

黎明、義盛の兵疲れ退き、前濱に軍す。會々横山時兼、族を擧げて來り援け、三千騎を得、軍復振ふ。近國の兵、變を聞き來り聚る。義時之を召す。疑ひて至らず。實朝の教書を請ひて、之に示す。乃ち至る。既にして義直戰死す。義盛泣きて氣沮む。終に江戶能範の射殺する所となる。七子皆死す。義秀五百人を以て海に航して逃る。義時、和田氏の邑を分ち以て將士を賞す。二年六月、早實朝、齋戒して經を誦す。既にして雨ふる。東國の租税を減す。十一月、義盛の遺臣、千壽を奉じて、兵を京師に聚む。事覺はる。大江氏の卒、之を攻殺す。十二月、實朝、僧に命じて法會を修む。曰く、「疇昔、義盛、族を率ゐて、我が前に群り至ると夢む。吾れ爲めに其の冥福を修むるなり」と。

【通釋】夜があけて、義盛の兵は疲れて退却し、由井が濱に陣取つた。其處へ横山時兼が、一族を全部つれて援けに來て呉れ、三千騎を得たので、義盛の軍は再び振つた。近國の兵士が變事を聞いて段々と聚つて來た。義時はこれ等の者を召した。所が疑つて來ない。そこで、實朝の書きつけを貰つて來て之を見せた。そこで初めて皆の者が集つて來た。其の中に義直は戰死した。義盛は、之を悲しんで泣いたので、士氣が沮喪して來た。終に江戶能範に射殺されて終つた。七人の倅も皆死んだ。ただ義秀は五百人を引きつれ、海を渡つて逃げ去つた。義時は和田氏の領地を分けて、將士を賞した。二年六月早があつた。實朝は物忌みして、お經を讀んだ。その中に雨が降つた。けれども窮情を察して東國地方の租税を減らした。十一月、義盛の殘つてゐた家來共が頼家の子千壽を守り立てて、兵を京都に召集した。所がその事件は發覺した。大江氏の士卒は攻めて之を殺した。十二月、實朝は、僧に命じて、法要を營んだ。曰ふのに「昨夜、義盛が一族の者を率ゐて予の前に群がり來た夢を見た。だ



から自分はその爲めに供養して後世の幸福を祈るのだ」と。

語釋 近國兵(會我中村、二) ○教書(將軍の命) ○義直(義盛の弟) ○七子(常盛、義氏、義直、義信、秀盛、義國)

先是、實朝已累叙正二位、任權中納言。六年、累遷至權大納言。三月、兼右近衛大將。大江廣元從容言曰、「將軍欲貽慶來裔、宜戒滿盈。蓋辭諸官、獨帶征夷將軍、及高年、然後求大將。實朝曰、「吾非不悅卿所言。然吾念源氏正統、縮於今日。不可慮子孫。吾欲飽取官職、以舉家聲。不暇慮子孫也。廣元無言而退。先是、宋佛工陳和卿來在。大和實朝召見之。和卿自稱知實朝前生。實朝遂欲如宋、命造巨船。既成、不可用。是歲、北條氏召故頼家子公曉、至自京師。用補鶴岡別當。公曉常憤父幽死、謂實朝父仇也。竊謀報復。稱有所祈、祈鶴岡祠者、千日。時鎌倉傳言、幕府有怪物、被婦人衣、行步如飛。千日、實朝任內大臣。十二月、進右大臣。」

訓讀 是より先き、實朝、已に累に正二位に叙せられ、權中納言に任ぜらる。六年、累遷して權大納言に至る。三月、右近衛大將を兼ね。大江廣元、從容として言つて曰く、「將軍、慶を來裔に貽さんと欲せば、宜しく滿盈を戒むべし。蓋そ諸官を辭し、獨り征夷將軍を帯び、高年に及びて、然る後に大將を求めざる」と。實朝曰く、「吾

れ卿の言ふ所を悦ばざるにあらず。然れども吾れ念ふに、源氏の正統は、今日に縮まる。子孫を慮る可からず。吾れ飽くまで官職を取り以て家聲を擧げんと欲す。子孫を慮るに暇あらざるなり」と。廣元、言無くして退く。是より先き、宋の佛工陳和卿、來つて大和に在り。實朝、召して之を見る。和卿自ら實朝の前生を知ると稱す。實朝、遂に宋に如かんと欲し、命じて巨船を造らしむ。既に成る。用ふべからず。是の歲、北條氏、故の頼家の子公曉を召し、京師より至らしむ。用ひて鶴岡の別當に補す。公曉、常に父の幽死を憤り、實朝を父の仇と謂ひ、竊に報復を謀る。祈る所有りと稱し、鶴岡の祠に祈ること千日。時に鎌倉傳へ言ふ、幕府に怪物有り、婦人の衣を被り、行步すること飛ぶが如しと。十月、實朝、內大臣に任ぜられ、十二月、右大臣に進めらる。

通釋 これより先き、既に實朝は官位が段々と進み、正二位に叙せられ、權中納言に任ぜられた。六年、累遷して權大納言になつた。三月に右近衛大將をも兼ねることとなつた。大江廣元は、ゆるく話かけていふには「貴方が慶を子孫にまで残さうとお思ひになるならば滿ち盈つることを戒められたが宜しい。なぜ諸々の官を辭して、ただ征夷大將軍の職だけを帯び、年を取つてから大將をお求めになりませぬか」と。實朝がいふのに「予は貴公の言ふところを成る程と思はないではない。しかし自分は思ふのに、源氏の正しい血統は私で行きつまつて終つた。そこで予は飽まで官職を取り、家の名聲を擧げたいと思つてゐるのである。子孫の事など今考へる暇はないのである」と。廣元は、一言もなく退出した。これより先き、宋國の佛師陳和卿といふ者が來朝して、大和に居た。實朝は召し寄せて、之に對面した。この和卿は、自ら實朝の前生を知つて居ると言ひ立てた。實朝は遂に宋まで行つて見たいと思ひ、命じて、大船を造らしめた。その中に出來上つた。けれども浮ばぬので役に立た



なかつた。この歳北條氏は、故の頼家の子公曉を呼び寄せ、京都から鎌倉に來らしめた。之を任用して、鶴岡の別當に補した。公曉は常に父頼家が修善寺で幽閉せられて死んだのを憤り、一圖に實朝を父の仇だと思ひ、ひそかに仇を報いようと謀つてゐた。祈り事があると曰つて、鶴岡の八幡に千日間祈つた。當時鎌倉で傳へ噂するには幕府に妖怪がゐて、女の着物を被つてゐて、その歩くことは、飛ぶがやうに早いと。十月、實朝内大臣に任ぜられ、十二月、右大臣に進められた。

語釋 佛工(佛像を作) ○前生(實朝は宋の育王山の長老で、和) ○不可用(由比ヶ濱に浮べたが、大)

承久元年正月、拜賀于鶴岡祠、ト二十七日戌時、將出廣元進謁曰、「臣平生未嘗出涙。今無故泣然。臣危疑焉。先大將落東大寺、衷甲自備。君宜倣焉。母輕舉也。」源仲章曰、「大臣大將不可衷甲。」廣元又請晝日行禮。仲章曰、「秉燭故事也。」實朝臨出、使秦公氏梳髮。拔髮一縷與之、晒曰、「吾遺物也。」公卿以下悉從。隨兵千騎。義時侍持劍焉。比入祠門、稱病作、授劍於仲章而歸。實朝乃悉屏隨兵、獨仲章從。儀畢、揖公卿降階。有一人、自階側跳出、揮刀斬實朝及仲章、持其首逃去。時方闇黑、内外騷擾。不知何人所爲。已而有大呼者曰、「吾公曉也。」報父仇矣。衆始知公曉所爲、圍其所居。

訓讀 承久元年正月、鶴岡の祠に拜賀せんとし、二十七日戌時をトす。將に出でんとす、廣元、進み謁して曰く、「臣、平生未だ嘗て涙を出さず。今、故無くして泣然たり。臣危疑す。先大將の東大寺を落するや、甲を衷して自ら備へたり。君宜しく倣ふべし。輕舉する毋れ」と。源仲章曰く、「大臣、大將は、甲を衷す可からず」と。廣元、又、晝日に禮を行はんと請ふ。仲章曰く、「燭を秉るは故事なり」と。實朝出づるに臨み、秦公氏をして髮を梳らしむ。髮一縷を抜きて之を與へ、晒つて曰く、「吾が遺物なり」と。公卿以下、悉く從ふ。隨兵千騎。義時、侍して劍を持つ。祠門に入る比、病作ると稱し、劍を仲章に授けて歸る。實朝乃ち悉く隨兵を屏け、獨り仲章のみ從ふ。儀畢りて、公卿に揖し階を降る。一人有り、階の側より跳り出で、刀を揮つて、實朝、及び仲章を斬り、其の首を持ちて逃れ去る。時方に闇黑、内外騷擾す。何人の爲す所なるかを知らず。已にして大に呼ぶ者有り、曰く、「吾は公曉なり。父の仇を報ず」と。衆、始めて公曉の爲す所なるを知り、其の居る所を圍む。

通釋 承久元年正月、鶴岡八幡宮で右大臣昇任の拜賀式を行ふこととなり、時刻は二十七日の戌の刻と取りきめた。愈よ出かけようとするとき、大江廣元が進み謁して曰ふには「私は平生涙を出したことはありません。今日譯なくほろ／＼涙が出ました。私は、危ぶみ不審がつて居ります。先きの右大將頼朝公が東大寺で落成の式を行はれましたとき、鎧を下着にして用心なされました。貴方も、之にお倣ひなされたら宜しいでせう。輕はづみなことをなさいませぬ」と。源仲章が曰ふのに「大臣大將は、鎧を着込んだりしてはならぬ」と。廣元は又夜を止めて晝間の中に儀式を行ふように願つた。仲章が曰ふのに「燭火を執つて行ふのが、むかしからの例である」と。實朝は出かける時に、秦公氏をして、髮を梳らした。その時髮毛一すぢを抜いて公氏に與へて、笑ひ



ながら曰ふには「これは遺物としてお前に與へる」と。京都から来た公卿以下の者は悉く従つて行つた。隨行の兵士も千騎からゐた。義時は傍につき添ひ、劍を持つて居た。八幡宮の門に入らうとする頃義時は急に病氣が起つたと曰ひ立て、劍を仲章にわたして歸つた。そこで、實朝は、隨兵を皆退け、ひとり、仲章だけがつき添つてゐた。儀式も済んで公卿に會釋をして、石段を下りた。何者か一人の男が、石段のもの蔭から跳り出で、刀を揮つて、實朝と仲章を斬り、其の首を持つて逃げ去つた。その時は眞暗で八幡宮の内外は大騒ぎが始まつた。けれども何者の爲業か分らない。その中に、大聲に呼んでゐるものがある、曰ふのに「吾こそは別當公曉であるぞ。父の仇を報いたのだ」と。そこで多勢の者は、はじめ、公曉がやつたのだと知り、彼の住んで居つた處を取り圍んだ。

語釋 承久(順德天皇)の年號。○戌時(午後八時) ○公卿(大納言藤原忠信、中納言藤原實氏等)

公曉提實朝首直赴備中某宅以食手不釋首三浦義村少子爲公曉弟子公曉因使使問計於義村義村給曰將以兵迎而告義時義時命速殺之義村乃遣長尾定景率力士五人赴之公曉望迎兵久之不至乃自踰祠後高阜如義村家途遇五人奮闘定景自傍斬其首送之義時公曉年十九實朝年二十八明日葬實朝不得首以所遺一髮代之源氏正統於此而絶

公曉、實朝の首を提げ、直に備中某の宅に赴き以て食す。手に首を釋せず。三浦義村の少子は公曉の弟子なり。公曉因つて使をして、計を義村に問はしむ。義村給いて曰く、「將に兵を以て迎へんとす」と。而して義時に告ぐ。義時命じて、速に之を殺さしむ。義村乃ち長尾定景を遣はし、力士五人を率ゐて之に赴かしむ。公曉、迎兵を望む。之を久しうして至らず。乃ち自ら祠後の高阜を踰えて、義村の家に向く。途に五人に遇つて奮闘す。定景、傍より其の首を斬り、之を義時に送る。公曉、年十九。實朝年二十八。明日、實朝を葬るに、首を得ず。遺す所の一髮を以て之に代ふ。源氏の正統、此に於て絶ゆ。

通釋 公曉は、實朝の首を片手に下げて、すたすた備中阿闍梨の宅に往つて、飯を食つた。その間も、手から首を離さなかつた。三浦義村の末つ子は、公曉の弟子になつてゐた。そこで、公曉は、使をやつて、義村に今後之處置について問はせた。義村は、之を欺いて曰ふのに「私は、兵士を連れて御迎ひに上ります」と。そして一方之を義時に告げた。義時は、早く之を殺せよと義村に命じた。そこで義村は、家來の長尾定景を遣はし、力士五人を率ゐて行かせた。公曉は出迎の兵がもう來るか來るか望んでゐた。中々やつて來ない。そこで、自身八幡宮の後の高い岡を踰えて、義村の家に行かうとした。途中で、五人の力士に出會ひ、大に奮闘した。定景は、横合ひから公曉の首を斬り、之を義時の所へ送り届けた。その時公曉は、年十九で、實朝は年二十八であつた。翌日、實朝を葬らうとしたが首が無い。それで、出かける時に遺した髮一すぢを以て、首に代へることにした。かくて源氏の正統の血すぢはこれで絶えて終つた。

語釋 備中某(備中阿闍梨は公曉後見の僧) ○義村小子(駒若丸)



**叙説** 本篇の主意は、頼朝の事業は其の父祖に基因してゐることを論じ、且つ彼は後世將軍が分限を越えて覬覦することのないように範を垂れ、其の功は父祖に勝ること述べたのである。

外史氏曰、余嘗踰函嶺望八州之野、北控奥羽、知源氏基業深且遠矣。

**訓讀** 外史氏曰く、余嘗て函嶺を踰え、八州の野、北、奥羽を控へたるを望み、源氏の基業の深く且つ遠きを知る。

**通釋** 外史氏が曰ふのに、自分は以前箱根山を踰えた時、其處から關八州の平野が北の方奥羽にまで連り續いてゐるのを望見して、成る程源氏は斯様な形勢の土地に據つてゐたのであるから、其の事業の基づく所が深く且つ遠大であつたのであることを知ることが出来た。

**語釋** 函嶺(箱根山)

**餘論** 以上第一段、全篇の大意で源氏の基業の深いことを掲げたのである。

世傳、八幡公臨終遺書其家曰、吾後世必有操天下之權者。雖信否未可知、非無其謂也。蓋我王化自西漸東、東之强悍難服、足以敵全國。雖中古鋤治、纔就條緒、叛服不常。每爲國患、而廟堂不以爲憂。蓋綱紀之弛、非一日也。相門爭寵、骨肉相軋、而不能制也。盜賊公行、劫公卿、焚宮闕、而不能禁也。則何暇恤邊疆哉。而夫貞任、家

衡等皆桀黠之才、足以乘而逞焉。微源氏父子、封豕長蛇、荐食上國、誰能拒之、其有大功德於天下如此。

**訓讀** 世に傳ふ。八幡公、終りに臨み、書を其の家に遺して曰く、「吾が後世、必ず天下の權を操る者有らん」と。信否未だ知る可からずと雖も、其の謂無きに非ざるなり。蓋し我が王化は、西より東に漸む。東の强悍にして服し難き、以て全國に敵するに足る。中古鋤治して、纔に條緒に就くと雖も、叛服常ならず。毎に國患を爲す。而して廟堂、以て憂と爲さず。蓋し綱紀の弛びたるは、一日に非ざるなり。相門龍を争ひ、骨肉相軋れども、而も制すること能はざるなり。盜賊公行し、公卿を劫かし、宮闕を焚けども、禁ずること能はざるなり。則ち何ぞ邊疆を恤ふるに暇あらんや。而して夫の貞任、家衡等皆桀黠の才、以て乘じて逞しうするに足れり。源氏の父子微かりせば、封豕長蛇荐りに上國を食するも、誰か能く之を拒がん。其の天下に大功德有ること、此くの如し。

**通釋** 世間で傳へる所に據ると八幡公義家が將に死なむとする時に遺書を其の家に殘して、死後のことを書きつけて曰ふには「吾が子孫に必ず天下の大權を把握するものがあるだらう」と。その遺言が誠か偽かはまだ分らないが至極尤ものことで決して、其の理のないことでもないのである。蓋し、我が皇室の徳化は、西から段々と東に進んでゐる。しかし、東方の人民は強くて勇氣があり、なかなか征服し難く、東國だけで、日本全國に匹敵出来る程である。中古時代に朝廷で東國の亂民を平げ治めて、やつとの事で秩序がついたけれども、しかし叛いたり、服したりして其の態度が定まらなかつた。それが爲め、いつも國家の患となつてゐた。しかし朝廷では一向に之を心配もされなかつた。思ふに朝廷政治の規律の弛んだのは、昨日今日のことではなかつたのである。實



際に於て當時、藤原氏は、君寵を争ひ、兄弟身内で唯み合つて居たが、朝廷では之を止めさせることも出来なかつた。又盜賊が公然と横行し、公卿衆を脅し、御所を焚いたりしたけれども、それとて禁ずることも出来なかつた。お藤元さへその有様であるのにどうして奥羽などの遠方まで氣にかけられる暇があらうか。その上あの貞任や家衡などは皆勝れて悪才のある人物であるので、かかる隙間につけ込んで遣りたい放題の事を爲すに十分であつたのである。若しも頼義・義家の父子がなかつたら大きな豕、長き蛇にも比べるべき悪徒貞任、家衡等は、次第に上方の國國に攻め來り蠶食した所で誰れが之を拒ぎ得るか。(誰れも拒ぎ得ないだらう。)そのやうに頼義義家は天下に對して大功勞があつたのである。

**語釋** 世傳(難太平記に見ゆ) ○中古鋤治(光仁、桓武の朝、紀古佐美、坂上田村麿を) ○骨肉相軋(兼家伊尹及び道兼、道隆の兄) ○劫三公卿(袴垂保輔が藤原季孝、大江匡) ○焚三宮闕(寛仁の際、賊藤原季を焚き、) ○封家長蛇(封は大、家長蛇は惡徒に比す。) ○上國(近の地をさす)

而朝廷酬功、不塞其什一。頼義遷任、適致困敝。義家官不過四位、衛尉子孫或以罪誅、或以謫逐。保平之亂、又鬪其骨肉、殘亡垂盡。何報施之倒也。天之福人、縮於父祖、則贏於子孫、固其所也。故源氏之福、大發於頼朝、遂得司天下之權。義家儻預睹之邪。

**訓讀** 而して朝廷、功に酬ゆる。其の什の一を塞がず。頼義、任に遷りて、適に困敝を致す。義家の官は四位の衛尉に過ぎず。子孫或は罪を以て誅せられ、或は謫を以て逐はる。保平の亂に又其の骨肉を鬪はしめ、殘亡し盡くるに垂んとす。何ぞ報施の倒なるや。天の人に福する、父祖に縮れば、則ち子孫に贏る、固より其の所なり。故に源氏の福は、大に頼朝に發し、遂に天下の權を司るを得たり。義家、儻くは預め之を睹たるか。

**通釋** しかるに、朝廷では、その功勞に酬ゆることは、その功の十分の一にも及ばぬ行賞をされた。頼義は、伊豫守に遷つて、私財を年貢に代へたりして手許不如意となり困窮した。又義家の官は正四位下右衛門尉に過ぎなかつた。加之その子孫、或は罪を以て誅せられ、或は流罪に處せられて都を逐はれたりした。保元平治の亂の時には、その親子兄弟の身内を鬪はせ、その一族は殆んど殺され滅び、系統が絶えんとした位であつた。何んといふ源氏の勞に報ゆることの顛倒して道にかなはなかつたことよ。しかし、天が人に幸福を與へるのは父祖に少ないときは必ず子孫に餘る程與へるものであることは、道理上然るべきことである。だから源氏の幸福は、頼朝の時になつて、大に發し、遂に天下の大權を司ることが出来るやうになつたのである。義家が斯様な遺言をしたといふのは、前以て之を見抜いて豫言でもしたのだらうか。

**語釋** 遷任(陸奥守から伊豫守) ○以罪誅(義家の子義) ○以謫逐(義家の子義國上) ○餘論(以上第二段、頼義義家は天下に功勞があつたが充分酬いられなかつた。併し餘慶を子孫に残して置いたことを論じたのである。)

然余嘗謂天下之權、歸源氏久矣。而源氏不自知也。頼義義家經略東北、捍護其民、



前後十有五年。而朝廷如不關知焉。及其奏功、爲將士請賞格、遷延不決、甚而目以私闘、停之官符、使其以私恩、喚咻之。則是朝廷自舍其征伐刑賞之柄、而付之源氏。遂令東北豪傑曰、寧背天子、勿負源氏。當是之時、使義家一唾手起、則函嶺以東、非朝廷之有、不必待賴朝也。而不敢失臣節、以終其身。乃所以貽慶子孫也。

**訓讀** 然れども余嘗に謂ふ、天下の權、源氏に歸すること久し。而して源氏自ら知らざるなりと。賴義、義家、東北を經略し、其の民を捍護すること前後十有五年なり。而して朝廷關り知らざるが如し。其の功を奏し、將士の爲めに賞格を請ふに及べば、遷延して決せず。甚だしきは目するに私闘を以てし、之が官符を停め、其をして私恩を以て之を喚咻せしむ。則ち是れ朝廷自ら其の征伐刑賞の柄を舍てて、之を源氏に付し、遂に東北の豪傑をして、寧ろ天子に背くも、源氏に負くこと勿れと曰はしむ。是の時に當り、義家をして一たび手に唾して起たしめば、則ち函嶺以東は、朝廷の有に非ざること、必ずしも賴朝を待たざるなり。而して敢て臣節を失はずして、以て其の身を終へたり。乃ち慶を子孫に貽す所以なり。

**通釋** 自分は常に考へてゐるのだが、天下の權が、源氏に歸してゐたことは久しい前からのことである。而も源氏は自らそれに氣がついて居なかつたのである。賴義、義家は東北地方の事を取り治め、亂賊を討ち平げ、その人民を庇ひ保護したこと、前後通じて十五年の長い間であつた。しかし、朝廷では一向關係のない様な風をしてゐられた。賴義が眞任を討平した功(前九年の役)を奏上して、將士の爲めに先例による賞與を請うた際に、延引してやるともやらないとも決定しなかつた。甚しいのは、義家の後三年の役をば、公けでない私事の關りだといつて、討賊の官符を義家に下すことを停め、結局賴義家をして、私財を投じて賞を與へ、恩を將士にかけ、るやうにさせて終つた。これは、取りも直さず、朝廷自らが征伐刑賞の權柄を棄てて之を源氏に與へたのであつて、遂に東北地方の豪傑をして「むしろ朝廷に叛いても源氏に背くな」とまで言はせるやうになつた。だからその當時義家が、野心を持つて一たび手に唾して兵を擧げたなら、箱根から以東、關東奥羽地方は、朝廷の領分でなくなつたらうから大權を得ることは何にも賴朝を待たなかつたのである。しかし、義家は何處までも臣下たる節義を失はないで、一生を終へたのである。だから幸福を子孫に残した譯なのである。

**語釋** 喚咻(音ウク、人に不剛を)  
かけて勉はること。

舊志稱、賴朝之逃伊東也、心私祝曰、願得主關東八國。否則猶領伊豆、得以報伊東氏。由是觀之、其初念不過割據一隅、而豪傑之素附焉者、爭爲之用、兵鋒所嚮、莫不克捷。又得廷臣抱才而不逞者、以輔其所不及、而會於國家綱紀極墮之時、碁布所謂素附者於七道、而坐制其命。是雖其智術有以劫持上下、籠絡一世、則亦時勢之自至焉。而其源實出於父祖之餘慶焉爾。

**訓讀** 舊志に稱す、賴朝の伊東を逃るや、心私に祝して曰く、「願はくは關東八國に主たるを得ん。否らざれば



ば則ち猶ほ伊豆を領し、以て伊東氏に報ゆるを得ん」と。是に由つて之を觀れば、其の初念は、一隅に割據するに過ぎず。而して豪傑の素附する者、争うて之が用を爲し、兵鋒の嚮ふ所、克捷せざるは莫し。又廷臣、才を抱いて而も逞しからざる者を得以て其の及ばざる所を輔く。而して國家の綱紀、極墮の時に會ひて、所謂素附する者を七道に基布し、而して坐ながら其の命を制す。是れ其の智術、以て上下を劫持し、一世を籠絡する有りとも、則ち亦時勢の自ら至れるなり。而して其の源は、實に父祖の餘慶に出づるのみ。

**通釋** 古い記録に書いてあるが、頼朝が伊東から逃げた時彼は心の中で祈つていふには「何卒して、關八州に主人公となりたいものだ。それが出来ねば伊豆だけでもいいから之を自分のものとし伊東祐親に怨を報いたいのだ」と。して觀れば、頼朝の初の志は、大したものでもなかつたので、ただ片すみに割據したいと思つたに過ぎない。所が平素から源氏に附いてゐた豪傑どもが先きを争つて頼朝の御用を勤め、それがために彼の兵鋒の向ふところ勝たざるはなしといふ勢だつた。又一面には朝廷の臣で、才を抱きながら、それを十分發揮することが出来ずにあつたものを手に入れて、自分等の及ばない所を輔佐せしめた。そこで國家の制度が極度に廢れて居た時に際會したので、前に言つた以前より源氏に服従してゐる家人どもを守護地頭として、七道六十六ヶ國に碁石のやうに配りならべ、自分は鎌倉にちつとしてゐて彼等を自由にしたのである。斯くなるといふのも頼朝の才智策略で上は朝廷、下は人民を威壓し、一代の人々を丸め込んだからではあるけれども、是れ時勢の自ら然らしむるものであつたのである。そして、その源を尋ねると矢張り父祖の殘した幸福が本になつてゐるのである。

**話釋** 舊志(詳末) ○廷臣(大江實元、三)

**餘論** 以上第三段、頼朝の事業は父祖の餘慶によることを論ず。

吾嘗聞之搢紳之家。鎌倉之興、大江三善之徒、有竊抱民部省簿記而往者。亦可以見人心所向矣。夫王家自放失其權、而莫之或收。民安所倚哉。於是王族之任其器者、代而操之、以宰天下、亦不得已之勢也。源氏以清和之胄、世勤勞王事、以至於頼朝經營艱苦、勦建大業、以致天下小康、而不敢僭踰、恭順其跡。又再傳乃亡。天未艾源氏之福也。

**訓讀** 吾れ嘗て搢紳の家(い)に聞けり。鎌倉の興(おこ)るや、大江、三善の徒(と)、竊(ひそ)かに民部省の簿記(ぼき)を抱きて往(ゆ)く者有り。亦(また)以て人心(じんしん)の向(む)ふ所(ところ)を見(み)る可(べ)し。夫(そ)れ王家(わが)自(みづか)ら其(その)權(けん)を放(はな)失(し)して、而(しか)も之(これ)を收(と)むることある莫(な)し。民安(たみやす)んぞ倚(よ)る所(ところ)あらんや。是(こゝ)に於(お)いて、王族(わうしゆ)の其(その)器(き)に任(まか)せらるる者(もの)、代(か)つて之(これ)を操(と)り、以(もつ)て天下(てんか)を宰(さ)する、亦(また)己(みづか)むを得(え)ざるの勢(いきほひ)なり。源氏(げんし)は清和(せいわ)の胄(むす)を以(もつ)て、世(よ)王事(わうじ)に勤(こ)勞(らう)し、以(もつ)て頼朝(らいちょう)に至(いた)り。經營(けいぎやう)艱(かん)苦(く)して大業(たいげふ)を勦(きり)建(た)し、以(もつ)て天下(てんか)の小康(せうかう)を致(いた)す。而(しか)して敢(あへ)て僭(けん)踰(ゆう)せず、其(その)跡(あと)を恭(こう)順(じゆん)にす。又(また)再傳(さいでん)して乃(すなは)ち亡(な)ぶ。天(あま)未(いま)だ源氏(げんし)の福(ふく)を艾(い)さざるなり。

**通釋** 私(わたくし)は嘗(かつ)て、公卿(くけい)の家(い)で次(つぎ)の話を聞(き)いたことがある。それは鎌倉幕府(かまくらばくふ)が起(おこ)つた時(とき)のこと、大江、三善の輩(たがひ)がこつそり民部省(みんぶしやう)の帳簿(ちやうぼ)をかかへて鎌倉(かまくら)へ往(い)つたといふことである。朝臣(てうしん)でさへがすでに幕府(ばくふ)に心(こゝろ)をよせて赴(き)く程(ほど)であるから、これを以(もつ)ても、當時(たうじ)の人心(じんしん)の歸趨(ききう)するところを見(み)ることが出来る。それ皇室(こうしやう)が御自分(ごじぶん)で政治(せいぢ)の



大權を失はれ而も之を回收することをされぬ。それでは人民は何處に倚る所があるか。倚る所がないではないか。そこで源氏のやうな皇室の血統の者で政治の器量十分なものか天子に代つて、この大權を操り、そして天下を切り盛りするのは、亦已むを得ない形勢である。源氏は清和天皇の末孫で代天子の事に勤め勵んで頼朝の代になつたのである。頼朝は經營、艱難、苦辛して幕府創立の大事業を始め、一時天下の安穩を來すに至つたのである。それでゐて、決して僭越なこともなく、そのやることを見ると、恭しく從順で朝廷を尊んでゐた。併し又頼朝から二代傳はつて實朝となつて亡んで終つた。天はまだ源氏に幸福を十分授け盡さなかつた。

**語釋** 摺紳(摺は挿む義、紳は大帶、笏を挿み大帶を垂れる) ○民部省(國內の土地、人民の圖) ○經營(營む、はかり)

是以足利氏・新田氏、皆以清和之源、更起宰天下、而皆以上將代操國權、以服事天子。莫非襲頼朝之故者、則是頼朝爲天下萬世、創不得已之事、以立不可踰之限、而君臣之際、兩得其宜也。不然、焉知莽操懿卓不接踵我國哉。雖曰頼朝有功德於天下、勝其父祖、可也。

**訓讀** 是を以て、足利氏、新田氏、皆清和の源を以て、更起つて天下を宰す。而して皆上將を以て、代つて國權を操り、以て天子に服事す。頼朝の故を襲ぐに非ざるもの莫し。則ち是れ頼朝、天下萬世の爲めに、已むを得ざるの事を創めて以て踰ゆ可からざるの限を立つ。而して君臣の際、兩ながら其の宜しきを得たるなり。然ら

ざれば、焉んぞ莽操懿卓、踵を我が國に接せざるを知らんや。頼朝、天下に功德あること、其の父祖に勝ると曰ふと雖も、可なり。

**通釋** そんな譯で、足利氏、新田氏は、皆清和源氏の流で、かはるゝ起つて、天下を主宰した。皆上將軍の地位で天子に代つて、國家の大權を操り行ひ、どこ迄も天子に服従し事へた。これ等の仕方は皆頼朝が昔やつてゐる仕方で、それを皆繼いでやつたのである。して見れば、頼朝は、天下萬世の爲めに、已むを得ない事(霸政)を始め、幕府を起したのであるが、一面には又、決して臣下として踰えてならない分限を確立したのである。斯くて天子將軍双方の間柄は都合よく治まつて行つたのである。若し頼朝が、そうでなく、名分を亂し僭越な行があつたとすれば、王莽・曹操・司馬懿・董卓といふやうな亂臣賊子が繼いで、我が日本にも出たかも知れないのである。然らば、頼朝の功のあることは、その父祖頼義義家に勝るといつても決して不可なる所はないのである。

**語釋** 莽操懿卓(王莽は前漢の天下を奪ひ、曹操は後漢の天下を奪ひ、司馬懿は魏の天下を奪ひ、董卓は後漢の天下を亂す) ○接踵(前のくひすに接し引)

**餘論** 以上第四段、頼朝は天子に代つて政治し而も君臣の分を失はず、後世に其の範を垂れたことは父祖の功に勝ることを述べ、尙ほ足利、新田に餘慶を残すことをいふ。



# 日本外史新釋 卷四

## 源氏後記

### 北條氏

**叙説** 北條氏の專横は朝廷に缺くる所あつたことが關係してゐると、親房の論を掲げて確かめたのである。外史氏曰、北條氏之事、吾不忍言之也。而諸叙其事晦澁不闕。亦有疑於文飾者。獨源親房之論頗可取信云。

**訓讀** 外史氏曰く、北條氏の事、吾れ之を言ふに忍びざるなり。而して諸々の其の事を叙するもの、晦澁にして闕ならず。亦文飾に疑はしき者あり。獨り源親房の論、頗る信を取るべしと云ふ。

**通釋** 外史氏が曰ふのに、北條氏の事蹟は餘りひどいことをやつてゐるので、云ふに堪へないのである。そして其の事蹟を述べた多くの書物も、文意が暗く、澁滞してゐて明瞭を缺いてゐる。亦中には文章を立派にする爲めに書き立ててゐる疑のあるものもある。ただ源親房の神皇正統記の説は可成り信用することの出来るもの



だといふことである。

**語釋** 不忍言北條氏を咎めんと欲すれば、先づ朝廷を咎めざるを得ない、だから言ふに忍びずであるといふ説があるが ○親房之論(神正統記廢帝の條の論と)

**餘論** 以上第一段「親房卿の論の信すべきことを叙す。」

其論曰、源氏以武臣掌握天下、朝廷蓋不能平。況其後嗣既絶、寡妻陪隸、繼當其家。欲乘此時而斃之、以復舊權、似也。雖然、王綱之衰久矣。賴朝奮一臂、以平其亂。雖朝廷不復其舊、而民庶息肩、非有德政、足以勝之、則安克斃之。縱使克斃之、民之不安、天豈與之。王者之師、必加有罪。賴朝陞高官、管重職、皆出法皇之允裁、非私竊之也。北條氏以其外家、久司其權、未嘗失人望。非有顯然之罪也。而欲遽加之誅、是朝廷未爲無過。而北條氏又不可比之反賊、獲利者也。

**訓讀** 其の論に曰く、源氏、武臣を以て天下を掌握す。朝廷、蓋し平かなる能はず。況んや其の後嗣、既に絶え、寡妻、陪隸繼いで其の家に當るをや。此の時に乘じて、之を斃し、以て舊權を復さんと欲するは、似たり。然りと雖も、王綱の衰へたる久し。賴朝、一臂を奮つて、以て其の亂を平ぐ。朝廷未だ其の舊に復せずと雖も、而れども民庶、肩を息んず。德政の以て之に勝るに足る有るに非ざれば、則ち安んぞ克く之を斃さん。縱ひ克く

之を斃すも、民の安んぜざる、天豈に之を與んへや。王者の師は、必ず有罪に加ふ。賴朝、高官に陞り、重職を管する。皆法皇の允裁に出で、之を私竊せるに非ざるなり。北條氏、其の外家を以て、久しく其の權を司り、未だ嘗て人望を失はず。顯然の罪あるに非ざるなり。而して遽に之に誅を加へんと欲す。是れ朝廷未だ過なしと爲さず。而して北條氏は、又之を反賊の利を獲る者に比す可からざるなり。

**通釋** その親房の論は次のやうである。曰く「源氏は、武臣で以て天下の政權を握つてゐた。朝廷では恐らく不平に堪へなかつたことであらう。まして、源氏の跡が實朝で絶えたにも拘はらず、後家の政子や、又家來の義時が引きつづき、其の家の事を引き受けてやつてゐたので、尙更らのこと不平で堪まらなかつたことであらう。だから、この時を逃さず、彼等を倒し、昔の權利を恢復しよう」と(承久の役)なされたのは尤もの話である。しかし、何んといつても長い間朝廷政治の規律は衰へ亂れてゐたのである。賴朝は一と腕振つて、その亂を平らげたのである。其の頃朝廷では政權を其の昔通りに取り返しになることはまだ出来なかつたけれども、一般の人民は肩を休めて、賴朝の政治に安心したのである。だから朝廷の惠のある。政治が源氏以上のものでなかつたら、どうして、よく鎌倉を斃すことが出来ようぞ。よし之を斃したとしても、人民が其の政治に安堵しない以上は、天は如何でか之を許さう、許しはせぬ。一體天子の師は必ず罪のあるものに加へられるのである。賴朝が、高官に陞り重職を掌つてゐたのは皆、後白河法皇の御許しを経てゐるので、賴朝が之を勝手に盗んだのではない。又北條氏は、源氏の外戚といふので、長い間、その實權を執つてゐたが、未だ一度として人望を失つたことはなかつた。だから、瞭きりしたこれといふ罪があつた譯ではないのである。それを、無理に北條氏に、誅を加へようと



されたのである。これでは、朝廷に過がないとは云へないことになる。そして又實際に、北條氏をば、利益を獲ようとする謀叛人と、比べることは出来ないものである。

**語釋** 乘此時(後嗣絶算略) ○奮一臂(一臂折りす) ○息肩(一と息入れ) ○高官(權大納言兼右近衛大將) ○重職(征夷大將軍)

**餘論** 神皇正統記廢帝の條に「扱もその世の亂を思ふに、誠に末の世には迷ふ心もありぬべく、又下の上をしのぐ端ともなりぬべし。そのいはれをよく辨へらるべき事に侍り。頼朝勳功は昔より類なき程なれど、偏に天下を掌にせしかば、君としてやすからず思し召しけるも、理なり。況やその跡絶えて、後室の尼公陪臣の義時が世になりぬれば、かれの跡を削りて、御心のままにせらるべしと云ふも、一應のいひなきにあらず。然れども、白河鳥羽の御代のころより、政道の古き姿やうやう衰へ、後白河の御時、兵革起りて姦臣世を亂り、天下の民ほとく塗炭に落ちにき。頼朝一臂を振ひてその亂を平らげたり。王室は古きにかへるまでなかりしかど、九重の塵もをさまり、萬民の肩もやすまりぬ。上下堵を安くし、東より西より。その徳に服せしかば、實朝なくなりても背く者ありとは聞えず。これにまさる程の徳政なくして、いかでたやすく覆へざるべき。たとひ又失はれぬべくとも、民やすかるまじくば、上天よもくみし給はじ。次に王者の師といふは、科あるを討じて、疵なきをほろぼさず。頼朝高官に昇り、守護の職を給ふ。これ皆法皇の勅裁なり。私に盗めりとは定めがたし。後室その跡を計らひ、義時久しく彼が權をとりて、人望に背かざりしかば、下には未だ疵ありといふべからず。一往のいはればかりにて追討せられんは、上の御科とや申すべき。謀叛起したる朝敵の利を得たるには、比量せられがたし云々」と。

夫レ以テ頼朝之業ニ而猶不能過ニ二世北條氏乃以陪臣執國命奕世累葉是豈偶然哉蓋義時非有才德過人也泰時繼之修立法專操正直不獨不踰己之分戒飭親族及諸將士莫敢規望高爵至其子孫能守其法不敢失墜雖其政漸衰卒至於亡而得傳之七世之久亦可謂無憾矣大凡以保平以來之亂而不有若頼朝有若泰時則六十州之民何所底止不詳於此而特稱皇威之衰武臣之專者謬矣

**訓讀** 夫れ頼朝の業を以てして而かも、猶ほ二世を過ぐる能はず。北條氏は乃ち陪臣を以て國命を執り、奕世累葉、是れ豈に偶然ならんや。蓋し義時、才徳、人に過ぐる有るに非ざるなり。泰時、之を繼いで、政を修め法を立て、専ら正直を操る。獨り己が分を踰えざるのみならず、親族及び諸將士を戒飭し、敢て高爵を規望する莫らしむ。其の子孫に至りても、能く其の法を守り、敢て失墜せず。其の政漸く衰へ、卒に亡ぶるに至ると雖も、而れども之を七世の久しきに傳ふるを得たれば、亦憾なしと謂ふべし。大凡そ保平以來の亂を以てして、頼朝の若き有り、泰時の若き有らざれば、則ち六十州の民、何くに底止する所かあらん。此を詳にせずして、特り皇威の衰、武臣の專を稱するは謬れりと。

**通釋** 夫れ頼朝程の功業を立てて、なほ二世以上續くことが出来なかつた。北條氏は、朝廷から見れば、又家來の身分で、國家の政權を握り七代も續いたのは、決して譯のない事ではなかつた。思ふに、義時は人に過ぎた



才德を持つてゐた男ではなかつた。その倅の泰時が繼いで執權となつてから、政治を整頓し、法度を確立し、専ら正直を旨とした。獨り自分の分限を踰えた行をせぬ計りでなく、自分の親族及び諸將士をも戒めて、決して高位高官を望むことのないようにした。泰時の子孫も能く泰時の定めた法を守り、決して之を失ふことをしなかつた。その政治が、だんだん衰へて、終に滅んで終つたが、併し七代の長い間續くことが出来たのであるから、亦遺憾でもなからう。凡そ保元平治以來あれ程の戦亂があると、頼朝のやうな、又泰時のやうな人物でも出なかつたならば、六十州の人民はどこまで憔悴したか知れたものではない。その所の道理を考へないで、ただ天朝の威力の衰へたことと、武臣の專横なことを、かれこれ言つて見た所で始まらないのである」と。

語釋 二世(頼朝、實朝) 〇七世(時政、時宗、時氏、經時) 〇底止(いたり止)

餘論 神皇正統記後嵯峨院の條に「その主たりし頼朝すら二世をば過ぎず。義時いかなる果報にか、はからざる家業を始めて、兵馬の權をとれりし。ためしまれなる事にや。されど殊なる才徳は聞えず。又大名の下に誇る心や有りけん、中二年計ぞありし、身まかりしかど、かの泰時相つぎて徳政を先とし、法式を堅くす。己が分をはかるのみならず、親族並びにあらゆる武士までもいまして、高官高位を望む者なかりき。その政次第のままに衰へ、終に滅びぬるは天命の終る姿なり。七代までたもてるこそかれが餘薫なれば、恨むる所なしといひつべし。凡そ保元平治より以來の亂りがはしさに、頼朝といふ人もなく、泰時といふものもなからましかば、日本國の人民いかなりなまし。このいはれをよくしらぬ人は、故もなく皇威の衰へ、武備のかちにけると思へるは誤なり云々」と。

以上第二段、親房の論を掲ぐ。

外史氏曰、吾讀親房之論、而悲其意焉。其亦出於不得已。而告君之體、宜如此爾。後之君子、因其言而詳其事、可也。蓋源氏之嗣既絶、藤原頼經爲征夷大將軍、其子頼嗣襲職。既而宗尊親王往代之、傳之其子惟康。久明親王又往代之、傳之其子守邦。而兵馬之政、每在於北條氏。故凡事皆不得係之北條氏。

訓讀 外史氏曰く、吾れ親房の論を讀みて、其の意を悲しむ。其れ亦已むを得ざるに出づ。而して君に告ぐるの體、宜しく此くの如くなるべきのみ。後の君子、其の言に因りて其の事を詳にせば、可なり。蓋し源氏の嗣既に絶え、藤原頼經、征夷大將軍となり、其の子頼嗣職を襲ぐ。既にして宗尊親王、往いて之に代り、之を其の子惟康に傳ふ。久明親王、又往いて之に代り、之を其の子守邦に傳ふ。而して兵馬の政は、毎に北條氏に在り、故に凡そ事、皆、之を北條氏に係げざるを得ず。

通釋 外史氏がいふに、自分は上に擧げた親房の論を讀んで、親房が斯様なことをのべたその心事を悲しむのである。この論のあるのも亦已むに止まれぬ事情からのことである。而して天子に申上げるのにはこの論のやうに彼を揚げて是を抑へる書き方をなすべきである。後の君子は、親房の論によつて、その事實を詳にしたならば宜からう。思ふに源氏の血統はすでに絶えて、藤原頼經が征夷大將軍となり、その子の頼嗣が職をついだ。



その中に宗尊親王が京都から往かれて之に代り、其の職を其の子惟康親王に傳へられた。それから久明親王が又往かれて之に代り、之を其の子守邦親王に傳へられた。併し兵馬の政は、いつも、北條氏の手中に在つた。だから、すべての事は皆北條氏に結びつけて書かない譯に行かぬのである。

**語釋** 告君之體(神皇正統記はもと天子の御體に入れる爲めに作られたものであるからかくいつたのである。)

**餘論** 以上第三段、親房が覇政を已むを得ざるものとして論じたことをいひ、次に將軍頼經以下を北條氏の條下に記載した理由を叙ぶ。

北條氏出於平貞盛貞盛七世之裔時政其父曰時家時家父時方養於祖父直方直方父維時維時父即貞盛次子常陸介維將也維將後三世始與源氏婚子孫世居伊豆北條因氏焉北條氏以豪族世屬源氏源義朝與平清盛戰京師敗績宗黨死亡略盡義朝子頼朝被執宥死流于伊豆時政以清盛命與州人伊東祐親並監護之頼朝四世祖義家樹恩威於東國即直方女所生以故時政頗屬意於頼朝頼朝初寄伊東氏通其女生男女之繼母告之祐親祐親懼平氏疑已投其男於水嫁女於江間某遂圖頼朝頼朝逃依北條氏

**訓讀** 北條氏は平貞盛より出づ。貞盛七世の裔は時政、其の父を時家と曰ふ。時家の父時方は、祖父直方に養はる。直方の父は維時、維時の父は即ち貞盛の次子、常陸介維將なり。維將の後三世、始めて源氏と婚す。子孫、世々伊豆の北條に居る。因つて氏とす。北條氏、豪族を以て、世々源氏に屬す。源義朝、平清盛と、京師に戦ひ、敗績し、宗黨死亡して略ぼ盡く。義朝の子頼朝執へらる。死を宥され、伊豆に流さる。時政、清盛の命を以て、州人伊東祐親と、並に之を監護す。頼朝四世の祖義家、恩威を東國に樹つ。即ち直方の女の生む所なり。故を以て、時政、頗る意を頼朝に屬す。頼朝、初め伊東氏に依り、其の女に通じ、男を生む。女の繼母、之を祐親に告ぐ。祐親平氏の己を疑ふを懼れ、其の男を水に投じ、女を江間某に嫁し、遂に頼朝を圖る。頼朝逃れて、北條氏に依る。

**通釋** 北條氏は、平貞盛から出た。貞盛の七代の後が時政で、その時政の父は時家と曰つた。時家の父時方は祖父の直方に養はれたのである。直方の父は維時で、維時の父は即ち貞盛の次子常陸介維將である。維將から後、三代目の時に始めて源氏と縁組したのである。その子孫は、代々伊豆の北條に居つた。そこでその地名を取つて氏とした。北條氏は豪族であつて、代々源氏に附屬して居た。源義朝が平治の亂で平清盛と京都で戦ひ大に負け、その一族郎黨は死んで、居なくなつた。義朝の子頼朝も捕へられた。所が死を宥されて伊豆に流された。時政は、清盛の命令で同國の人伊東祐親と一緒に、之を監督し守つて居た。頼朝の四代前の先祖に當る義家は東國方面に恩徳威光を植ゑつけて置いた。この義家こそは即ち時政の先祖の直方の娘が生んだ子である。そんな譯で時政は餘程心を頼朝に寄せてゐた。頼朝は初め伊東氏にたよつてゐたが、其處の娘と密通して男の子を生んだ。



娘の繼母が感づいて、之を祐親に告げて置いた。祐親は平氏が自分を疑ひはせぬかと恐れて、その男の子を水中へ投げ入れて殺し、又娘は改めて江間某の處へ片付け、遂に頼朝を殺さうと計畫した。頼朝は其處を逃げて、北條氏にたよつた。

**語釋** 七世(貞盛、維時、直方、維) ○維將三世(直方の父維時は實は維將の子にして、祖父貞盛の子となる。だから實際には) ○四世祖(義家、義親、爲義、義朝、頼朝と五世なれど) ○江間某(江間小) (も義親は相續しなかつたから算しない。)

久之、問人曰、「聞時政多女。孰尤美。」曰、「長美。次否。否者後妻出也。」頼朝懲伊東氏、欲通次女、作書、託僕安達盛長、致焉。盛長竊慮次女無貌、頼朝情好不終、徒足階禍也。更作書、致於長女。前一夕、次女夢鳩銜金函、至覺語之。其姊心動曰、「吾當買妹夢。乃與妹以其粧鏡。曰、「薄以償直。」且日得書、遂通之。情好日密。女名政子。時年二十一。

**訓讀** 之を久しうして、人に問うて曰く、「聞く、時政、女多しと。孰れが尤も美なる」と。曰く「長は美、次は否なり。否なるものは後妻の出なり」と。頼朝伊東氏に懲りて、次女に通ぜんと欲し、書を作り、僕安達盛長に託して致さしむ。盛長、竊に次女は貌なく、頼朝の情好終らず、徒に禍を階するに足ると慮りて、更に書を作り、長女に致す。前一夕、次女、鳩、金函を銜みて至ると夢み、覺めて之を其の姉に語る。姉心動きて曰く、「吾れ當に、妹の夢を買ふべし」と。乃ち妹に與ふるに、其の粧鏡を以てす。曰く、「薄か以て直を償ふ」と。

且日、書を得て遂に之に通ず。情好日に密なり。女、名は政子、時に年二十一。

**通釋** しばらく経つて頼朝は、人に尋ねて曰ふには「聞く所によると時政には娘が澤山あるさうだ。どれが一番綺麗なのだ」と。その人が答へて曰ふには「一番上の娘は美しいが、二番目のは不潔致です。併しその綺麗でない方は後妻の腹に出来たものであります」と。頼朝は、伊東氏で、先妻の娘に通じ、繼母から酷い目に逢はされたのに懲り／＼してゐるので、次女に密通しようと思ひ、艶書を作り、下僕の安達盛長に頼んで届けさせた。盛長はひそかに、次女は不潔致であるから、頼朝が末長く添ひ遂げるには難かしい、それでは却て禍に至る橋渡しをする様なものであると思つたので、別に艶書を拵へて長女の方へ届けた。その前の晩に、次女は鳩が黄金の箱を口にくはへて來た夢を見たので、覺めて後、その話を姉にした。姉は胸に動悸が起つて、曰ふには「妾はそなたの夢を買ひたいものぢや」と。そこで、妹に化粧鏡を與へた。そして曰ふには「少いがこれで夢のお代を拂ひます」と。その翌日、頼朝の艶書を得て、遂に之と密通した。その仲が日に日に密になつて來た。この女の名は政子といひ、その時、年は二十一であつた。

**語釋** 多レ女(順十一人) ○後妻(牧) ○懲伊東氏(前) ○粧鏡(唐鏡、北條家に代々傳つた寶物で、時政は政子を愛して與へてゐた。)

是時、時政役於京師、役滿而歸。路遇平兼隆。兼隆清盛族人、爲伊豆目代者。時政與偕歸、許以政子妻之。已聞其與頼朝私、且驚且喜。而難違兼隆約、則爲不知、嫁於兼隆。其夜雨甚。政子出奔、匿伊豆山。與頼朝俱居焉。兼隆索之、不得。時政素器頼朝、



且思其高祖事至是陽怒而陰益厚之賴朝亦謂時政謀慮可倚深相結託。

**訓讀** 是の時、時政、京師に役し、役滿ちて歸る。路に平兼隆に遇ふ。兼隆は清盛の族人にして、伊豆の目代と爲れる者なり。時政與に偕に歸り、政子を以て之に妻はさんことを許す。已にして、其の賴朝と私すると聞き、目驚き、且喜ぶ。而れども兼隆の約に違ふを難かり、則ち知らざる爲して兼隆に嫁す。其の夜、雨甚だし。政子、出奔して伊豆山に匿れ、賴朝と俱に居る。兼隆、之を索むれども得ず。時政、素より賴朝を器とし、且其の高祖の事を思ひ、是に至つて、陽に怒りて、陰に益之を厚くす。賴朝も亦、時政の謀慮倚る可しと謂ひ、深く相結託す。

**通釋** その時、時政は、京都に役勤めで行つてゐたが、その役も済んで、伊豆へ還つて来た。途中で平兼隆に遭つた。兼隆は、清盛の一族で當時伊豆の目代を務めて居た者である。時政は道づれになつて一緒に歸り、政子を兼隆に妻はすことを許した。歸つて来て、政子が賴朝と密通して居ることを聞き、一面には驚いたが、一面には喜んだ。しかし兼隆に約束したのを違へるのを心苦しく思ひ、自分は何も知らぬ態にして、政子を兼隆に片附けることにした。その夜、雨がひどく降つた。政子は、家を抜け出し伊豆山に匿れ賴朝と同居してゐた。兼隆は、政子をさがしたが見當らなかつた。時政は平素から賴朝を器量のある男と思ひ、それにその高祖が縁組したことなどを考へて、此の時も表面では、賴朝の爲業を怒り、陰では益々手厚くしてやつた。賴朝も亦、時政の謀に富んで、考深いのを恃になると考へ互に深く結び合つて居た。

**語釋** 伊豆山(伊豆縣現頭座の所) ○高祖(方直)

治承四年、以仁王討平氏令至賴朝先示之時政遂發東國家人至者頗多賴朝輒延之別室曰爲我努力人人各自以爲賴朝特厚己也而至其陰謀獨時政得知之八月時政率佐佐木經高等八十五騎夜襲平兼隆斬之遂糾伊豆相模豪傑以擁賴朝據石橋山令政子居守賴朝與大庭景親戰而敗走時政疲而後加藤景廉狩野祐茂堀親家小山實政等請從焉時政揮之令從賴朝而自之甲斐欲發其諸源長子宗時至平井郷爲伊東氏兵所圍中箭死逮夜時政遇賴朝于杉山箱根別當行實素善賴朝聞其敗使弟永實來餽餉先見時政時政給曰大將既死矣永實曰子疑吾歟大將而死子豈生存者時政晒使見賴朝賴朝乃匿箱根令時政及其次子義時如甲斐而自走土肥使土肥遠平存問政子航抵獵島

**訓讀** 治承四年、以仁王、平氏を討つ令至る。賴朝、先づ之を時政に示し、遂に東國の家人を發す。家人至る者、頗る多し。賴朝、輒ち之を別室に延いて曰く、「我が爲めに努力せよ」と。人人、各自自ら以爲へらく、賴朝、特に己に厚うするなり」と。而して其の陰謀に至りては、獨り時政のみ之を知るを得たり。八月、時政、佐佐木經高等八十五騎を率ゐ、夜、平兼隆を襲うて、之を斬り、遂に伊豆、相模の豪傑を糾し以て賴朝を擁して、



石橋山に據り、政子をして居守せしむ。頼朝、大庭景親と戦ひて、敗走す。時政疲れて後る。加藤景廉・狩野祐茂、堀親家・小山實政等、従はんと請ふ。時政、之を揮して、頼朝に従はしめ、而して自ら甲斐に之き、其の諸源を發せんと欲す。長子宗時、平井郷に至り、伊東氏の兵の圍む所と爲り、箭に中りて死す。夜に逮んで、時政、頼朝に杉山に遇ふ。箱根の別當行實、素より頼朝に善し。其の敗を聞き、弟永實をして、來りて餉を餽らしむ。先づ時政を見る。時政給いて曰く、「大將既に死せり」と。永實曰く、「子、吾を疑ふか。大將にして死せば、子、豈に生存する者ならんや」と。時政晒ひ、頼朝に見えしむ。頼朝、乃ち箱根に匿る。時政及び其の次子義時をして甲斐に如かしめ、而して自ら土肥に走り、土肥遠平をして、政子を存問せしめ、航して獵島に抵る。

**通釋** 治承四年、以仁王の、平氏を討てよといふ令旨がやつて來た。頼朝は、先づ之を時政に見せ、遂に關東の家人どもを徵發した。家人でやつて來る者が、随分多かつた。頼朝は一人々々これを、別室に呼び込んで曰ふには、「私の爲めに、どうか骨折つて呉れよ」と、人々は銘々、頼朝が、自分に對して特別丁寧な扱ひをしたのであると思つた。併し、その祕密の計畫はただ時政だけが知つてゐるのであつた。八月、時政は佐々木經高等八十五騎を率ゐて夜、平兼隆を襲うて斬り殺し、遂に伊豆相模の豪族を集め寄せ、頼朝を守り立てて、石橋山に立て籠り、政子は北條で留守をさせて置いた。頼朝は大庭景親と戦ひ敗れて逃げた。時政は疲れて後れた。加藤景廉・狩野祐茂・堀親家・小山實政等が皆お供をしたと願つた。時政は之を指圖して、頼朝に従はせ、そして自分は甲斐に往つて其處の源氏を徵し出さうと思つた。時政の長子宗時は、平井の郷まで行き、其處で伊東氏の兵に取り圍まれ、矢に中つて討死した。夜になつて時政は頼朝と杉山で會つた。箱根の別當行實はもとく頼朝と仲

が善かつた。頼朝が敗けたと聞いて、弟の永實をして、食物を贈らしめた。永實は先づ時政に會つた。時政は之を欺いて曰ふのに「大將は早や討死された」と。永實は曰ふのに「貴公は私を疑ふのですか。大將が死なれたら、貴公はどうして生き残つて居られましよう」と。時政は微笑み乍ら、頼朝に會はせた。そこで、頼朝は、箱根に匿れた。頼朝は、時政及びその次子義時をして、甲斐に行かしめ、自分は、土肥に走り、土肥遠平をして、政子を見舞はせ、舟に乗つて獵島に至つた。

**語釋** 治承(高倉天皇) ○平井卿(豆) ○獵島(安房)

時政與三浦義澄等出迎頼朝。頼朝曰「卿何以在此」。時政曰「吾命命北行。而中道自度、不親君所底、安所取信。故踪君至此。請自此行矣」。於是終抵武田。一條諸族得二萬人、助頼朝擊平氏于駿河。走之。頼朝還至相模國府、論功行賞。以時政爲首。武田信義以下次之。頼朝勅鎌倉府。政子助之於内、而時政義時輔之於外。諸將士目以北條公莫敢抗禮。

**訓讀** 時政、三浦義澄等と、出でて頼朝を迎ふ。頼朝曰く、「卿、何を以て此に在る」と。時政曰く、「吾れ命を啣みて北行す。而して中道にして自ら度るに、君の底る所を觀ざれば、安んぞ信を取る所あらん。故に君を踪して此に至れり。請ふ、此より行かん」と。是に於て、終に武田、一條の諸族に抵り、二萬人を得、頼朝を助け、



平氏を駿河に撃ちて、之を走らす。頼朝還り、相模の國府に至り、功を論じ賞を行ふ。時政を以て首と爲す。武田信義以下、之に次ぐ。頼朝、鎌倉府を創む。政子、之を内に助け、而して時政、義時、之を外に輔く。諸將士目するに、北條公を以てし、敢て抗禮する莫し。

**通釋** 時政は、三浦義澄等と共に頼朝を出迎へた。頼朝が曰ふのに「そなたは、甲斐へ行つた筈であつたのに、どうして、此處に居られるぞ」と。時政が曰ふのに「私は君の御命令を受けて北行しました。けれど途中で考へて見るには、君の落着かれるところを見極めて置かなければどこへ行つても信用されないに極つてゐます。それで君のお跡を尋ねてここまで来ました。ここへお出でなされたからは君の居所も決まりましたから、サアこれから出かけて参りませう」と。そこで時政は終に甲斐の武田一條などの諸族の處に至り、二萬人を手に入れ、頼朝を助けて、平氏を駿河の富士川で討つて、之を走らせた。頼朝は還り、相模の國府に至り、將士の功を論定して褒賞を行つた。時政の功を第一とした。武田信義以下皆之に次ぐこととした。これより頼朝は鎌倉の幕府を始めた。政子は之を内助し、時政義時は之を外から輔けた。諸將士は皆北條殿といつて敬ひ、決して之に張り合ふものはなかつた。

明年七月、政子生男。是爲頼家。立爲世子。北條氏以外祖。益貴重。陰收人心。以自固。頼朝有嬖姫。託之伏見廣綱家。時政妻牧氏知之。告政子。政子性妬悍。即使牧宗親、親廣綱宅、驅逐其姫。姫走。依大多和義久者。頼朝聞之。託事往義久宅。召宗親。罵之。

親截其髻。時政聞而恥之。不告而歸其邑。頼朝謂梶原景季曰、「江馬必不從。汝往視之。」江馬者、義時也。還報曰、「在頼朝召義時曰、「汝可託吾子孫者。」已而事釋。時政還鎌倉。被親信如初。

**訓讀** 明年七月、政子男を生む。是を頼家と爲す。立てて世子と爲す。北條氏、外祖を以て、益々貴重せられ、陰に人心を収め以て自ら固む。頼朝、嬖姫あり。之を伏見廣綱の家に託す。時政の妻牧氏、之を知り、政子に告ぐ。政子、姓妬悍、即ち牧宗親をして、廣綱の宅を毀ち、其の姫を驅逐せしむ。姫走り、大多和義久なる者に依る。頼朝、之を聞き、事に託して、義久の宅に往き、宗親を召して、之を罵り、自ら其の髻を截る。時政、聞いて之を恥ぢ、告げずして其の邑に歸る。頼朝、梶原景季に謂つて曰く、「江馬は必ず従はず。汝往いて之を視よ」と。江馬は義時なり。還り報じて曰く、「在り」と。頼朝、義時を召して曰く、「汝は吾が子孫を託す可き者なり」と。已にして事釋け、時政、鎌倉に還り、親信せらるること初めの如し。

**通釋** 翌年七月、政子が男子を生んだ。之が頼家である。立てて世嗣とした。北條氏は母方の祖父といふので益々貴重重んぜられたが、それを機にひそかに人心を取り込み、自家の基礎を固めた。頼朝には、別に寵愛してゐた女があつた。之を伏見廣綱の家に預けて置いた。時政の妻の牧の方がそれを知つて、政子に告げた。政子は、性質、嫉妬強く、且つ氣の荒い女であつたから、早速牧宗親(牧氏の父)をやつて廣綱の屋敷をぶち壊し、その女を逐ひ出させた。其の女は逃げて大多和義久といふ者の家にたよつた。頼朝、それを聞いて何かの事に事よせて、



義久の屋敷に往き、宗親を呼び寄せて罵り辱しめ自分で宗親の髻を根元から切つて終つた。時政は岳父の辱しめられたのを聞いて耻ぢ、頼朝に無断で自分の領地の北條に歸つて終つた。頼朝が梶原景季に謂つて曰ふには「江馬は屹度ついて行かないだらう。お前行つて見て来い」と。江馬とは、時政の倅の義時のことである。景季は復命して曰ふのに「やはり家に居りました」と。頼朝、義時を呼び寄せて曰ふには「お前は、親父に従はないで、予の側にある感心な男だ。將來、わが子孫をうち委すべき者である」と。その中に、事件は落着し、時政は鎌倉に戻つて、信任せられることは、初めの通りであつた。

語釋 江馬(義時江間小四郎と稱した。)

頼朝忌弟義經勇智謀除之。文治元年冬、親將擊之。京師義經奔竄、頼朝途還遣時政以千餘騎護京師。四索不獲。於是、以頼朝意奏請諸國司置守護莊園置地頭。所在追捕弗被允。時政抗辨再三、終被允。自爲七國地頭。已而辭之。當是時、大亂初平、京畿多事。時政身當其衝、事無不立辨。歲餘東歸。以詔舉從弟時定、自代亦頼朝意也。頼朝嘗獵富士野。頼家甫十二、射中走鹿。頼朝大喜、使人報之。政子曰、彼將家胃子、獲一禽、何煩專使。頼朝愧之。

訓讀 頼朝、弟義經の勇智を忌み、之を除かんと謀る。文治元年冬、親ら將として、之を京師に撃たんとす。

義經奔竄す、頼朝、途より還り、時政を遣はし、千餘騎を以て京師を護らしめ、四もに索むれども獲ず。是に於て頼朝の意を以て、奏請し、諸國司に守護を置き、莊園に地頭を置き、所在追捕せんとす。允されず。時政、抗辨すること再三、終に允され、自ら七國の地頭と爲る。已にして之を辭す。是の時に當り、大亂初めて平ぎ、京畿多事なり。時政、身ら其の衝に當り、事立どころに辨せざるは無し。歲餘にして東歸す。詔を以て、從弟時定を擧げて、自ら代らしむ。亦頼朝の意なり。頼朝、嘗て富士野に獵す。頼家甫めて十二、射て走鹿に中つ。頼朝、大に喜び、人をして之を政子に報ぜしむ。政子曰く、「彼は將家の胃子なり。一禽を獲るに、何ぞ專使を煩はさん」と。頼朝之を愧づ。

通釋 頼朝は、弟の義經が勇氣があつて智慧のあるのを嫉み、之を除いて終はうと謀つてゐた。後鳥羽天皇の文治元年の冬、親ら大將となつて、義經を京都に撃たうとした。義經は逃げ匿れた。それで頼朝は途中から、引き返し、時政を遣はし、千餘人の兵士を以て、京都を護衛させ、一方手を廻して諸方をさがさせたが、義經は見付からなかつた。そこで、時政は、頼朝の言ひついで朝廷に申上て諸國の國司には守護といふ役を置き、莊園には地頭といふものを置き、到る處罪人の追捕をさせたいと願ひ出た。然し、許されなかつた。時政は、再三押し問答の末やつとのことに許され、時政自身は七國の地頭となつた。間もなく之を辭めた。この當時、大亂がはじめて鎮定し、京都五畿内は事件が多かつた。時政は自ら引き受けて、その仕事に當り、萬事立ちどころに片附かない事はなかつた。一年餘たつて關東へ歸つた。詔によつて時政は從弟時定を擧げて自分の代りとした。これも實は頼朝の考へに本づいたものである。頼朝が嘗て富士の裾野で狩をした。頼家は、やつと十二であつたが、



走つてゐる鹿を射止めた。頼朝は大層喜び、使を遣つて、之を政子に報告せしめた。政子は曰ふのに「彼は將家の世嗣ぎである。當り前のことで、一匹の獲物があつたからとて態々その御使にも及びますまいものを」と。頼朝はこれには一本參つて愧ぢ入つた。

正治元年正月、頼朝薨、頼家立。政子削髮爲尼、而與聞政事。時政叙從五位下、任遠江守、爲政所別當。與大江廣元、三善康信、中原親能、三浦義澄、八田知家、和田義盛、比企能員、安達盛長、足立遠光、梶原景時、藤原行政、參決諸政。餘母得傳宣。頼家比企能員、安達盛長、足立遠光、梶原景時、藤原行政、參決諸政。餘母得傳宣。頼家有狎臣五人。下教曰「五人親黨、有罪勿論」。

訓讀 正治元年正月、頼朝薨じ、頼家立つ。政子、髮を削りて尼と爲り、而して政事を與かり聞く。時政、從五位下に叙せられ、遠近守に任ぜられ、政所別當と爲る。大江廣元、三善康信、中原親能、三浦義澄、八田知家、和田義盛、比企能員、安達盛長、安立遠光、梶原景時、藤原行政と、諸政を參決す。餘は傳宣を得る母からしむ。頼家、狎臣五人有り。教を下して曰く、「五人の親黨は、罪あるも論ずる勿れ」と。

通釋 正治元年正月、頼朝は歿して、頼家が立つて將軍となつた。政子は髮を剃つて、尼となり、而して、政治を與かり聞いて居た。時政は、從五位下に叙せられ、遠近守に任ぜられ、政所の別當となつた。大江廣元、三善康信、中原親能、三浦義澄、八田知家、和田義盛、比企能員、安達盛長、安立遠光、梶原景時、藤原行政とともに、諸々

の政治に立ち合ひ論決した。この外の者は、直接將軍に取り次ぐことは出来ないことにした。頼家には、お氣に入りの家來が五人あつた。命令を下して曰ふには「五人の親族は、罪があつても罰してはならぬ」と。

語釋 正治(土御門天皇)の年號。○五人(前出)

七月、參河盜起。遣安達景盛討之。景盛新買妾於京師、殊弗欲行。不得已而行。歸則頼家已奪其妾、絶愛幸之。有告景盛怨望者。頼家令五人討之。府下大擾。時頼朝薨、纔六閱月。政子急如安達氏、使使誚讓頼家。且曰「汝不聽我言、吾以身當汝箭」。頼家乃止。政子徵景盛誓書、使佐佐木盛綱齎送。頼家以和解之。因諭頼家曰「視汝近狀、倦政忘民、遠賢近佞、只聲色是溺、無禮於親戚。願少留意、勿及於悔」。頼家般樂如故。已而聽梶原景時讒、欲誅結城朝光。朝光與諸將連署抗訴。景時出奔、旋還鎌倉。時政逐之。景時終奔京師。令人追誅之。二年五月、有爭疆而訟者。頼家視其地圖、援筆抹圖中央曰「廣狹命也。不能費案檢。凡疆場之訟、以此爲準。即不厭心、不如毋爭」。

訓讀 七月、參河に盜起る。安達景盛を遣はし之を討たしむ。景盛、新に妾を京師に買ひ、殊に行くを欲せず。已むを得ずして行く。歸れば則ち頼家、已に其の妾を奪ひ、絶だ之を愛幸す。景盛、怨望すと告ぐる者あり。頼家、



五人をして之を討たしむ。府下大に擾る。時に頼朝薨じて、纔に六閏月なり。政子、急に安達氏に如き。使をして頼家を請讓せしむ。且つ曰く、「汝、我が言を聽かずんば、吾れ身を以て汝が箭に當らん」と。頼家乃ち止む。政子、景盛の誓書を徴し、佐佐木盛綱をして、齎らして頼家に送り、以て之を和解せしむ。因つて頼家を諭して曰く、「汝の近状を視るに、政に倦み、民を忘れ、賢を遠ざけ、佞を近づけ、只だ聲色に是れ蕩れ、親戚に禮なし、願はくば少しく意を留め、悔に及ぶこと勿れ」と。頼家、般樂すること故の如し。已にして梶原景時の讒を聞き、結城朝光を誅せんと欲す。朝光、諸將と連署して抗訴す。景時出奔し、旋鎌倉に還る。時政之を逐ふ。景時、終に京師に奔る。人をして追うて之を誅せしむ。二年五月、疆を争ひて訟ふる者あり。頼家、其の地圖を視て、筆を援り、圖の中央に抹して曰く、「廣狹は命なり。案檢を費す能はず。凡そ疆場の訟は、此を以て準と爲せ。即し心に厭かざれば、争ふ毋きに如かず」と。

**通釋** 七月、參河に盜賊が起つた。安達景盛を遣はして、之を討たせた。景盛は、此頃新喬に京都で妾を買つた計りなので殊に行くことを欲しなかつた。併し君命であるから止むを得ず出かけた。賊を平らげて歸つて見ると、頼家は、その妾を奪ひ取り大層寵愛して居た。景盛が頼家を怨んであると告げたものがあつた。頼家は五人の狎臣に命じて之を討たせた。鎌倉府中はそれが爲めに大騒ぎであつた。その時は、頼朝が死んでからやつと六ヶ月経つたばかりである。政子は、急いで安達氏のもとに往き、使をやつて頼家を責めさせた。且つ曰ふには「お前が若し妾の言ふことを聽かないならば、妾は、身を以てお前の矢に中つて死にませう」と。そこで、頼家は討つことを止めた。政子は景盛の謀叛しないといふ誓書を取り寄せ、佐佐木盛綱をして、頼家の所へ持つて行か

せて、和解させた。そこで、政子は、頼家を諭して曰ふには「お前の此頃の有様を見るに、政治に倦み、人民を忘れ、賢者を遠ざけ、よくない家來を近づけ、ただ音楽や女色に蕩れてばかり居り、親戚に對して禮を行はない。どうぞ、ちつと氣をつけて行を改め、後悔することのないやうにしなさい」と。併し頼家は、樂しむこと、以前の通りであつた。間もなく、頼家は、梶原景時の讒言を聞いて、結城朝光を殺さうとした。朝光は諸將と連判して、手強く訴へ出た。景時は、一時出奔して、又鎌倉に還つて來た。時政は之を逐拂つた。景時は、遂に京都に逃げた。そこで、人をやつて追つかけ之を誅せしめた。二年五月、境界を争つて訴へて來たものがあつた。頼家は、その地圖を見てゐたが筆を執つて、いきなり地圖の真中に一本の線を引いて曰ふには「廣い狭いは天命である。一一調べてある暇はない。すべて境界の訴訟事はこれを手本とせよ。若しそれで満足出來ないければはじめから争はない方が宜いのだ」と。

**語釋** 盜起(室平四郎と) ○般樂(かぎりなく樂)

建仁元年秋、大風雨。關東禾稼不登。下總海溢。民死者千人。九月、蹴鞠工紀行景至。自京師。大江廣元携謁頼家。頼家素好蹴鞠。請上皇得行景也。自是日學其技。不復視朝。義時有子、曰泰時。少有器局。密召頼家狎臣中野能成。謂曰「蹴鞠無害於事。獨不畏災異乎。故將軍每逢天變輒止出遊。是後世所當法耳。子親臣也。盍嘗試諷之。」